

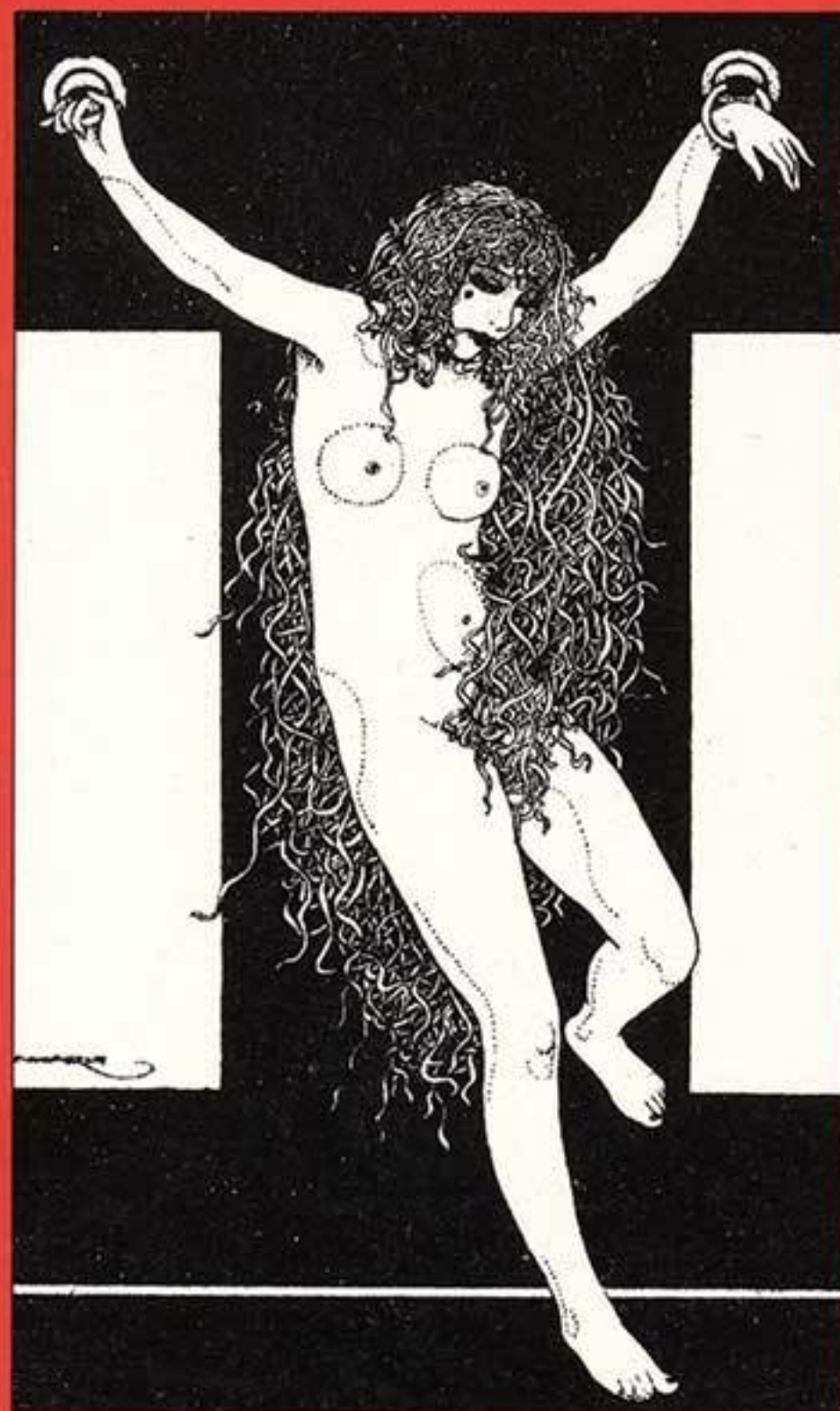
読者が創る新しい性風俗誌

# 奇譚クラブ

1982年

8

特集・旧号読者投稿作品



新連載 蜘蛛と蝶々 松山雨山・作

1982年

8月号

奇譚クラブ

昭和57年8月1日発行(毎月発行)第1巻第6号



雑誌02805-8

定価1000円

(株)きたん社発行



# 奇譚クラブ 8月号目次



競艶SMイラスト……………	(3)
懐かしの奇ク嬢たち(熱海容子)……………	(11)
蜘蛛と蝶々(松山雨山)……………	(20)
生人形地獄……………	(26)
女恵の太腿……………	(38)
淫繩狐火街道③……………	(48)
女獣飼育②……………	(56)
レスポスの園……………	(61)
梅雨の感触……………	(62)
黄金色の恍惚……………	(74)
浣腸クラブ探訪記……………	(82)
磔の美学……………	(88)
切腹一〇一首……………	(98)
禁男の家……………	(104)
SMテレホン通信……………	(110)
特集・旧号読者投稿作品……………	(114)
読者ポスト……………	(144)
投稿規定……………	(146)

## 投稿規定

### 〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニマル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真(モノクロ、カラー、ポラロイド)のある方はそえて下さい。

四百字原稿用紙2枚以上(長篇は連載)。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。

文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

### 〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇―三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載(長篇は連載)とし、規定の原稿料をお支払いします。

### 〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

### 〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品(写真を含む)の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会



S M イ ラ ス ト

# 白昼夢



桐丘裕詞・画



S M イ ラ ス ト 群 狼 の 部 屋



江戸川重郎・画



SMイラスト 怪小屋置物物



山崎無平・画



S  
M  
イ  
ラ  
ス  
ト

く  
の  
一  
恥  
虐



三  
杉  
猛  
・  
画



# 誘拐された新妻

——三浦カオリ——













# 帯地火隠

志馬 孝 文・画

彼等は狙った獲物は、あらゆる手段を窮して良に落し、ひそかにこの隠れた屋敷の中へ連れ込んでしまう。そして、そこで行なわれる彼等の狂態は本性むき出しにした強烈な責めの快楽をむさぼる獣のそれであった。美しい生贄の白い柔肌が、男の容赦ない手淫の責めに喘いで声を立てる気力も気力も失っている、無残に兩足を広げられている彼女の秘所に痛々しい草枷が装着されていた。





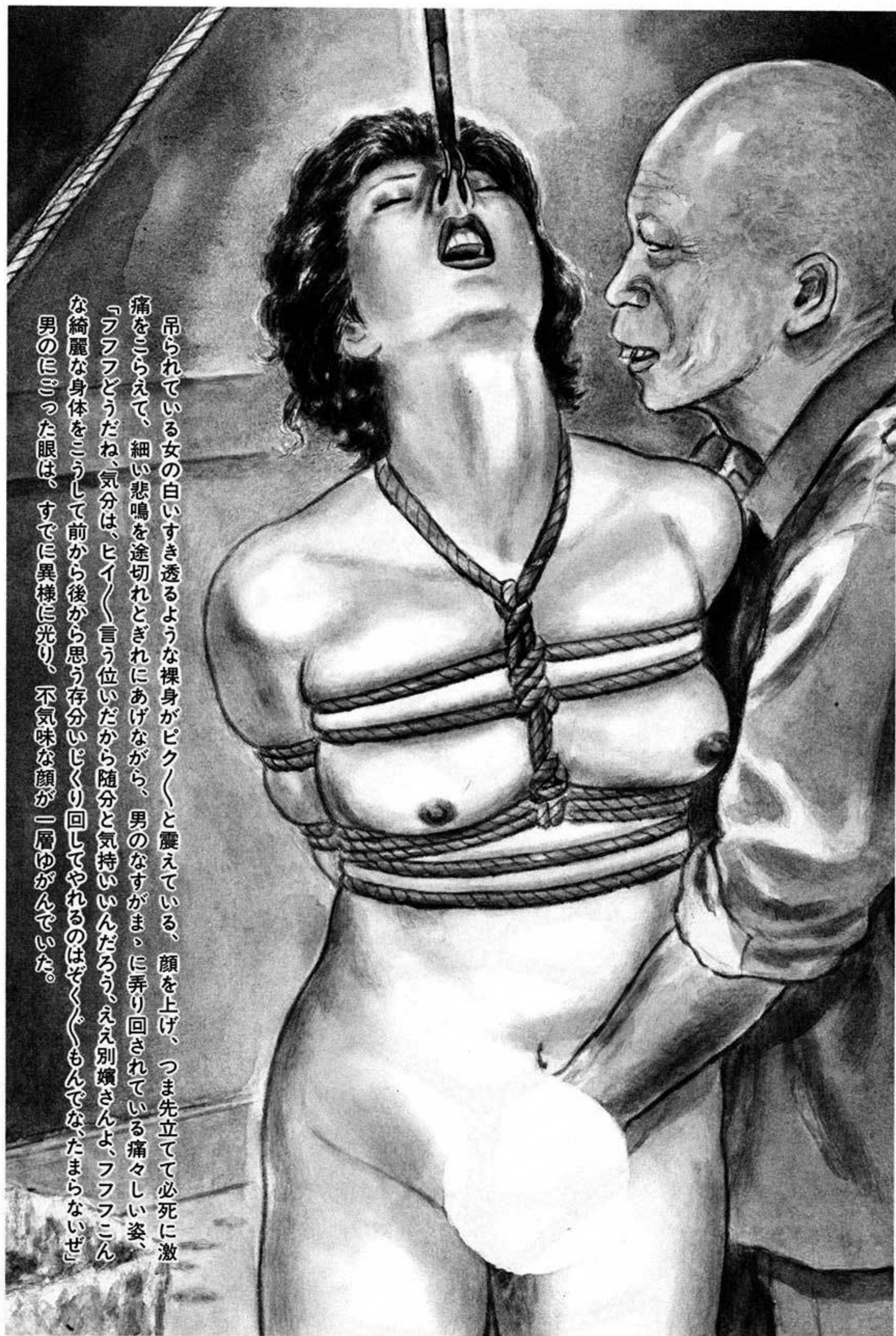


この屋敷の中へ運び込まれたら、もう彼等の思い通りになるより仕方がないのだ、いくらあがいても彼等の手から逃れる事は出来ない。しかし女は必死に抵抗し、何んとかこゝから逃げようとしたが、所詮それは無駄であった、やがて女は彼等の手で身動き出来ないように桙木に縛りつけられてしまった。

革製の拘束衣で締め上げられ、首輪を付けられている女の下半身には特製の開口バンドが装着された、苦痛に喘ぐ細い悲鳴があがる。



吊られている女の白いすき透るような裸身がピク／＼と震えている、顔を上げ、つま先立てて必死に激痛をこらえて、細い悲鳴を途切れとぎれにあげながら、男のなすがまゝに弄り回されている痛々しい姿、  
「フフフどうだね、気分は、ヒイ／＼言う位だから随分と気持ちいいんだろう、ええ別嬪さんよ、フフフこんな綺麗な身体をこうして前から後から思う存分いじくり回してやれるのはぞく／＼もんでな、たまらないぜ」  
男のにこった眼は、すでに異様に光り、不気味な顔が一層ゆがんでいた。





彼等は捕えた獲物に容赦はしなかった。美貌に輝く美沙の裸身は見る／＼厳しく縛りあげられ、白い柔肌に縄目が喰い込んでゆく、にぎった眼を光らせ、興奮の息使いを荒くさせながら、彼等は美沙の美しい顔まで、変形するくらい縛りあげていった。やがて全身を無残に縛りあげられた美沙は、その場に立たされると改めてその裸身を彼等の執拗な目でなめ回されるのだった。





革部屋と言われるその中は、むっとする異様な臭気がたぎよい、そこには彼等の誰はぼかる事のない陰湿な狂態を演じられる道具立てがすべて整えられてあつ彼等は舌なめずりしながら、美しい獲物をこの革部屋へ運び入れると、それこそしたい放題の事をして弄り、責めあげ、ヒイ／＼言はせて楽しむのであった。美しい裸身を縛りあげられ、気の遠くなるような責苦の果てに美沙は無理八理に排出させられた異臭の中に、ぐったりとなっていた。





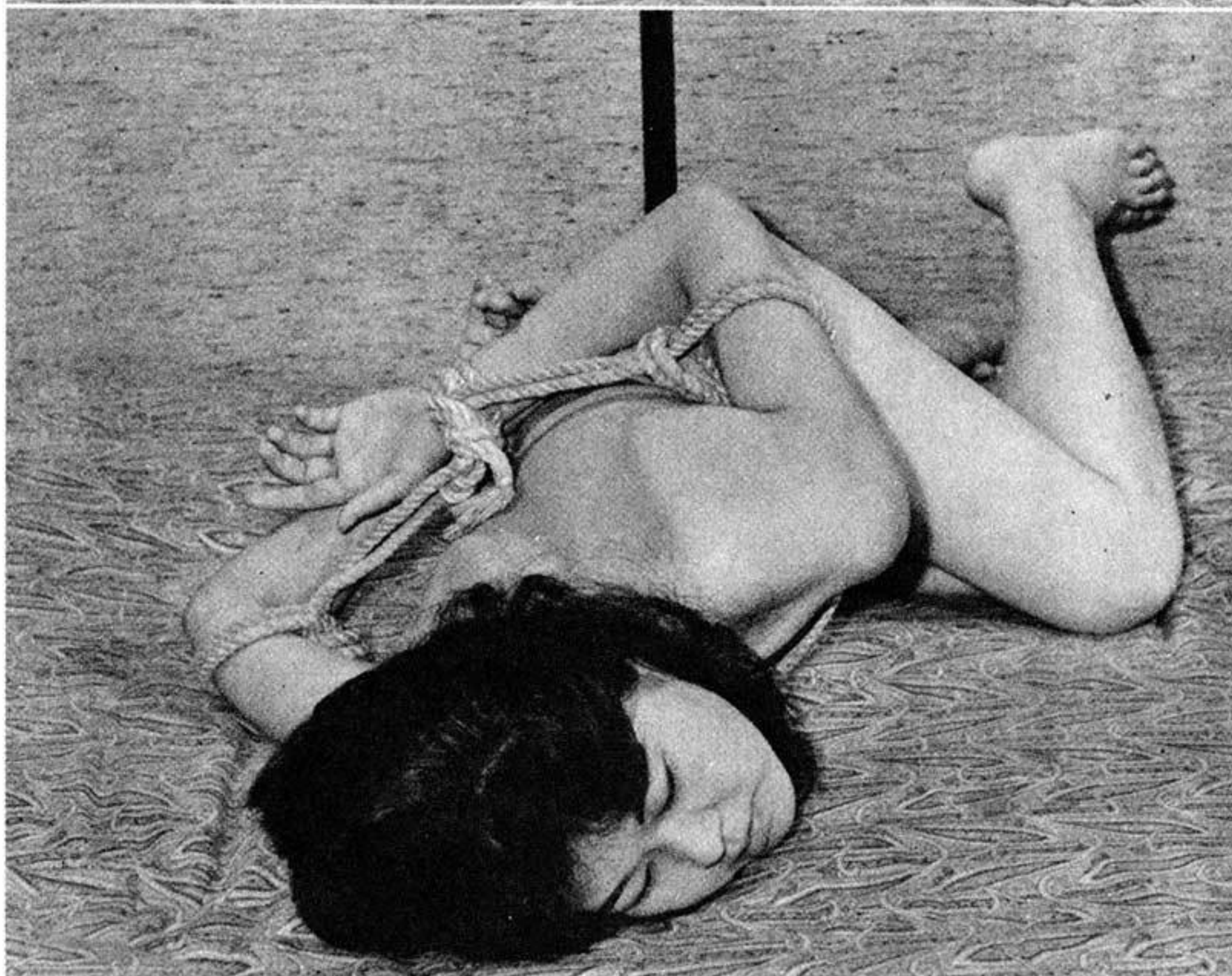
裸身の厳しい縛めから解放され、ホ  
ットする間もなく、美沙の身体はなめ  
し皮の革衣でお、われ、その上を更に  
厳しく縛りあげられてしまった、従に  
割って喰い込  
んでいる皮バ  
ンド、顔に掛  
けられている  
顔枷に異臭に  
むれている汚  
物が息もつま  
るばかりであ



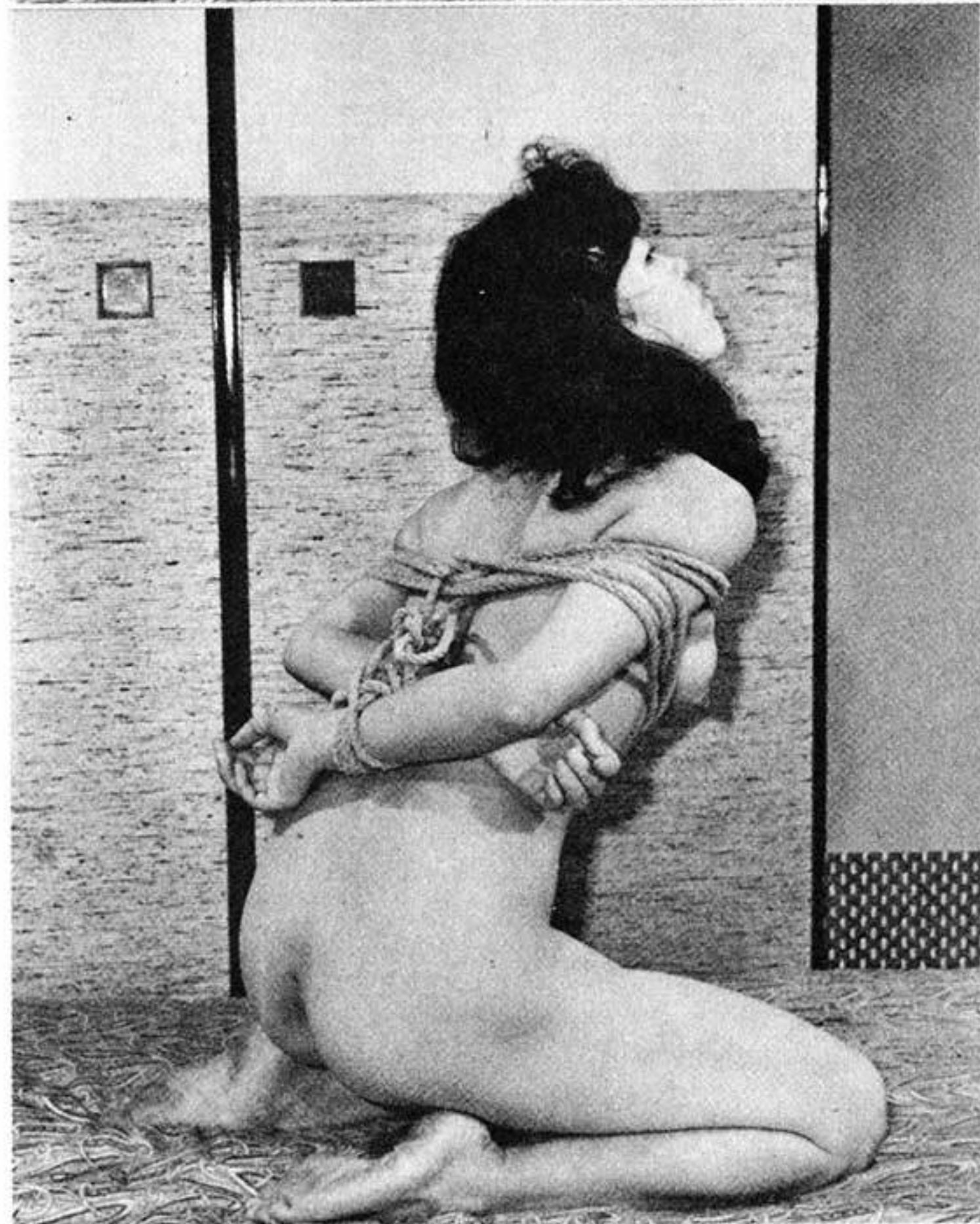


# 懐かしの奇ワ嬢たち

熱海容子







白  
肌  
供  
養





奇譚  
クラブ

1982年8月号





# 蜘蛛と蝶々

—月の巻—

松谷雨山



(一)

「鈴井さん速達—」

玄関の声を聞くと、

「はいッ／＼」

と反射的に腰をあげた久美子は、胸騒ぎのする不安を感じながら、急いで茶の間から玄関へ来ると、土間へ投込である郵便を取りあげた。速達は封書で、自分宛に成っているけれど、差出人の久里田正人—と云う名に覚えがないの

である。

(どなたかの弁護士かしら?…)

震える手で速達を持ちながら、茶の間へ引返して電灯を点けた時に、バタバタと二人の子供が駆け込んで来た。

「いやァよう、吉郎ちゃん／＼」

「僕ンだい、僕ンだい」

七つの姉を五つの弟が追っかけ廻して、大きなタオルを奪い合いながら、母親の周囲を走らせ回るのを、



「うるさいのね！ ふざけるんじゃないありません！」

子供を叱りつけた久美子は、すぐまた疳高な声で、

「姐や！ 早くお湯へ入れてやっておくれ！ 姐や！」と女中を呼びよせた。

「僕、母アちゃんとはいるんだい」

「母アさんすぐ行きますよ。お姉ちゃんと先におはいり！」久美子は、懐の速達便が気になって、子供どころではなかった。女中が二人を湯殿へ連れて行くと、人のいない二階へ急いであがって行った。

役所の贈収賄事件に連座して、三ヶ月前から、予審の未決にはいつている夫の鈴井卯吉や、同じ役所の局長、課長、そして夫の同僚などの収賄罪が、今更らのように又、久美子の心臓をしめつけた。既に罪状明白で、起訴されているのが大部分だけれども、鈴井は一番最後に召喚されたのと、問題の鈴井への贈賄者である、旭組工具店の社長草薙勇作が失踪中であり、確証もあがっていないので、鈴井は収賄を極力否認している最中であつた。その草薙は度々家へも来ているし、事件前までは可なり親しくしていたのと、夫の収賄事実を知っているだけに、久美子は事件以来、痩せるほど日夜心を痛めているのであるが、予て、夫と草薙との間には固い密約があり、万一の場合その筋の問題に成つても、お互いにこの事是否認するのだ——と夫から聞いていた久美子としては、度々警視庁で調べられた時に、「私は何も存じません」——で押通してきたのであつた。

（草薙さんが捕つたのじゃないかしら？……あの人がもし  
自白すれば？……）

と久美子は、弁護士からであろうこの速達郵便を開封して見るのが恐ろしかったけれども、二階の居間の電灯の下に立ちながら、ワナワナ震える指先きで思い切って開封すると、洋罫紙へ万年筆で書いたのは弁護士からと思いきや、意外にも、それは草薙勇作が市内の潜伏場所からよこした偽名の手紙だったのである。

「あら！」

久美子は驚きのあまり、べったりそこへ坐り込んでしまった。遠い外国か支那奥地にでも、隠れていると思つていた失踪中の草薙が、いつの間にか東京へ舞戻っているのである。

事件発覚直前から満州へ身を隠していたが、其筋の搜索厳しく、到底隠れ終せないから小生は、近日自首すべく、密かに東京へ帰つて来たが、自首前に一応拝眉の上、御打合せしておく必要があるから、至急御来車を願ひ度い——と云う万年筆の走り書きで、最後に会談方法と時間が書添えてある手紙であつた。

（自首されたらもう駄目だわ！）

絶望的な恐怖から、久美子は真青に成ってしまった。草薙の自首は、取りも直さず贈賄の事実を自白する事だから、その結果、夫の罪状は明白になり、社会的に夫の一生は葬られてしまうのは勿論、何も知らない子供達の一生までも、



どんな惨めな事になるか——を考えると、もう立っても居てもいられなかった。

××省経理局の購買課長——鈴井卯吉の住居である下目黒の家を、妻の久美子が出たのは、草薙の手紙を見てから二時間ほど後であった。すっかり平静を失った久美子であったが、子供や女中に心配させてはいけなと、強いて平静を装って入浴したり、夕飯を済してから、ちょっと御用足しに行きますから——と、二人の子供を女中にまかせて家を出たのであった。

戸外は薄ら寒い早春三月初旬の夜であった。円タクを拾って乗り込んだ久美子は、手紙に指定された荻窪まで車を走らせた。

（よくまアそれでも、今まで隠れていられたものだわ。随分御苦心なすっただろう……。）

久美子は草薙の失踪を従来感謝してただけに、厳しい搜索の目をのがれていた事や、今また密かに東京へ帰って来た苦心などが思いやられた。草薙はもう五十近い年配であるのと、万事に考え深い世馴れた人物だから、へまをやるような男ではない——とかねて夫の鈴井から聞かされた事もあり、家で初めて逢った時にも、夫の言葉を是認するほどシッカリした人物と知って安心はしているものの、組工具店の社長である御用商人の草薙が、今になってみると恨めしくなるのであった。贈賄さえしてくれなければ、こんな事にはならなかったのだ。然し、二回だけは久美子

も、はつきり知っているその収賄は、去年の中元と歳暮の二百円づつだけれど、それ以前に夫が幾ら収賄しているのか？、それは少しも分らなかった。株や遊蕩のためだろうか？、それとも現在の家を買うためであったか？、性来無口な夫からは、大抵の事は詳しく話されずにしまっているので、ハッキリしないのであった。

「どの辺ですか？」

運転手に突然声をかけられて、久美子は考え込んでいただけに、ハッと我にかえった。

「ここ荻窪ですよ？」

「ここが省線の駅前ですが？」

「あ、そう。こゝでいゝんです。御苦労様でした」

車を出た久美子は、賃銀を決めずに来たから聞くと、三円だと云うので高いと思ったけれど、運転手へ金を渡してから灯の明るい改札口とは反対の方へ七、八間歩いてくると、その小暗い所に一台停車していた円タクの中からオパーを着た若い男が出て来たと思うと、

「目黒からお越しですか？」

と尋ねられて、久美子は無言でいた。

「どうぞこの車へ……お迎えの者ですから」

「あの……久里田さんの……？」

久美子は、速達に書いてきた草薙の偽名を云って尋ねると、

「は」



と若い男は丁寧に頭を下げてから、すぐ運転台へ乗り込んだ。草薙がよこした自動車の運転手だったのである。

荻窪駅の前を離れると、あたりは無気味に暗かった。広い道路を可なり長く疾走してから、とある横路へはいった自動車が、狭い往来を幾度も曲り曲って、漸く停った所は、相当大きな構えの、誰かの別荘かと思うようなうっ蒼たる木立に囲まれた家の門前であった。

表門は真暗であったが、潜戸の前に立っていた三十位いの女中に案内されて、久美子は全身が引きしまる不安な緊張で、無言のまま女中のあとから従って行った。

## (二)

二階建ての間数が二十もあろうこの家のどの座敷も、ほとんど真暗な中に、ただ一ヶ所灯の点いている奥まった八帖の座敷に、紫檀の大きな机を隔てて桐火鉢が二つ置かれているのへ対坐して、あたりを　る低い声でひそやかに、ひどく緊張して話しているのは、草薙勇作と鈴井久美子であった。

少し白いのが混っている頭髪を短く刈込み、骨太のガッシリした体へ、八反のどてらに大島の羽織を着ている草薙は、やや蒼白な顔に髭の剃跡が青かった。一方今年三十四の久美子は小肥りの、四肢のすんなりした体を地味な縞お召に包んで、黒い無地羽織を着ている姿は、しっとりした年増

婦人の淑やかさを持っていたが、色の白い顔が一層青白く緊張しているのが、かえって一種の凄艶さを漂わしているのと、二人の子持ちと見えぬ若さの潤いと云い、束髪のように似合うぼっちゃりした丸顔は、時々じっと相手を視つめる目元表情に、善良な愛らしさが表われていた。

「：いや実に、こんどと云う今度は、実際弱りましたよ。何しろ今申上げたような工合で、上海も危い、新京もいけない：すっかり支那服で変装して、この通り髭も剃り落してしまっただけですが。いよいよいけないと知って、自首するより仕様がなないと、内地へ引返す決心はしたものの、東京へ来るまでの、その苦心は、実にどうもお話になりませんでしたよ……」

「そうでいらっしゃいましょうとも、全くお大抵じゃございませぬわ……でも、わたくし、先きほど初めてお目に掛りました時は、ちょっと分りませんでしたの。いえ、お髪を分けていらしたのや、お髭のおありになったのが、まるでお変りになっていらっしゃいますから……」

「変装のおかげで、幾らか若返りましたかな、フッフフ……」  
「ほんとに、お若くお成りですわ」

「いやどうも……。然し、奥さんも、私は、多少おやつれなすっただろうと、心配していましたがね、相変らず御綺麗だから安心しましたよ。フッフフ……」

「とんでもない。わたくしは近頃、自分でも痩せたのが分りますのよ」



「御もつともです。いや何とも申し上げようがありません……」

草薙は、痛い所へ触れたように沈黙すると、坐右に一切揃えてある紅茶道具を引よせて、空いている久美子の紅茶茶碗へ新らしく注ぎ入れた。ゆううつに成りがちの気分を転換しようとするのである。気持ちは二人とも沈み込んでいたが、熱い紅茶を沈黙の裡に啜ったあとは、草薙も久美子も、先刻この座敷で最初顔を合わせた時よりも、幾らか気分も落着いてきたらしく、蒼白であった顔に少し血の気がさしてきたのであった。

「この家は、もう十年も前に、我々の同業者の一人が経営していた旅館なんです。その男は四、五年前に亡くなったのと、その後二、三人代も変っているんですが、現在は倶楽部のようなものに成っているんですよ。然し、私は、或る人の紹介を得て、久里田と云う変名で来ているから、心配はありませんよ」

草薙は、俗に云う「お尋ね者」の現在の、不安な自分の身の上を少しでも忘れようとするのか、その家の事などを話し出したが、久美子は、それよりも気に掛る彼の自首問題へ、話を切り出して行った。

「それで、何でございますか、あなた様は明日にでも、自首なさろうと?……」

「明日……とは未だ決めちゃいませんが、所詮駄目ですから、一日も早く、自発的に出頭した方がいゝだろうと思う

んです。当局の心証も、多少違うでしょうから……然し、三ヶ月以上も、捜査に手数をかけているんだから、今更、心証もどうか分らないですが」

「いらっしゃる以上は、何も彼も仰有るんでしょね?……」  
「鈴井氏の一件は、極力口を割らないつもりですよ。私としては、山村局長と、会計課長の上田氏への件を、云ってしまうつもりなんです」

と草薙の眉宇に固い決心が閃くと、久美子の表情は不安が濃くなってきた。

「ですけど、自然主人の方の事も、山村様や上田様の口から、怪しい……なんて、出やしませんでしょうか?」

「云った所で、あの二人なども、全然知らないんだから、鈴井氏さえ、どこまでも頑張れば大丈夫だと思うんです。

……ところが、御承知の通り、調べる方はとてもうまくいから、カマをかけられて、草薙が自首したなら……と思って、鈴井氏が云ってしまわれちゃ困るが……」

「それなんですわ、草薙さん。……わたくしが案じますのは……」

「うーむ……弱ったね!……」

固く腕を組んで考え込んだ草薙は、呻吟の吐息を洩らした。

久美子は泣き出しそうな表情に成っていた。夫がカマをかけられて、自白した場合も恐ろしかったけれども、口を割らないつもり……だと云う草薙の言葉に、大きな不安を感じ



じたのであった。云わないつもりでも、場合に依っては云ってしまわねばなるまい——そうもとれる草薙の言葉なのだ。

「ね、……草薙さん……」

と久美子は、悲痛な表情で火鉢を押しつけて膝をねじらせ、蒼白に緊張した顔を向けて、喘ぎ喘ぎ思い切った決心を表わしながら、

「お願いですから、草薙さん、自首なさらないで下さい——ね？草薙さん、わたくし、一生のお願いですわ。ね？……あなた？……」

拜まんばかりの真剣な声で口走った。

「自首を止せと？……」

さすがの草薙も驚いたように沈痛な表情で、久美子の顔を見つめた。だが、力なく目を外らすと、低く言葉が続けた。

「……然し、もうこれ以上、逃げ隠れしているのが、私は苦しくて、やり切れないんですよ。満州くんだから、また引返して来たのも、スッカリ清算したくなったからですよ。実は、未だ妻子へも、此所に居るのを知らしてねいんです。捕って引かれるのはみっともないから、進んで自首する決心なんです。……幾らか罪も軽くなろうと……もうこうなれば、止むを得ませんよ、奥さん……実際お気の毒だが奥さんも、最悪の場合を覚悟していただくんですね……」

「そ……そんな事になれば……、夫や……わたくしはともかく、

子供たちが、あ……あまり可哀想で……」

「……」

「ね、草薙さん、も一度考え直して下さいませんか？……ね？、あなた？、わたくし、一生のお願いですわ、……わたくし一生の……」

あとは涙に言葉も消えて、ハンカチで顔を押えた久美子は、机の上へ顔を伏せてしまった。一家の浮沈が眼前に迫った時の、婦人の悲痛な嗚咽であった。草薙も目を閉じたまま、固く腕組みをして、身動きもしなかった。

重苦しい沈黙の、圧迫感に反抗するように、深い吐息と共に顔をあげた草薙は、充血した目で、じいっと視つめたのは、嗚咽に震えている久美子の、白い襟足であったが、

「奥さん、……折角自首を決心した私に、それをやめてくれと云われるあなたは、私を一層苦しませるようなものですよ……」

と呟いた言葉は、かすかな震えを帯びていた。(つづく)





# 生人形地獄

美保戸 実彦

あらすじ

龍二郎は名家の生れながら身をもくずし、女郎屋・天狗楼の女衞をなりわいとしている。

父親の代に親交のあった須黒男爵は龍二郎の常顧客であり、龍二郎は男爵から特別待遇を受けている。

男爵邸におもむき男爵が折檻中の奥女中小夜を罵るのを手つだい、美肉のごしようにばんにあずかる。

帰り際、屋敷の玄関にうづくまる乞食の娘を捕えて天狗楼につれ帰るが、父親は乞食姿に身をやつして仇討ちを企てていた士族の者。娘の姉はなんと天狗楼の女郎に身をおとしており、ちようど不都合があつて主人より折責を受けているところだった。



破瓜の儀式を彩どる鹿の子

「……だから……ミヤちゃんも、はやく……」

「いや、ミヤはいやです、」

二人の号泣がどっと噴き上った。がその悲痛の果てに噴き上った涙も、すぐに龍二郎の手の動きで、すぐに乱調を帯びた。

「いや、いやですっ……ああ、やめて下さいましッ……いまわ、やめて……」

訴える中に衝き上げられて、染香は生々しい呻きとともにグンと大きく反り返った。

「いく……」

切なく悩ましげな声と共に、反った白裸が激しく痙攣した。逆しまにのけぞり返した顔は恨み苦しみの果てに達した至福の境地にただよって輝くばかりの恍惚に濡れている。

「あねさま、しっかりなさってッ」

オロオロと呼びかけるミヤの声も耳に入ら

ぬげに、その体はヒクヒクと愉悦を噛みしめているのだ。

「もう、そろそろ取りかかってもいいでしよう」

龍二郎に声をかけられた弥平は、はじめて我に帰ったように、あわててよだれを手の甲で拭った。

龍二郎は染香の足のいましめを解いて布団から押しやり、代ってミヤを布団に上げて海老縛りを解いた。

「足は縛りますか」

「う、うむ」

待ちきれぬげにセカセカ帯を解きながら弥平はうなづいた。

足を姉と同じように引きはだけられて縛られ、腰枕を当てがわれても、ミヤは魂まで抜き取られたようにあらがわなかった。

「ああ、ミヤちゃん……」

後ろ手のまま髪もしとどににじり寄る姉に







も顔をそむけたまま、固く眼を閉じ、切なく胸をはずませている。

「我慢するのよ。痛いのはすぐすみすからね」

オロオロと泣く染香を、龍二郎はあぐらの上に抱き上げた。

「その眼でしかと妹が女になるところを確かめるんだぞ」

後抱きにした染香の乳ぶさをまさぐりつつ、ふたたび張形をくつろげた股の奥に咥え込ませた。

禪もはずした弥平は豚のような腹を波打たせて、ミヤの股間に這い寄った。好色な割にはチビたものを赤くおえ返らせている。

（まあミヤのような蒼い実には、あれくらいの道具がふさわしいだろう）

龍二郎は染香を責めたてて泣かせながら思った。あのまだ固い蕾が、どれだけ男を咥えたら、今なぶっている姉のようになるか。水揚げができなくとも、それを見とどける楽しみが龍二郎にはある。

（けなげに妹を教えた染香に免じて、保釈の件はカラ手形にできないな）

それに付多少自腹を切ることになってもやむを得まいと龍二郎は思っている。龍二郎にはこんなしいたげられた者に優しくなる一面

がある。もっともそれはみずからの遊びに飽食してからのことだが、

ちっちゃな乳首をねぶりまわされて、ミヤがさかんに悲鳴をあげている。人の字に開かれた稚ない体。その下に敷かれた鹿の子の長襦袢は、破瓜の儀式の唯一の彩りだった。おそらく生れてはじめて結った桃割れ髪は崩れ、緋の手絡はほどけて散っている。化粧も紅も涙とあられない口づけとに剝げ落ちて、

「いや……あねさまッ」

弥平がしやにむに重なつてゆく。年甲変もないあせりと太鼓腹にさまたげられて、なかなかつなごうとすることができない。その体に組み敷かれたかぼそい体が、まるで生殺しにでも合っているように悶える。

それを眼のあたりに見せつけられながら、染香はすでに答え力づける意志を失なっていた。龍二郎の手にしたものはいづれも女の快楽を抉ってやまず、またはじめて龍二郎の膝に抱かれたうれしさに、身も心もとろけてしまっているのだ。

「あ……かんにん……」

ガクンと白い顔がのけぞった。弥平がけものように吼えた。ようやく的を射たのだ。「いた……いた……お父さま……」

鮮血を白い股間に嗜きつつ、小さな腰が弥

平の重圧の下に押しひしがれてゆく。苦痛を訴える悲鳴が、重い呻きに変わった。

「そら、妹が一人前の女にされてゆくぜ」

龍二郎にあごをしゃくり上げられた染香は悲しみの泣き声とは別の歎き声を絞り出した。腰をゆすり、龍二郎の名を呼び続けるのだ。



生人形たちを踊らせる悦び

男爵須黒道明夫人敦子は十日ぶりに目白の屋敷に帰って来た。父加賀見子爵の看病と死、それに続く葬儀と後始末、打ち続く心労に面やつれして、夫人自身半病人のていであつた。愛のない結婚生活を送っている夫人にとって、亡き父は唯一人の心の支えでもあつたのだ。

だが、書斎に挨拶に来た夫人のそんな姿を男爵はかえって美しいと見た。公卿華族出の典雅な美貌が面やつれを宿すことでかえって、たけたものになり、丸髷の頭も重たげにうなだれている風情は、かえって嗜虐心をそそる。

「ご苦労だったな」

眼とは裏腹な優しいいたわりの言葉を、男爵は口にした。

「旦那さまにこそいろいろご苦労、ご厄介を



おかけ申しました。姉からもくれぐれもよろしくとの事でございます」

「いや、為すべきことをしただけの事だ。なにしろ男手のない子爵家のことだ、いささかさし出がましかったかもしれんが、わしが取りしきらねばならなかった」

「ありがたいことでございます。おかげさまで、加賀見子爵家の面目が立ちました」

「こう言っただけなんだが、その面目が立つた立たんかは、これから一層むずかしくなるだろう。まず債務の問題がある。それに子爵家を存続させるための後継ぎの問題がある」

「はい……」

「が、まあその事はこれからゆるゆる考えることにしよう。今夜はもう下って休みなさい」

「今後ともよしなにお力ぞえをお願い致します」

夫人はただ頭を下げて今後を頼むしかなかった。たとえ愛はなくても夫ではあり、また加賀見子爵家の存否を握っている人間なのだ。

男爵は葉巻を咥えたまま応接にうなづいていたが、夫人がドアを出かかった時、ふと思いついたように声をかけた。

「高崎くんはもう朝鮮に帰ったかね」

夫人の足がギクと止まった。しばらくそのまま凝固したようになっていたが、萎えそう

になる心をふるい立たせるように振り向いた。った。

「昨日お帰りになったとお聞きしております」  
「敦子のやつ、ああ言われては今夜は眠れん」  
夫人は蒼ざめ口ごもりがちに小さく言った。だろう

「久しぶりの帰朝だろうに、忙がしいことだな。それではゆっくり話すひまもなかったろを舐めた。」  
う」  
「フフとひとり笑いして香り高いブランデー

夫人はそんなことを言う夫の胸を探るような瞳をチラと投げかけたが、すぐ逃げるように部屋を出て行った。

（すこしは胸にこたえたらう）

男爵は一人になると、戸棚からブランデーの瓶とグラスを取り出してソファに移った。どうやって踊らすか、酔いがまわるにつれて

高崎雅彦は公爵家の次男坊で、かつて敦子男爵の妄想もふくれ上ってゆく。

夫人の恋人であった。加賀見家が栄えていればめでたく結婚ということになったのだが、恐慌のあおりで家が傾いたために、敦子とはとんど人身御供のようなかたちで須黒男爵家に嫁入らされた。その後高崎は傷心を抱いて朝鮮に渡り、総督府のかなりな地位にいます。葬式の時チラと見たきりだが、堂々たる美丈夫になって、敦子と並べたら惚れ惚れするようなカップルと目されるだろうと思われた。

夫人がまだ高崎への未練を断ち切っていないこと、久しぶりに出会ってその想いを燃え上らせたことを察しての、さっきの言葉であ



深夜妻の  
寝所に忍  
びこむ男

という夫婦の交わりを完全に拒んでいるわけではない。それは妻としての義務であった。愛のない夫の子を孕むことにおびえつた。愛のない三十を過ぎる今日まで不妊で過してこられたのだが、夫との間まで拒むことはできなかった。それは敦子夫人の倫理感が許さ



なかった。

夫人は奥の和室に一人で寝る。そして夫から呼び鈴を鳴らされた時だけ、夫の寝室におもむくのだ。それも三度に一度は体調を理由にこたわった。

その夜も敦子夫人は奥座敷に床をのべさせひとり絹の夜具に横になった。

そうして横になってから眠りに落ちるまでの間ほど、夫人にとって安らいでしあわせな時間はない。昼は胸の中に閉じ込めているものを残りなくあらわにして夢ともうつともつかぬ境地にさまようことができるからだ。ことにその夜はこの時の来るのが待ち遠しくてならなかった。

高崎雅彦——その名を思い浮かべただけで胸が妖しくときめくのを押さえることができない。二人が大学生と女学生であったとき交わしたたった一度の口づけ——その甘い思い出が、十数年後のつい昨日の出来事と重なり合って、夫人は酔ったような気持ちになった。

十数年ぶりで見える雅彦は、蒼白いインテリ青年であった時とは見違えるばかりに逞しくなり、大陸での星霜を日焼けした貌に頼もしく刻んだ美丈夫に変身していた。そしてその求愛の仕方青年の頃のためらい勝ちなのとは違って、強引であった。





「ぼくの気持ちにはあの時とちっとも変ってはいません」

人眼を盗んだ物陰で、雅彦はせきたてられるように言った。加賀見家とさして深いつながりもない雅彦が子爵の葬儀に列するためにはわざわざ朝鮮から駆けつけてきてくれたこと自体が、すでに雅彦の胸中を物語ってあまりあった。

「ぼくはまだ独身なのですよ」

白い歯を見せて笑った雅彦は、敦子の胸の裡まで射抜くような眼差しになった。子爵が亡くなった以上、夫の男爵に対する義理も消えた。今すぐにでもぼくの胸の中に飛び込んできて欲しい——とその瞳は求めていた。

そして、ポツとなっっている敦子をやにわに抱きすくめて唇を奪ったのだ。反射的にあらがった敦子も、いつしか白い腕をしっかと雅彦の逞しい頭からめつけていた——

（今頃はどこらあたりまでいらしただろう——わたしのこと、今でも想っていてくださるかしら——）

敦子夫人は身悶えるように、固い箱枕の上で寝返りを打った。

これまでも、独り寝の床で三十過ぎたばかりの肉体がうずくのを感じることがないわけではなかった。今夜はそれがことに激しいよ

うだ。あの時もし押し倒されていたら、果して拒み切ることができたかどうか。そうされなかったことが今となっては恨めしくもある。だが、雅彦は紳士の埒をそれ以上越えることはなかった。姦通罪へのおびえが情熱をはばんだというより、雅彦は自分に時を与えたのだ。敦子はそう思ったかった。

しかし、これら幸福な想い出も、心身の疲労には勝てず、いつしか敦子夫人は、しあわせな笑みを頬に刻んだまま深い眠りに落ちていった。

それからどれくらいの間時間がたったのか——夫人はふと耐え切れぬ胸苦しさに小さく呻きながら重い瞼をもたげた。

枕元の雪洞型のスタンドにボウと照らされて、男がひとりじっと自分を覗き込んでいる。男の影が襖から天井にまでくろぐろと伸びてかぶさってくるようだ。

ヒツと声をあげて上半身を起こそうとした夫人は、男の手で押しもどされた。

「夫のわしを、どうしてこわがる」

「だ、旦那さま……」

ホツと肩を落とすと同時に、新たな恐怖が起こった。夫人は布団の下でもがいた。

「なんだ、その顔は、夢の中の男と違ってガツカリしたようだな」

男爵は口髭をふるわせて低く笑ったが、その眼は笑わなかった。

「どうなさったのでございますか。ご用ならばお呼び下されば、わたくしが……」

「疲れているのに呼び寄せるのも気の毒と思ったのだ」

「でも、ここでは……隣には小夜が……」

夫の眼つきがいつも自分を見る眼と違うのにおびえをつのらせながら、夫人は何とか急場をしのぎとした。

「わたしたちは夫婦だ。夫婦のすることを誰に聞かれようと、はばかりことはない」

男爵はそう言うのと、ガウンを脱ぎ捨てて、パジャマ姿になった。

小間使いのお小夜は、どんな深夜でも奥様の用に応じられるように隣室に寝る。今もすでに気配を聞いて眼を覚ましているに違いない。それを承知でおそったのだ。夫人の留守の間じゅう、夜ごとお小夜は男爵の寝室に呼びつけられて、淫虐きわまる責めの生贄にされ続けた。今ではすっかり骨抜きにされて、奥様付きの小間使いの身でありながら、男爵の言いなりである。

が、その事を夫人は夢にも知らない。





### 哀訴する 夫人に襲 いかかる

「お願いでございます。是非ないとおっしゃられるのなら、すぐ支度してお二階へ参りますから」

声を殺して必死に哀訴する夫人の体から、男爵は掛布団を剥ぎ取った。

「な、なにをなさいますッ」

「亭主が女房を可愛がろうというのに、何をするとはいふんだ」

男爵は、白い練絹の寝衣の襟元を押さえてすくんだ敦子夫人におそいかかった。

「ああ、無体なことは……」

箱枕をはずれた丸髻が押しひしゃげたが、それでも構わず敦子夫人は激しくあらがった。まるで暴漢にでも襲われたようなあらがいようである。腕を突っ張り、裾が割れて白い脛が剥き出しになるのも忘れて、下肢をバタつかせた。

「どうしてもいやか」

「……今夜だけは……疲れておりますので……それに隣には小夜もおります……」

「フン」

男爵はかたくなに拒む体を突き離して立ち上った。力づくで抱こうと思えばできないわ

けではなかったが、男爵には別の意図があった。

お小夜の寝ている隣室の襖を大きく引き開けると、電灯のスイッチを入れた。お小夜はすでに隣室の騒動に眠りを覚まされて、布団の中にもぐり込んで慄えている。その布団を男爵は引きめくった。悲鳴が起こった。

「あ、あなた、小夜に何をなさいます」

「お前の代りに夜伽をさせるのだ」

「そのようなご無体は……」

「また無体か」

男爵は、赤い長襦袢姿を小さく丸めて慄えているお小夜にのしかかった。ここ十日ばかりの間に男爵のおそろしさを骨身に知らされているお小夜は、はかばかしい抵抗もできずに、たちまち帯紐を抜き取られ、長襦袢をむしり取られ、緋の湯文字一枚に剣かれた。

「おゆるし下さいまし……おゆるしを……」

胸を抱えてうずくまるその腕を背中に捻じり上げられたお小夜は血を吐くように叫んだ。

「旦那さまッ」

見かねた敦子夫人が敷居越しににじり寄ってきた。

「それほどまでにおっしゃるのなら、わたくしがお二階に参ります……」

「もうおそいわ」

しごきを後ろ手に重ね合わせたお小夜の手首に巻きつけながら、男爵は振り向きもせずに行った。この修羅場こそ男爵が目論んだものであった。

後ろ手に縛り上げたお小夜を布団の上に突き転ばせておいて、男爵はパジャマを脱いだ。二人の女に見せびらかすように禪もはずした。修羅場にのぞんで男爵の股間はまがましいまでに昂まっている。そうやって仁王立ちにせられるみやびやかさは片鱗もなく、馬喰にもまがう野卑な精気に満ちあふれている。ハイカラな縁無し眼鏡がどこか場違いの感だ。敦子夫人は、あっと小さな声をあげて顔をそむけた。長年にわたる結婚生活にもかかわらず、夫人は夫のものをこれほどあからさまに眼にしたことがなかったのだ。房事は常に薄暗がりの中で、掛布団の下で行なわれた。夫人自身がそれを望んだのだ。男女とも肌をあらわにして互を見ながら行なうなど、夫人のつつしみが許さなかった。妻はただ夫の子種を宿してその家の家系を絶やさぬ事こそ第一のつとめで、そこから過度の快楽をむさぼることはみだらなことで教えられていた。

男爵は夫人のそんな時代おくれのつつしみを嘲笑いながら、老子爵へのはばかりもあつ



て今日まで夫人の言いなりにしてきた。だが老子爵亡きいま、誰はばかりとところなく、思ひどおりの妻に仕上げるのだ。

男爵は夫人の狼狽ぶりを尻目に、お小夜の腰巻をはずしにかかった。お小夜の悲鳴が夫人の萎えかけた気持ちに突き刺さった。

「どうか小夜にそのようなご無体は……小夜はまだ未通女なのです……」

「そうかな」

男爵は眼鏡を光らせてニヤリと笑った。

「お前の留守の間、書生の寺田と乳繰り合っていたようだぞ。現にそれ、長襦袢を引っぱがした時、懷から何やら結び文が飛び出しおった。」

男爵は腰巻の紐をほどく手を、畳に伸ばして、そこに落ちていた結び文を拾い上げた。さっきから眼をつけていたものだ。寺田はお小夜と一緒に地下室の檻から出してやったのだ、

男爵が結び文をほどこいて読み出すのを見てお小夜は身を揉んで泣き出した。

案の定、それは寺田からのものであった。

走り書きに自分の気持ちは変らぬことを訴え今この屋敷から出て行くのは逃げ出すのではなくて、復讐の力を養うためだと言いわけしていた。

「ホレ、密通がばれそうになったので、尻に帆を上げて逃げ出しおったわ」

男爵に手紙を突きつけられた夫人は手に取ったが、読む気にならなかった。お小夜を可愛がっていた夫人は、裏切られたような気持ちになった。付け文を胸に抱いて寝ていたことだけで十分であった。

真つ赤な腰巻が悶え泣くお小夜の腰からむしり取られ、真つ白な腰がさらけ出された。

「どうだ、いかにも男と腰を振り合ったと言わんばかりの腰つきだろうが」

ピシピシ腰をしげきながら、男爵は高笑った。

「惚れ合った男と女は、どんな監視をつけてもその隙をくぐるコツを心得よる。お前にしてもわしの眼を盗んで高崎としんねこといっのおだろうが」

「それはあまりな言いがかりでございます。わたしと高崎さまとは何も……」

「なかったのか？それはさぞ心残りなことだったろう。わしをあれほど拒んだのは、その心残りのせいだな」

「……」

男爵は丸裸のお小夜をあぐらの上に引きずり上げて、しごきでくびられた小さな乳ぶさを揉みたてだした。悶えるお小夜の白い腰の

下に赤黒い怒張がひしゃげ、それが今にもたおやかなお小夜の体を突きとおさんばかりに思える。

敦子夫人の眼の前が真つ赤になった。

「たった今、り、離縁をお願いいたします」  
畳を掻きむしらんばかりになって、口走った。

が、男爵は平然として、お小夜の股の間に手をさし入れながら、

「それもよからう。だが、高崎には加賀見家を救うだけの財力はないぞ。屋敷を差し押さえられて、姉と姪が路頭に迷うことになってもいいのかな？もつとも、あの美しさなら、拾い手はすぐにも現れようがな。レッキとした子爵家の奥方と令嬢が、どこの馬の骨ともわからぬ男の妾に身を随とすとか」

敦子夫人は身を揉んでワツと泣き伏した。

妻の見て

る前で下

女を弄ぶ



男爵はお小夜を布団の上に仰向けに押し転がして股を割った。昨日まで日に何度となく貫いてきた体だ。すでに新鮮味を失なっていたが、必死に屈辱に耐えている妻に対する当て馬としては申し分なかった。

お小夜は死んだようになすがままだ。奥さ



まの前にこんな羞ずかしい姿にされて、まだ稚ない心は動転し、この十日間に加えられた苛責を奥さまに訴える気力とて失なっている。

また訴えることができたにしても、その後の男爵の報復のおそろしさを思うと、ただ泣いて悶えるしかなかった。

「……わたくし、失礼させていただきます」  
遂に耐えかねた敦子夫人は裾をひるがえして立ち上ろうとした。

「どこへ行く」

男爵がすばやく裾をとらえた。夫人はあゝと両手を疊についた。

「勝手なまねはさせんぞ」

「お、おはなし下さいまし。あんまりでございますっ」

「あんまりかどうか、この夜が明ける前に思い知らせてやる」

お小夜の体を放り出した男爵は、夫人を羽掻い締めにする、細腕を背中に捻じり上げた。

「な、なにをなさいますっ」

「主人の言うことを訊けない妻に、ちと痛い目を見てもらおうというのだ」

男爵は片手で夫人の手を捻じり上げておいて、片手を脱ぎ捨てたガウンに伸ばし、ポケットからかねて用意のロープの束を引き出し

た。それを見て夫人の顔色が変わった。

「お、お縛りになるのですか、このわたくしを」

「そうとも、なんだその眼は」

「纏など用意なさって、はじめからそのおつもりだったのですね」

「いずれ間男したことを白状させるためだ」

「それは、あなたの邪推でございます。わたくしは何もしておりません」

「そうかな？その体に訊けばすぐにわかることだ」

男爵は押し伏せるようにして両腕をギリギリ背中に捻じり上げた。夫人は真っ赤になつて悲鳴をあげた。縄目の恥を受ける——考えただけで身ぶるいが出るほどのおぞましさだ。

「わたくしは何もしておりません。お願いですから、このようなことは……」

手首をギリギリ縛られてゆきながら、夫人は白絹にくるまれた身をよじりたてた。が、男爵は無言だ。長年連れ添ってきて、その気位の高さにホトホト手を焼いていた男爵は、

この時が来るのを千秋の思いで待ちこがれていたのだ。自然眼は血走り、手に力がこもった。

寝衣の上からではあったが胸元に縄が掛けられ、ギリギリ乳ぶさを引き絞られだすと、

夫人の屈辱はさらにつのった。根の崩れた丸髻をゆさぶり、嘔吐を吐くような呻きを上げた。

男爵は縛り終えた夫人を引きずって、縄尻を寢室の床柱につないだ。

「そこでじっくりと本当の男女の交わりを見ていろ」

男爵はお小夜を抱いて来て、夫人の夜具の上に横たえた。床柱につながれた夫人のすぐ眼の前である。

「さあ、小夜、奥さまにいい声を聞かせてやれ」

ああつと悲鳴をあげて縮かまろうとするお小夜の足首を両手に掴んで、引きはだけた「「ちよつと暗いな」

男爵は小夜の白い股の間に横を入れたまま体を起こして天井の無灯の紐を引いた。まばゆいばかりの明りが、真上からお小夜の裸形を照らし上げた。柔かな恥毛をそそけ立たせた丘も、その陰に開き切った割れ目も、白日のもとにさらけ出された。夫人はヒイと喉を絞って顔をそむけた。

男爵はお小夜の下肢を腹の上に折り曲げて怒張を柔かく熱を含んだ割れ目に押し当て、剥き出しの襪をまさぐるように動かした。

「おゆるし下さいまし……」



お小夜はかぼそく泣いて、腰をゆすったがそれはまるで受け入れたがってむずついてい  
るように見えた。男爵はお小夜の下肢を肩に  
かつぎ上げ、根を握り、鈴口でわずかに頂点  
をのぞかせている核をゆっくり擦った。

「ああ……」

お小夜は肩に掛けられた下肢をヒクつかせ  
ながら、にわかに息づかいを昂ぶらせた。十  
日間にあたる間断のない調教で、稚ないな  
らお小夜の体はいたぶりに敏感に反応するよ  
うになってしまっている。

「……奥さまの前で、こんな……おゆるし……」

泣きながら核をくすぐられる心地よさに、  
ふとよがり声が洩れ、腰が無意識にうごめき  
出すのをどうしようもないといった風情だ。  
せわしなく喘ぐ鳩尾に汗が光り出すと同時に  
開き切った鮮紅色の肉襞にもねっとり光が  
宿りはじめた。時折、カクンカクンと腰を衝  
き上げる動きさえ見せる。

「どうだ、小夜。奥さまに気がねすることは  
ないぞ。入れて欲しければ、せいっぱい甘  
い声でせがんでみい」

男爵は核の先端をクリクリ擦りながう、二  
本そろえた指を差し入れた。ビショビショに  
濡れた肉がおののくようにならみついてきた。





ゆっくり動かしやると、お小夜は稚い淫声を羞ずかしげに上げながら、腰を使いだす。

「敦子、この音が聞こえるか。子供だと思っ  
ていたら、すっかり一人前の女になり切っ  
ているぞ」

敦子夫人はきつく首を捻じり、ヒタと腰を  
合わせて、ブルブル慄えている。が、ふさぐ  
ことの不可能な耳は、はっきりとお小夜の熱  
い息の乱れや猫がミルクを舐めるような物音  
を聞き取っている。おまけに女の匂いまでが  
鼻にとどきだした。

「どうだ、まだ言わぬか」

男爵は、夫人の首すじがボウと染まりだし  
たのを眺めやりながら、淫液にまみれた指を  
菊の蕾に当てがった。

「あ、そこは……お手が汚れます……」

「可愛いことを云う。小夜のものなら汚ない  
ことはないぞ。それ、こうされればどうだ」

「あ……旦那さまっ」

イイとばかり首を反り返したお小夜は、  
肩に乗せ上げられた足の爪先をピンと突っ  
張らせた。まだ男爵のものを受け入れるまで  
には至っていないものの、そこから快感を得  
る体にされてしまっているのだ。

男爵の指がゆるみ切った菊の蕾にゆっくり  
埋まってゆくにつれて、お小夜はなまなまし

いばかりのよがり泣きを噴きこぼしはじめた。  
「敦子、聞いているか、これが女の出す真実  
の声だ。お前はお小夜にも劣るぞ」

敦子夫人は払いのけようとするかのように  
激しくかぶりを振った。

「フフ、お前にとってはおぞまし過ぎるか。  
しかし、お前とて女だ。体の底にひそむもの  
がむずつきだしておろうが」

男爵は指を抽送させつつ、ふたたびしこり  
切った核を擦り上げはじめた。お小夜が歎き  
ながら頭を振りはじめた。

「ああ、もう……」

つらそうに喉を絞る。

「もう何だ」

「奥さまのものだからといって遠慮すること  
はないぞ。恋しい寺田のものと思え」

「……さ、小夜の……お、お×××に、旦那  
さまのを……入れて……下さい、まし……」

この時のために男爵が執拗に教え込んでお  
いた言葉を、数にお小夜は口にした。

「よし、可愛いぞ、お小夜。うんと楽しむ  
がいい」

「ヒイッ……ああ、旦那さまっ、いいッ」

ズンと腰を衝き入れられたお小夜は、奥さ  
まに対する後めたさも忘れ果てて、愛らしい  
よがり声を絞りたてつつ、ズリ上った。肩か

## SMモデル募集 年令・容姿不問

あなたのおひまな時に、モデルの  
アルバイトをしませんか。一時間に  
つき一万円お支払いします。応募の  
秘密は厳重に守りますので、写真同  
封のうえ手紙で連絡して下さい。

〔宛先〕

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F 株式会社 加藤ビル

現代芸術研究会

らはずされた下肢で、キリキリと男爵の腰に  
からみついた。

「お、お小夜、恥をお知りなさいッ」

敦子夫人が耐えかねて叱咤したが、すでに  
お小夜は狂っていた。おゆるし、おゆるしと  
口走りながら、思うように動いてくれない男  
爵に焦れて、自分からぐいぐい腰を衝き上げ  
る。

男爵は、稚いだけにいちずな溺れ込みよう  
をしっかと組み伏せつつ、ゆっくりお小夜の  
息づかいに合わせて責め上げていく。お小夜  
の弱い所を知り尽くした上で、じわじわと追  
いつめてゆくのだ。案の定、お小夜は間もな  
くヒイヒイ歎きつつ、総身を震わせはじめた。  
濡れた眼尻を引き寄せ、イイッとはかりほ  
つれ毛を噛みしめてのけぞる。

「あ、旦那さまっ……小夜は、もう、つきま



す……あれ、もうッ」

つい十日前は無垢の乙女だったとは思えぬ  
よがりようだ。それでも男爵はすぐには許し  
てやらず、ツボをはずしたり、浅くしたりし  
て焦らしたて、遂には息もできぬまでに追い  
込んだ。

「あ、変になりますッ……あッ、あッ」

汗まみれの体を揉みに揉んで悲鳴に近いよ  
がり泣きをあげつつ、お小夜はしとどに奥さ  
まの褥を淫液で汚してゆく。

「そら、いかしてやるぞ、思い切り声を上げ  
い」

「ヒイーツ……いくッ、あ、いくッ」

ブルブルッと総身を痙攣させると同時に、  
男爵を啜えてドロドロにとろけた秘肉をキリ  
キリ収縮させた。収縮させつつ子壺の口を押  
しつける。そのぬるぬるした感じがたまらず  
男爵はドッとはかりはじけた。

「ヒイーツ」

ガクンと弓なりに反ったお小夜はさらに激  
しい痙攣の口で泡を噴きつつ、悶絶してしま  
った。



おどろに  
乱れた黒  
髪の魅力

「これが本当の男女の交わりというものだ。

よくわかったろう」

男爵は褥で汚れを拭きながら、いましめの  
胸を喘がせている敦子夫人を振り返った。鬚  
をガククリ崩してふかぶかとうなだれたその  
うなおっしやりようは、高崎さまを侮辱する  
ものです」

「フフ、間男などいくら侮辱してもよいわ」

男爵は夫人の襟元をグイと掻きくつろげた。  
まとった白絹にも劣らぬ雪の胸肌があらわに  
なった。さらに肩も剥いて、そこにヒタと唇  
を押しつけた。悶える下肢が寝衣の裾から脛  
まであらわになった。

「今夜こそ、本当の女の悦びに泣きわめかせ  
てやるぞ」

きつい縄目の間から、ふくよかな乳ぶさを  
掴み出しながら、男爵は高らかに宣言した。  
まだ放心のていのお小夜は畳の上に放り出  
され、その悦びのしたたりに汚れたシーツの  
上に、敦子夫人が押し転がされた。

「ああッ」

縮かまろうとする下肢をとらえて、男爵は  
引き伸ばし、引きはだけた。片方の足首に縄  
を手早く巻きつけ、それを布団の下にくぐら  
せ、反対側から出した縄尻に、もう一方の足  
首を縛った。夫人は練絹の寝衣の裾を大きく  
はだけて人の字なりに固定されたのだ。

「お、おゆるし下さいましッ、このような浅  
間しい……」

夫人は髪をおどろに振り乱して、泣き叫ぶ。  
「いまにもっと浅間しい思いをさせてやる」  
うなじにはうっすら汗をかいて、ほつれ毛を  
貼りつかせている。そんな乱れ髪の妻をあか  
らさまな明りのもとで見るのは、男爵にもこ  
れが初めてであった。これからの楽しみに口  
元がほころぶのを押さえようがない。

「汗をかいているところを見ると、少しは女  
の情を感じたようだな」

「お、おゆるし下さいまし……」

肩に手をかけられた夫人は激しく身を揉ん  
だ。

「わしにはつれないそぶりしか見せんが、恋  
しい男にこうされた時には、飼猫のように  
鼻を鳴らしてしなだれかかっていったのだろ  
うが」

男爵は夫人の胸に触れて悲鳴と身悶えを絞  
り取りながら、柱につないだ縄尻をほどいた。  
逃げようともがく体をガッシリ抱きすくめた。  
「いや……いやでございますッ」  
そむける首すじに口を押しつけた。桜色に  
火照らせた耳たぶを噛んだ。

(つづく)



—— 芸能SM小説・最終回 ——

# 百恵の太腿

そろそろトウが立ってきたタレント歌手が失地回復のため芸能プロデューサーに肉体を投げ出す。しかししたたかな仕事師は先頃人気絶頂時に結婚引退した山内百恵を復帰させる為の淫靡な計画に往年のアイドル歌手を利用しようとする。

笛吹童子

## 夜の会話

テレビの画面には、ホテルの一室らしいベッドルームが写されている。まもなく、二人の男女が現われ、ベッドの前で立ったまま、キスを交わす。

「おや」

見ている者は、二人の顔を見て瞠目する。そして、次にこれは映画かテレビドラマの一場面ではないかと思う。ガウンを着た女が歌手の柳田留美子で、相手の男が一昨年あのスーパースター山内百恵とゴールインした新浦智和だからである。

が、やがてそれが映画の撮影ややらせではないことに気づく。

—— 智和はグラスの中のブランデーを口に含むと、あらためて仰向けた留美子の口の中に注ぎ込んで唇を重ねた。唾液でネットリとしたブランデーを呑み込んだ留美子は腕を首に巻きつけて、積極的に唇を貪るように吸い、熱い柔かい舌をさし入れて絡ませてくる。男を熟知した、巧みな、ねばっこい接吻だった。

（少なくとも百恵よりは上手だ。いや、キスだけじゃなく、ベッドのテクニクは）

そう呟きながら、智和は苦笑した。

（俺も図々しくなったもんだ。五日前、初めてこの熟れきった肢体をもて余した美人歌手とやるときは、百恵に対する後ろめたさを感じていたのに、今じゃ百恵の反応と比べて楽しんでるんだから）

留美子から部屋に電話がかかってきたのは、五日前の晩だった。

「智和さん？ 私、ええ、留美子よ。今、お酒呑んでるの、一人で。眠れないのよ。よかったらこっちへきて一緒に呑まない？」

少し酔っているらしく、媚びるような甘い声だった。こんな時間に電話をよこすのも意外なら、彼女がこのような自ら男を誘うのも全く意外だった。

智和の先入観では、柳田留美子はたしかにスタイルがよく美人で、近ごろヒット曲がないものの、実力を持った一流歌手だが、芸能人の中でも人一倍プライドが高く、気丈で、親しみを持てるタイプではないと思っていたのだ。

が、京都での撮影が始まってから、智和はそのイメージを完全に裏切られた。撮影所での留美子は気さくで明るく、とくに共演相手の智和には仕事を離れても何かと話しかけてき、智和にしても悪い気はしなかった。



今日はベッドシーンの撮影があったが、新人女優は別にして、すでに名のある女優はほとんど全裸になるということはないのだが留美子は自ら監督に申し出、胸はもちろん、パンティも着けずに前バリのみに挑んだのである。

ある程度予想はしていたものの、裸になった留美子の曲線は溜息が出るほど優美で、悩ましかった。胸もとで揺れる乳房は崩れるどころか、先端の薄桃色の果実をツンと反り返らせて、豊かな盛り上りを見せ、それに続く張りつめた腹部と蜂のようにくびれた腰、そして息づまるようなカーブのヒップラインと、そこから伸びるスラリとした脚――。

下肢の不恰好なまでの雄大さでは百恵の方が上だが、均整のとれたプロポーションや、小股の切れ上った下半身、さらに三十を迎えようとして、いよいよ熟れて官能味をムンムンと匂わせる肌は、見ていて息苦しくなるほどである。

まわりをスタッフや監督に取り囲まれ、カメラを向けられているとは云え、その爛熟した体で迫られ、唇を押しつけられ、身悶えを見せつけられては、妙な気分にならない方がおかしい。実際、本番の最中も、智和は演技よりも、昂ってくるものを押さえる方に懸命





だった。

そういうことがあった、その夜だけに、智和の方にも知らず知らず下心が湧いてくる。  
「ね、来て下さらない？ 今なら誰にも見つからないわよ」

「――」

本当に誘っているのか、智和は首をひねった。

「それとも百恵さんへのつまらない義理立て？」

「彼女とは関係ないね」

ブッキラ棒に答えてから、

「ただ、貴女がどこまで僕につき合えと云っているのか、わからなくてね」

「そこまで女に云わせるものじゃないわ。そういうことは全てなり行きよ。美しい男と女がいて、お互い愛し合える相手が傍にいない寂しい思いをしてる。その二人を今、電話線が結んでいる。あとのことは、わからないわ」

「じゃあ、貴女がここへ電話をかけたのは偶然でわけかい」

「そうね、貴女と私がこうして同じホテルにいるってことが素晴らしい偶然だわ」

「たしかにそうかもしれない。だけど、僕はこの偶然をもっと素晴らしい思い出にする方法

を知っている」

「聞かせて」

「今すぐ電話を切って、お互い自分の部屋のベッドにもぐり込むことさ」

「夢のない人ね。ガッカリだわ」

間もなく電話は切れた。

智和は寝酒に水割を舐めてからベッドに入った。が、眠れなかった。一週間近く、百恵と離れていると、どうしても欲望は出口を求めて込み上げてくる。とくに今夜は、数時間前柳田留美子をこの腕に抱いて、ベッドシーンを演じたあとだけになおさらだった。

耳の奥には、甘く潤いのある留美子の声が残っている。誘いを断るべきではなかったかな――そういった後悔は、受話器を置いたときから、胸の中に拡がっていた。さらに、彼女の最後の言葉が、智和のプライドを傷つけた。

週刊誌やテレビ等の中傷はもちろん相手にしてないが、同じ芸能人にまで見下されるのは面白くない。夢のない人ね、ということとは、つまり浮気の一つもできないで、勇気のない人ねという意味である。

不意に起き上った智和は、部屋の明りをつけて、鏡をのぞき込んだ。眉目秀麗、端整な甘いマスク。

（俺は新浦智和だ。断じて『山内百恵の亭主』じゃない）

そう呟くと、ウイスキーの瓶を一本ぶら下げて部屋を出た。

## 甘美な唇

お互いの口の中を、歯の裏側まで舌で味わうと、留美子はその場に跪いて、智和のズボンの前を開いた。五分の状態にあるものを、大切な物を扱うようにとり出すなり、形のよい肉感的な唇の間に咥え込んだ。

熱い肌触わりと、吸着力、そして舌の微妙なうごきは心憎いばかりで、留美子はさらに誰に習ったのか、左手は幹にそえ、もう一方は三本の指で袋を揉みながら、小指をアヌスに当てがって、男の官能を燃え立たせる。

しかも、特徴ある小鼻とエラを一段と脹らませて、昂ったものを吸い、前後に顔をうごかす表情には、自らその舌触りを楽しんでいるようなところがある。

百恵もときどきやってはくれるがこれほど巧みで、熱心なやり方ではない。あの五日前の夜から、毎晩のようにこうして留美子と会っているのも、その熟練したテクニックと、もう一つは愛情などと云う一見美しいようだ



が、わずらわしくもあるものから解放されて、訊ねた。そして、先端を挟間に押しつけたま  
お互い一人の男と女になりきり、純粋な肉の  
悦びに浸れるからだった。

「裸になってベッドの上に四つん這いになれ  
よ」

グラスに残ったブランデーを一気に呻って、

智和はブラウン管やスクリーンでは、ついぞ  
見せたことのないヤクザな口調で云った。

ガウンを肩から脱ぎ捨てた留美子は、むし  
ろ切長の眼を妖しく輝かせながら、云われる  
ままベッドの上にあがって、両手をついた。

そして、踊りでシェイプアップされた形のよ  
い豊かなヒップをこちらに向けて、獣のスタ  
イルをとった。

白い二つの丘陵の間には、女の羞恥が薄ら  
開いた二枚の唇の挟間から、淫靡に濡れ光る  
粘液を滲ませているのが見える。

（もう濡らしてやがる。このマゾ女め）

智和は留美子の腰に手をおくと、

「指で開いてみろ」

「ああ、許して——」

喘ぐように云いながらも、留美子の指は内  
腿の方から伸びて、クレバスをくつろげる。

「こいつが欲しいか、え、留美子」

しなやかに反る背を見つめ、いつのまにか  
彼の方も妖しい昂りに煽られて、強い口調で

「欲しけりや、お願いしてみろ」

「お願いです、ご主人様、どうか卑しい奴隷  
の留美子を、ご主人様の逞しいもので存分に  
お馴れ下さい」

一気に、荒々しく、智和は熱い杭を突きす  
すめていった。この瞬間だった。百恵とでは  
決して味わえぬ、征服し、相手を自由に操る  
悦びに浸れたのは。

彼は細い眼の奥にギラギラとした光を湛え  
て、留美子のヒップの割れ目へピストン運動  
を送り込んでいく——

テレビの画面には、智和をしっかりと咥え  
込み、出入りするたびにピンクの襷が捲れる  
留美子の女体の園が、はっきりと写し出され  
ている。

「やめてっ、お願いです」

ソファに両手を縛られて座っていた百恵は、  
とうとう我慢できなくなって、はげしく頭を  
ふりながら叫んだ。その憂いを含んだ目には、  
熱く光るものが湛えられている。

（これは何かの間違いだわ。きっと智和に似  
た別人よ。それでなかったら、私は悪い夢を  
見てるんだわ）

画面を見ながらそう自分に云いきかせてい

たが、画面の中の智和が下半身を剥き出すと、  
百恵の淡い希望は無残に崩れ去った。

「どうだね、感想は？」

にんまりと笑みを浮べて、酒田は百恵の前  
に来て云った。

「こいつは君が我々の百恵カムバックの計画  
を最後まで拒んだので、ある機関に頼んで入  
手したものなんだ。実際、君はよくガンバッ  
たよ。十日間も我々の責めを受け、臓物を晒  
し、人妻としての慎しみを忘れて、何度もよ  
ろこびに達し、さらに大小の排泄物まで晒し  
ながらも、心までは我々に許さず、屈しなか  
った。神のようだね。」

これはまったく驚異的なことだよ。それは  
恐らく君には素晴らしい心の支えがあったか  
らだ、智和君という愛する夫がね。しかし、  
それもさっきまでのことだ。そうじゃないか  
ね。君が我々の責めを受けている間、君の支  
えにしていた智和君は柳田留美子とお楽しみ  
の最中だったんだ。しかも、君が我々を罵し  
る変態的なやり方でね」

酒田の言葉はまったく凶星と云ってよかつ  
た。彼らの言語を超えた屈辱の責めの中で、  
痺れるような官能の悦びに浸りながらも、  
百恵は智和の姿を脳裡から忘れたことはなか  
った。



それだけに京都から帰ってきた智和と、久しぶりに夫婦の契りを結んだときも、夫に対する申し訳のなさ、後ろめたさを感じないわけにはいかなかったのである。それがどうだろう。智和の方も、同様の負い目があったのだ。なのに、帰ってきてからの智和は、そんなことはおくびにも出さず、平然とこれまでと同じ生活を続けているのである。

（彼のことは、全て、心の底までわかっているつもりだったのに——）

失望して、充血した目の百恵の口もとには、しかし、いつのまにか淡い自虐的な笑みが浮んでいた。

「さ、来たまえ。そろそろ出掛けないと、大事なお客を待たせることになる。そこで、君にはこの書類にサインしてもらう。新浦百恵が山内百恵となって、カムバックするという契約書にね」

## Uターン

松方の運転する車に乗せられ、百恵は十分ほど走った酒田の豪邸へ連れて行かれた。二階の一室に通されると、壁際に置かれた化粧台で、入念に顔を整えるよう命じられた。一体何が始まるのか——しかし、今の百恵

には、もうそんなことはどうでもよかった。今はむしろ、自分をメチャクチャにしてくれるものが欲しかった。

「さ、お客様も全員そろった」

部屋に入ってきた松方は、鎖のついた犬の首輪を百恵の首にはめて云った。

「今夜の客は、お前がカムバックするにはどうしてもその力が必要な方ばかりだ。ま、せいぜい素直に命令に従うことだな」

ああ、またこの男たちの淫靡で執こい責めを受けねばならないのか、と百恵は臉を伏せて思ったが、

「カムバックするなんてまだ云ってないわ」

「何を云ってるんだ。あんたに残された道はカムバックしかないんだぜ。例え、あんたが間抜けな亭主を許したとしても、そうなれば例のビデオは世間に出まわるだろうし、そうなりやアイツの役者としての生命はなくなる。それに、あんただって世間から本番ポルノ女優と見られるよりは、スーパースターとして迎えられた方がいいだろう」

「皮肉なものね。虚飾だらけの穢らしい芸能界が嫌になって引退したと云うのに、今度はもっとひどい目にあって芸能界に逃げ込まなくちゃならないなんて」

淡々とした調子で百恵は云った。

「何、今度はピンハネの好きなプロダクションじゃなくて、新しいところへ入るんだ、そうそうひどい使い方はしないさ。何しろ、この社長は俺なんだから」

松方に連れられて、百恵は隣の部屋へ入った。

中には酒田の他、四人の男が集まってい、顔を覆面で隠して酒を呑んでいる。百恵が入ってくるなり、その眼は綺麗に化粧し、黒いドレッシーなワンピースを着た百恵に注がれた。

「みなさん、お待たせしました。今秋カムバックすることになった山内百恵の入場です」

アナウンサーみたいな調子で松方が云うと、百恵は指示通りに頭を下げ、

「どうぞ、よろしくお願いします」

そう云って、連中を見渡した。はつきりはわからないが、覆面を被った四人は、作曲家、作詞家、映画監督、ベテランの芸能レポーターなどに違いない。

「あとで一人ずつに、挨拶させますが、ま、とりあえず今はこのくらいにして、私の方からもお願いしますよ」

酒田はそう云うと、松方に合図を送った。

松方は頷き、

「さあ、先生方に服を脱いで裸をお見せする





んだ」

鎖を持ったまま云う。

百恵はしばらく困惑の表情を浮べていたが、やがて観念したように瞼を閉じ、両手を背中のホックへ伸ばした。

黒いドレスは丸い肩から、黒い下着を着けた肢体を露にして、ふわりと足もとに落ちた。ブラジャーとパンティに加え、あの太い円柱のように逞しく、重量感のある太腿には、ストッキングを吊り上げるガーターがきっちり喰い込んでいる。

フロントホックのブラカップを開くと、先端のよくとがった乳房が顔を出す。そのピンクの乳うん辺りに、わずかだが鳥肌が立っている。

が、それにしても、こうして覆面の男たちに見守られながら、裸になる度胸は大したもののである。

「パンティだよ、百恵ちゃん」

酒田が声を掛けた。

躊躇いながら、百恵は指をパンティのゴムにかけて、するすると脱いだ。さすがに、その指先は小さく震えている。

「手をどけて、よくお見せするんだ」

松方が鎖を引っばって、鋭い声で命じた。百恵は乳房を覆っていた腕と、両肢の付根を



隠していた手を、舐の両脇に下ろした。

黒いガーターに縁どられるようにして、丸く若々しい腹とそれに続く漆黒の翳りが、ムツとくる濃密な官能美を湛えている。その逆三角形の叢の中心には、ピンクのクレバスが走り、ぴったりと付け合わされた太腿の奥へと消えている。

「足を開くんだ。そして腰を下ろしてみろ」

云われるまま、百恵は太い脚を開くと、膝をガニ股に広げて、その場にしゃがみ込んだ。この二週間余り、百恵は羞恥と屈辱のどろ沼に喘ぎ続けてきたが、今はむしろ、自らその中に身を投じてしまいたいような気持ちだった。

本当なら、顔を覆いたいほどの恥ずかしさだったが、百恵はあえて両手を膝の上にのせたまま、己の羞恥を晒すように、客たちの方へ美しい面を向けた。

連中の目は、その若妻となつて一段と美しくなった美貌と、ムッチリと肉をのせた太腿の奥で、叢に囲まれながら貝のように二枚の唇を閉ざしている、薄桃色のクレバスへと交互に注がれた。

「指で開いて、よくお見せしろ」

「は、はい」

今度は羞恥ではなく、妖しい興奮に指先を

震わせ、クレバスを左右にくつろげた。

「お願いしてみろ」

鎖を上を引いて、松方が云った。

「どうぞ、ご覧になって」

叫ぶように云って、百恵は一層大きく花卉を押し開いた。すると、内部のピンクの襞には、いつのまにかネトリとした樹液があふれ出し指先を濡らし始めた。

「どうです、先生方。山内百恵は露出狂のマジヒストだと云ったこと、嘘じゃなかったでしょう。もっとも、ここまで仕込むにはずい分と苦労しましたがね」

自慢気に酒田が説明したが、他の覆面を被った四人は、そんな言葉も半分耳に入らず、百恵の痴態に喰い入るように見入っている。

それはそうだろう。かつて、デビューの頃他の新人歌手とは違って、断じて舐を許そうとしなかった百恵、スーパースターとなり、やがて結婚とともに引退して、全く手の届かないところへ行った百恵が、今ガーターストッキングだけの悩ましい姿で、ストリップバーさながらに特出しを演じているのだ。

「さて、眺めてばかりじゃ面白くないでしょう。お一人ずつ別室で楽しんでもらいますから、順番を決めておきましょう。」

四人はさっそくジャンケンをして、順番を

決めた。

勝ったのは、背の高いスーツを着込んだ男だった。

松方に鎖を引かれた百恵は四つん這いになって、男の足もとへ歩いて行き、

「どうか、よろしくお願いします」

と、爪先に額を押しつけるようにして、挨拶する。

男は松方から鎖を受け取り、

「さ、こい」

百恵をドアの方へ連れていく。

## 裸の散歩

四人の覆面の男たちは、それぞれ好みのやり方で、百恵の体を弄んだ。

ある者は百恵の背中に馬乗りになり、鎖をたずな代りにしてヒップを叩きながら、部屋中を歩きまわらせたり、ある者は逆に馬になって、背中に百恵を乗せ、苛めて下さいと懇願するのだ。はてには、バスルームへ行き、裸で仰向けになった口の中へ、排尿して欲しいと云うのである。

四人目の男が部屋を出て行くと、百恵はさすがに疲労してベッドの上に、俯ぶせになった。けれども、もともと早熟で、若妻となつ



て今まさに二十三の女盛りの肉体は、その倒錯した愛戯の余韻に酔い痴れ、痺れるような甘美な感覚に、開いた太腿の奥のクレバスから、熱い悦びの果汁をとともなくたれ流していた。

（もっと責められたい。もっと激しくて、羞しくて、嫌らしいことを命令して欲しい）

ほとんど脂汗に薄らと美貌を上気させながら、百恵は心の底からマゾヒストとして、徹底的に凌辱されたいと願っていた。

そして、彼らはその期待を裏切らなかった。

「さてこれが山内百恵がカムバックする際の契約書だ」

酒田は、例の四人の前へ百恵を呼び、そこで書類を差し出した。

「お前のかせぎは、全て我々のものとなり、仕事でも私生活の面でも、完全な奴隷となつて、我々の命令に従うこと。そして、逆った場合は、いかなる罰を受けても一切文句は云わないと云うことが、書かれてある。もちろん、命もその保障の限りではない。いいかね、百恵」

「は、はい」

何か敬虔なものでも見るような目で、百恵はその書類を眺め、ペンを渡されると、スラスラとサインした。

「よし、これで山内百恵は完全に我々のものになったわけだ。一つ乾杯と行こうじゃないか。そのあとで、例のやつを——」

酒田が云うと、彼らはそれぞれ目を見交わして、ニンマリと笑った。

ガーター・ストッキングを付けただけの百恵の肢体には、縄が乳房の上下からはじまつて、張りのある腹部、股間の羞恥の花園を通り、ヒップの割れ目へと、乳色の餅肌に吸い着くようにキッチリと巻きつけられた。

「さ、出かけよう」

酒田が首輪についた鎖を引き、その百恵の後を松方と他の四人がぞろぞろとついて、部屋を出、邸の外へと出た。百恵の躰には、肩からコートがかけられているとは云え、夜目にも首輪をつけた若い女が戸外を歩く姿は異様である。

他の四人は覆面を脱いで、代りにサンングラスをかけている。

玄関の前で、松方の運転するリンカーンに乗り込んで、街へ向った。

車が止まったのは、人通りの多い繁華街である。

「さ、少し外の風に当たるといい」

松方を残して、外の者は百恵とともに車を降りた。

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、繩師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

（株）きたん社内

現代芸術研究会



ひとかたまりになっては目立つから、鎖を持った酒田のあとを、他の四人が適当な間隔をおいて歩いていく。

初めのうちこそ、首輪に気づく者は少なかったが、一人がすれ違いざま驚いてふり返ると、まわりの者も訝るような視線を向けてくる。それでも、この都会では他人に対してそれ以上の関心を示すことはないのが普通である。

が、今ばかりはそうも無関心を装ってはいなかった。と云うのも、中年男に鎖を引かれ首輪をつけたまま、俯き加減に歩いている彼女が、スーパースター山内百恵にそっくりだからである。

すれ違う人々に顔をのぞき込まれる羞しさは、たまらなかった。ましてや、コートの下にはガーターストッキングと細しか身につけていないのだ。

けれども、百恵は五分と歩かぬうちに、体の芯を甘くジーンと疼かせ、縄を咥え込んだ身体の一部をしっかりと潤おわせていた。

自分でも何がかかわらなかつた。ただこうして往來の人々の中を恥ずかしい恰好で歩かされているだけで、妖しいまでの、突き上げるような悦びが、身も心も快美に溶かしてくるのだ。





しばらく百恵を引きずりまわした酒田は、いったんリンカーンに戻ると、コートを剥ぎ股間の縄を緩めた。

「ケツを突き出すんだ」

百恵の頭を押さえつけ、シートの上に四つん這いにさせると、そのまろやかな双臀の谷間で咲く蕾にイチジク浣腸を二つ三つと注入した。

再びコートを羽織った姿で連れ出すと、酒田は人通りのまばらな路地へ連れて行き、電柱を背に鎖で固定した。

「せ、先生」

狼狽した声を上げる百恵に、  
「声は出さない方がいい。君が山内百恵だとは知られたくないだろう」

そう言うなり、羽織っていたコートを剥ぎとって、すぐ傍に停めたリンカーンに乗り込んで姿を消してしまったのだ。

夜とは云え、緊縛された若い女が路地に立っていて、人目を引かぬはずがなかった。

三分と立たぬうちに、百恵のまわりには黒山の人だかりとなって、好奇と驚きの目差しが集中した。

「山内百恵じゃないか？」

誰がいったのか、たちまち人々の中にざわめきが起った。が、もちろん似ているとは思

っても、まさかあの百恵ちゃんが——と、誰もが半信半疑でいる。

（助けて、お願い）

心の中で叫びながら、しかし、百恵は先ほども増して軀の一部が熱く潤うのを、止めようがなかった。

中には助けてやろうと、進み出て来る者がいたが、サングラスを掛けた例の四人の一人が、

「これは映画の撮影なんです」

といって、うまく制した。

百恵の面には、いつの間にかじっとり脂汗が浮び上っていた。面ばかりではない、縄によってぐっとせり出した乳房の表面や背、脇腹や内腿の間までが、ねっとり汗に濡れ光っている。

すでに便意はぬきさしならぬところまで、迫ってきていた。

そんな百恵の苦悩を知ってか知らずか、まわりを取り囲む人垣は、美貌を歪めて、美しく張りつめた豊満な肢体を身悶えさせる姿をじっと見守っている。

不意に体の内部がよごれるような激痛におそれ、百恵は後ろ手に縛られた裸身をその場に沈めた。

カチカチと奥歯が鳴り、白い熟れた体がブ

ルブルと震えた。

と、次の瞬間、激しい無様な音を立てながら、しゃがみ込んだ足の間には、ドロドロと水のような黄金の固まりが飛び散った。百恵は、その恥辱のどろ沼の中で、得も言われぬ陶酔に巻き込まれ、例えこのまま死んでもかまわないとさえ思うのだった。

その年の芸能界には、二つの大きな出来事が記録された。

一つは新浦智和と離婚した山内百恵が秘にカムバックし、再び大旋風を巻き起したこと。もう一つは、この五年ほどヒット曲から見離されていた柳田留美子が、後半、レコード会社を移籍し、最初に出した歌が大ヒットして、見事その年のレコード大賞を受賞したことがある。

（完結）





美濃村 晃

伝記

# 淫縄狐火街道

第三回

小日向一夢・画

〈前号までのあらすじ〉

慶安六年八月二十日、公儀隠密井関半九郎は、隠密旅の途次ふとしたことから丹波福知山四万五千石の城主稲葉淡路守紀通の発狂自刃を知る。稲葉家城代家老の黒岩図書は藩主発狂自刃の場合は稲葉家は廃絶となることを察知して藩の御用金三万両を、由良ヶ岳山中の赤洞山に埋めたのだった。その隠し金の絵図面を城代家老に預けられた狐火のお紺は、お家再興のために絵図を江戸の本家に届けに行くことになる。

## 三枚の絵図面

「なにッ！お紺のほか二人の腰元がそれぞれ絵図を持って江戸へ発ったと申すのかッ！」

隠密番頭井関半九郎は、この草津の宿の本陣である田中屋の一部屋で辰造から知らせをうけて、今更のように驚いた。

「ううむ。その二人の腰元を江戸へやってはならぬ。お紺を含めて三枚の絵図をみんなこちらへ取り上げてしまうのじゃッ！」

「へ、へえ……」

「隠し金の絵図を江戸に持ちこませてはならぬ。ふふふふッ。その三萬両の隠し金、江戸の稲葉本家に渡すより……のう辰造。われわれの物にしたほうが、ずっと天下万民のためになるうぞ……ふふ、ふふふッ」

「えーッ！す、すると、あの金は、こっちへいたただくんで？……へ、へへへッ」

辰造、思いもかけぬ話で腰が抜けそうである。井関半九郎は、三萬両の稲葉家復興資金を横盗りしようというのだ。





「ふむ。あの隠し金が稲葉本家の手に渡りさえしなければ大公儀のおためになるのだ。いっそのことわれわれの自由にしてしまうほうが、どれほど天下の為になるか。のう辰造、そうは思わぬか？」

「へえッ。す、するってえと、あの二人の腰元は……あ、あの……」

辰造の考えていることは、福知山藩選りすぐりの美女だという二人の腰元のことだったのだ。

「なに？女か。女はお前のいいようにしろ」

「へえッ！ それじゃあ、お紺を入れて三人の女は、あっしに下さるんで？へ、へへへッこいつはありがてえやッ、へ、へへへッ」

辰造は、元の稼業が女を売り買いしていた奴だけに、女三人を好きにしたいと云われると、とび上るようにして喜びやがった。

「ふむ。喜ぶのはまだ早いぞ。女を自由にしていいのは、三萬両の絵図を全部揃えてからじゃッ」

半九郎に釘をさされて辰造は、考えこんだ。



「さあて、福知山藩を出た二人の腰元を探すとすると……どのあたりがいいかな……」

と、腕をこまねいた。

## 魔の手

「おい。待ちなよッ。おねえさんようッ」  
と、二組の駕籠屋が、街道を通る旅人の前に立ちふさがって邪魔をしていた。

ここは、京へ上る旅人の最後の宿場、大津の近くだった。京から東に向って下れば最初の宿場となる。

札の辻から左折して逢坂山へ向かう宿端黒門には西の柵型見付があった。その柵型見付をたまり場所にして、見るからに街道あらしの雲助と見えるかご屋が、美しい旅の武家娘二人にからんでいるのだった。

「女だけの旅とあなどって、無礼なッ」  
若い方の娘は、若いだけに気負い立っていた。もう一人の、少し年かさに見える方の娘は、若い方をなだめていた。

「まあ、小雪どの。いいではありませんせ

ぬか。口さがない下郎の申すことじゃ、聞き捨てて行きましようッ」

「なにッ！口さがない下郎だと？聞き捨てて行きましようだと？へッ！おれたちを何だと思ってやがるんだいッ。足弱の女旅だと思ふから、かごに乗せてやろうと云ってるんじゃないかよ」

二組のかご屋は、あきらかに姉妹とも見える旅の武家娘を、鴨にしようとななどってかかっていた。この男たちは、たとえ昼めし代になる鳥目にでもありつければ、それでよかったのである。

兄い株の権太が出したちよっかいの手が、小雪の腰に触れたことから事は起ったのであった。

「許さぬッ」

小雪は、胸にさした守り刀の紐を手速く解いて、斜にかまえた。

「ほう。おもしれえ、やるのかッケ、へへ許さぬだとッ。おめえ、何さまだと思つてやがるんだい」

権太が云いつのると、小雪は顔色を蒼くして、声をあらげる。

「ぶ、無礼なッ！下郎のたわごとと思ひ、聞かぬつもりで過ごそうとしてい

たのに何たる雑言！われわれは、丹州福知山四万五千石の稲葉家……」

「小雪ッ。おやめなさいッ。名もない小者を相手に名乗るほどのことがありますかッ」

必死に止めたが、権太の奴は耳に入れていやがった。

「へッ。丹州福知山の稲葉さまと云やあ、この間殿さまが気がふれてお取りつぶしになった大名じゃあねえのか。お公儀からお取りつぶしになった大名の家来がこんなところにうろうろしていやがるぜえ。大わらいだあ……」

「わ、はははッ！あにきよう、この女は稲荷のお山の狐じゃあねえかい？二人とも人間の女のように見えねえぜ」  
「そうだそうだ！人間の女でなきゃあ素っ裸にして尻っぽがあるかどうか見てやろうじゃあねえかッ」

小雪にしても浪路にしても、稲葉家随一の美女と云われた腰元たちだった。その二人が城代家老の命をうけて埋蔵金の絵図を持って中仙道を江戸に下るのだ。

この二人の美女に魔の手が迫らぬはずがなかった。



本陣の肥前屋は鍋島侯のお定め本陣。

播磨屋は間口十間二尺四寸、奥行三十間、建坪百坪。播磨屋は間口十三間五尺、奥行三十間、建坪二百四十坪。脇本陣富田屋も右に比してなんらの遜色もなかった。むしろ屋敷坪では肥前屋の三百二十五坪を若干凌駕している。

その脇本陣富田屋の裏庭にある土蔵の中に、二人の女が閉じこめられていた。宿場外れの枳型見付で雲助にからまれていた小雪と浪路という二人の旅の武家娘だった。

「意外なッ！た、誰か居られませぬか！浪路さま！なぜにこのようなことに……？」

と、小雪は訳もわからない事のなりゆきにあたりを見まわした。富田屋の土蔵の中は森閑としていて金網窓の外からは庭の樹々にむらがる蟬時雨が聞えていた。

「……………ン、小雪どの、お怪我はなにか。気をたしかにッ」

浪路の声を聞いてやっと人心地がついたが小雪は、あらためて自分の姿に気がついて、今更のようにおどろいた。「あッ！こ、これは？どうしたこと？」

身動きもできないのも道理で、小雪と浪路の二人はうしろ手に縛られて土蔵の床に敷いた荒むしろの上に転がされていたのだった。

## 土蔵の中で

「ふ、ふふふッ。どうやら気がついたようじゃな」

そんなことをつぶやきながら土蔵の中へ入ってきたのは、この脇本陣富田屋の番頭の八助だった。

「あッ！ぶ、無礼なッ！」

小雪は、紫矢絰の着物の裾の乱れを気にしながら身を起して男を睨みすえた。

「おっとっと。そうして手足を縛られてしまっているんだ。おとなしくしたほうが身のためですぜ。へ、へへへッ」

「な、何者ですかッ！私達をこんな所へ閉じこめて手足の自由を奪い、どうしようというのですッ！」

気丈な浪路が、眦を決して抗議をした。

「わたしは、この脇本陣の番頭で八助と云う者じゃがな。まず、痛い目に逢

いたくなければお前さん方二人の名前を聞かせてもらいたいものじゃな、ふ、ふふふッ」

八助は、かご屋の権太の知らせで井関半九郎が手配をして探している稲葉家の二人の腰元が、逢坂山の枳型見付にいることを知ったのだった。

二人の腰元が絵図面を持った小雪と浪路であれば、あとは人眼につかない場所に拉致して隠し金の絵図面を取り上げてしまうことだった。

「云いな。名前を言いな！おい、聞えてるのかよう」

八助に訊かれると浪路は縛られた身体を悶えて叫んだ。

「そ、そなた達に名乗る名など、ありませぬッ！」

「けへッ！気の強い娘だぜ。へへへッ。いくら云いたくなくっても、こちらにゃあ、いくらでもやり方があるんだぞ。おのぞみなら着ているものを全部ひんむいて真っ裸にして責めてやろうか！しばらく若え女の肌を見てねえからたのしみなことだな……ふふふッ」

と、八助は好色そうな眼を光らせて、浪路と小雪の着物に包まれたおしりを



ピタピタと叩いた。

## 絵図面しらべ

「ああ、浪路さまッ。た、たすけてッ！  
こんな姿でわたしたちは、どうなるの  
でございますか？ あーッ、うむッ」  
「う、うッ、小雪どのッ。気をたしか  
に持つのじゃ、どんなことがあっても  
あの絵図面のことはしゃべってはなり  
ませんよッ！」

年かさの浪路は、若い小雪が八助な  
どの拷問に負けて絵図面の秘密を口外  
することを心配していたのだった。

浪路も小雪も二人揃って腰のもの一  
枚の半裸に剥がれてしまっていた。

その、腰のもの一枚にされた姿のま  
まで二人はうしろ手に縛られてしまっ  
ているのである。

豊かな乳房が、縄に締められて歪ん  
でいた。

さっき八助がこの土蔵を出てゆくと  
き捨てぜりふを残していったのを浪路  
は思い出していた。

「……お前たちの名前が、浪路と小  
雪だということは判っているんだ。ふ、

ふふッ、そんなに不思議そうな顔を  
することはないさ。あの、逢坂山の枡  
型見付で権太に自分から名を云ったじ  
ゃないか、ふふふッ」

「あッ！」

小雪は臍をかむ思いだった。あのと  
きうっかり口走ってしまったことを今  
になって後悔している。八助は続けた。  
「へへ、わかったかい。おかげでかわ  
い姉ちゃんを痛めつけて名前を吐か  
せるお遊びは一時取りやめになったが、  
まだまだこれから調べることは山ほど  
あるんだ。まず、持っているはずの絵  
図面をいただくことにしようかッ！」

と云い捨てて八助は二人の衣類を引  
っ剥いで、

「念のためだ、縛っておくことにしよ  
うかい」

と、腰のもの一枚にした浪路と小雪  
をうしろ手に縛り上げて、剥ぎ取った  
衣類を持って土蔵を出ていったのだっ  
た。

「あッ！あの着物の中にあの男たちの  
目ざす絵図面が無いとわかったらッ！」

と、浪路は気がついてハッとした。

あの三枚の絵図面は、そのうちの二

枚をお紺が持ち、あとの二枚を浪路と  
小雪が肌身につけて持っているはずだ  
ったが、浪路はふと思いたって福知山  
を発つとき誰にも知られない場所に自  
分に渡された絵図面を隠したのだった。

その事は仲の良い小雪にも話してい  
ない。

「ちくしょうッ。おれたちをバカにし  
ようと云うんだなッ！」

と、八助と権太が土蔵に入ってきて云  
った。

「おいッ！絵図面はどこへやったんだよ  
うッ」

「あッ！そ、それは……あ、あの」

まずあわてふためいた態度に出した  
小雪がにらまれる。

「おいッ！おめえの持つてる絵図面を  
出しなよッ！」

「あーッ！」

権太の手が、たった一枚の小雪の腰  
の布にかかって、グイッとまくり上げ  
る。

「あッ！な、なんということをッ！お  
のれッ！理不尽なッ！」

「て、へへへッ。腰巻きをまくり上  
げたら理不尽だときやがる。じゃあケ



ツの穴を見たらお手討ちかい。え、へへへッ、おめえは案外と濃いほうだなあ……ケ、へへへへ」

権太め、目尻を下げてみだらな眼つきを小雪の股の間に向けながらよろよろと寄ってくる。

「下郎ノ寄るでないッ……む、無念ッ」

浪路は小谷流れ小太刀の名手だった。縛られてさえいなければこんな男の一人や二人はものの数ではなかったはずだった。

「ええい、口惜しいッ」

「へへッ。おめえも腰巻きを剥いでほしいのかッ」

「さっき持っていた衣類を襟の中まで破いて調べたんだが、絵図面らしいものは出てこなかったぜ。さあこうなったら、おめえ達の身の皮を剥がしてでも探し出してやるんだ。絵図面をどこに隠しやがったか白状しろ」

八助と権太は、井関半九郎に雇われている奴らだった。早くからこの街道すじに網を張っていて、お紺を捕えた辰造と共に連絡をとり、はからずも稲葉家の名を出した浪路と小雪をかねて用意してあった脇本陣の富田屋の土蔵

に拉致したのだった。

### 好色責め

ピシリッ

「うーッ」

パシーッ

「ひいーッ」

土蔵の梁から、浪路の身体は吊されていた。うしろ手に縛られ背後にツイだ縄が浪路を高々と吊り上げていた。浪路は、身に一糸もまとっていない、素ッ裸にされているのだった。

八助が、吊り下げた浪路の裸身を手にした鞭で打ち叩いているのだ。

「……どうだ。少しは骨身にこたえたか。そうして両足を拡げてもがく姿を下から見ながら鞭をふるうのは久しぶりにたまらねえ気持だぜ……へ、へへへ」

「あッ！なんという非道なッ」

「へへ。こうして吊るした女の股倉を下から眺めながら責めるのは、テへへへッ！いいながめだなあ……」

そんなことを云いながら吊られている浪路の足の下から上をながめて、下

卑た笑い方をした。

「まだ吐かねえのか？ずいぶん手間取っているじゃねえかよ」

権太が様子を見に来て浪路の裸身を見上げて八助の顔を見るとニタリとしやがる。

「ははア……手間どっていると思ったのは、そういうことだったのか？」

「ふ、ふふ。案外に強情な女だな」

「おめえ。何もしていねえじゃねえかよ、下から女の股倉をのぞいてるだけじゃねえか」

「う、うッ！そ、そりゃア……」

「へへ。いいこと教えてやろうか。女の責め方さ……へへッ」

「え？な、何だい？」

「にぶい奴だな。おめえだって楽しめろし、女だって早く白状したくなるやり方さ」

「う、う。そ、それを教えてくれ……」

権太は、好色そうな目つきで八助をうながした。

「まず、女を下におろすことだな。そんな吊したままじゃあ、なんにもできやしねえぜ」

八助の云うように、浪路はいったん



下におろされた。

「吊りから降ろしたからといって許してやるわけじゃねえんだ」

浪路は、もう一度縛り直されて責め問われることになるのだった。

「権太、おめえの好きな縛り方をしてやろうな。女を責めながら楽しむのは、この縛り方に限るんだア……ふ、ふっふ」

浪路は、左手首と左足首をひとつにして縛られ、右手と右足首もひとつにして縛られてしまっていた。こうして縄を左右に引きしぼられると、手足は大きく左右に広げられることになり、女にとっては最も辛い羞恥の姿になるのだった。

「へ、へへ。なあるほど、あにきの云う通りさ。こりゃあ楽しめるぜ……こうして縛れば何もかも丸見えだあ……」

権太め浪路の真っ裸の、手足を大きく左右に広げられた姿を見てよだれを垂らしそうな顔をして悦に入っていたがった。

「へ、へッ。絵図面はどこにあるんだ……云わなきゃ、こうするぜえ……へへへッ」





権太の手が、浪路の蟹縛りの股間にずいっと入って、縮り毛に囲まれた秘奥をさぐる動きをした。

「あッ／＼な、なにをするッ／＼あッあッ」

「け、へへッ、なにをするはねえぜ。おめえのたまらねえところを、ほら、こうしていじりまわしてやろうと云うんだ／＼俺さまの二本指にかかっちゃあ、宿場女郎も腰を抜かして泣きやがるのさ。ほれほれ、こうすればどうだあ……ほれ、ほれ／＼」

権太は、二本指を浪路の股間にこねまわして、しつっこく辱しめるのだ。「ほれほれ、どうだどうだ。おれは親の代からこの草津のかごかきをしているが、こんないい女の股ぐらを、これほど好きにしたことはねえ……へ、へへッこの女は嫌だ嫌だと云っているくせに、ここはほれ、こんなにビチョビチョだあ……けへへへへッ」

権太は禪の下のを硬くして、浪路をなぶることに熱中していやがった「あ、あッ／＼も、もうやめておくれえッ」

浪路は、柔肉をまくり上げられ、乳

房をもみたてられ、だんだん味な気持ちになってくるのだった。

「あ、ふッ／＼ん。や、やめておくれえ」

これ以上長く弄ばれると、浪路は最後まで平静で居られなくなることが判っていた。

「おお、おお、そろそろ気持が良くなってきたか。早く絵図面のあり場所を吐かねえと、おめえ若え娘の身でおいら達の眼の前でむりやり氣をやらされるような生き恥をかくことになるぜ……ほらもうかわいいお豆ちゃんがヒクヒク喘ぎはじめているぜ、さあどうでえどうでえ……」

浪路が今にも耐え入りそうなのを見た権太は柔肉をむきあげて肉豆をことさら念入りになであげなでおろし、タププリと唾をつけてぬるぬるとかきずった。

「あはッ……はあッ、ふ、ふうン、んッ」

浪路、もう耐えられない。必死に感じまいとして腰をひねるものの、こんどは八助の手が臀の穴を狙って這ってくるのだった。

「きゃーッ／＼そ、そんなところをッ／＼いやあーッ」

「へへッ、いやかい。早いとこ絵図面を渡してしまわねえと、こんなことじゃあ済まねえんだぜ／＼さあ云うのか云わねえのか／＼」

と、八助と権太は、素っ裸の浪路のからだに前後から抱きつき臀の穴に手を伸ばす奴、乳房に吸いつく奴と、てんでに勝手なことをして楽しんでいるのだった。

「ああたまらねえ。こうして朝から女のからだをいじり通していると股倉の小僧がいきり立ちやがってしかたがねえ、八助あにい、どうにもたまらねえから一度だけ抱いてもいいだろうかねえ」  
と、権太の奴はもう禪を外しにかかっているのだった。  
(つづく)





# 女獣飼育 二



拓植浩二

## ストッキング責め

ミレーの「晩鐘」の原画を見に行こうと、美保子をさそった。四月の終りに近い一日だった。上野の国立西洋博物館である。なんでも、フランスのミッテラン大統領が来日するに際しての、日本へのプレゼントであったらしいが、そんなことは、こっちの関知することではない。とにかくミレーの原画が、まじまじと見られればいいのだから。美保子も「絵」が好きだ。

ミレーの絵もよかったが、クールベの「泉」たの！」もすばらしかった。裸身の女体が泉に両足を

浸らせながらのポーズは、「晩鐘」とは対照的に圧巻であった。

「よかったわ！」  
切れ目で、ちよつと目尻の上がり目の表情は、うっとりしていた。

## ストッキング・ロープ

が、「事件」が起きた。喫茶店で少し休んでいるうちに、女はトイレに行き、帰ってくるなり、

「困ったわ！ ストッキングが伝線しちゃったの！」

ロードのスカートを腿の付根までまくり、右足の伝線の具合を見せてくれた。

幅五ミリぐらいで、腿から足の先まで伝線していた。黒めのストッキングだから、伝線の模様が、より目立つ。

「ここで待っていな。ぼくが、外で買ってくるから」

美保子を喫茶店にそのまま留め、上野の周辺を歩きながら、女のパンティ・ストッキングを捜した。今履いているのと同じような色合いの物を、三足五百円で買って、喫茶店に戻った。

「ありがと！ 指のちよつとしたササクレでも、すぐ伝線しちゃうの」

「そう。一足は、どのくらいもつ？」

「そうね。扱い方によるけど、三日から一週間かしら」

美保子はそう言いながら、椅子に腰かけたままスカートをまくると、腰から腿、そして脚へと、くるくると両手で巻きながら脱いでいった。脱いだものをぼくに渡すと、買ってきたものを脚につけた。

渡されたパンティ・ストッキングをぼくはポケットに納めた。と、その時、ぼくの心に淫らな思いがはしった。でも、黙っていた。

東京駅で横須賀線に乗り替える。そして戸



塚へ。上野からちょうど一時間だ。駅前で、折詰めになっているちらし寿司を買って、タクシーに乗り、団地に戻った。

夕餉には、まだ間がある。外は明るい。

「あなた、あたしのストッキング、どうしました？」

「ああ、ぼくのポケットにあるよ」

「じゃ、しまうから、出して！」

黄色の厚タオル地のガウンに着替えながら、ぼくを見つめた。

「いや、ちよっとイタズラしたいんで、だめだ。それに……、だめになったストッキングがたくさんしまっているだろ？ それをここに出してくれ」

ぼくも着物に着替えながら、ガウンの帯を結んでいる美保子に催促した。

「それを何になさるの？」

「うん、はっきり言うとな、美保子を縛る縄を編みたいんだ」

「あたしをまた縛るの？」

「うん！」

これまで、腰紐などでよく美保子を縛ってイジメてきた。しかし、最近では、剃毛が多かった。が、喫茶店でスカートをまくってストッキングを脱ぐさまを見ていて、なにかしら、美保子を縛りたくなった。

美保子が、押入れから紙袋をぼくの前に出した。その中には使えなくなったパンティ・ストッキングがいっぱいに詰っていた。肌色あり、茶色あり、紫色あり、黒色ありと、さまざまである。

「その袋の中味は、ぼくが、全部預かるよ」と、奪うように取ると、まず三足を取り出した。それを見ていた美保子は、

「あなたも好きねエ！」

と、ぼくの前にしゃがみ込んで笑ってながめている。そのとき、ガウンの裾が割れて、内腿とその奥の肌色のビキニ・パンティが見えた。

「いいながめだ。それを目にしながら縄でも編むか」

「またア……！」

女はあわてて前を合わせると、左手でぼくの肩をこずいた。

ぼくは立ち上がると、窓辺にある工業用ミシンの引出しから鉄を出して、三足とも股下部分で切り離した。肌色の物、紫色の物、赤系の物が六本出来たことになる。

そのうちのそれぞれ三本を取り出して、爪先箇所をいっしょに結んだ。そこをミシンの糸リールの金具に引っかけると、一本一本をよじるように、うようにして編み出した。

これがむずかしい。ストッキングの繊維の一本一本が、それ自体燃<sup>や</sup>つてあるので、編んでいこうにも弾性があるって、元に戻ろうとする。だから、二十センチぐらいやってから結び目をつくった。一回二回と結んで大きな瘤にするのだが、編み上がった一本の長さは伸ばしても四十センチほど。

それで、また別の三本をつなぐ。その際の結び目は大きい。また編んでいく。

むろんストッキング三本では足りない。また別の色の物をつないで編んでいく。その途中、やはり結び玉をつくっていく。

十以上のストッキングを使った。長さになると、ぎゅつとのばせば四メートルぐらいで、見たところは二メートル半ぐらいか。

それと同じ物を、とりあえず三本つくった。

＊

＊

縄の効用について、ふと、一人の女を思い出した。今、三十四歳で、背丈は一五五・六だが、容姿はテレビのCMに出てくるとこかの宝石店の外人女性そっくりである。顔の彫りが深い。二人の子を生んでいるというのに、豊かなボリュームの乳房の先端にある乳首はピンと前方を向いている。

ぼくの掌に納まりきらないその乳房を揉み、



乳首を吸い出すと、次第に、近所にまで聞こえるくらいのよがり声をあげ始める。身はのけぞり、両脚は硬直するほどに興奮してくる。肌は桃色に染まる。

下のヘアは金色。髪も生まれながらの黄銅色。白系ロシア系出の女だという。初めての景観だ。

俗に“巾着”とか“ミミズ千匹”などということばがある。この二つのことばは、抱く女に対しての男の理想のイメージで、現実には果たして居るものなのか、とにかくオーバーな表現と想っていた。が、この光子という女性性、その両方を兼ね備えていた。締まりもいいし、中もうごめく。それがこたえられない。

夫の暴虐さとギャンブル癖、サラ金苦もあるところに、すでにぼくとの関係も出来ていたので、ぼくの家から五十メートルぐらい離れたアパートに、光子だけ、強制的に引越させた。

その夜、テーブルを隔てて、二人でグラスを交わしながら、差入れた寿司を食べた。

「これで、ほっとしたか」

「仕事は大丈夫か？」

「ええ、これまでのお客さんは、みんなついてきていますから」

光子は、洋服の仕立直しを、ずっとやってきた。ぼくの物も、ずいぶんとやってくれている。夫は理容職人。

飲むほどに、食べるほどに、興がわいてきた。

赤のTシャツとジーパン・スタイルの光子を手元にたぐり寄せて抱き、Tシャツの下から手を入れて、乳房をまさぐった。

次第に喘ぎ声をあげ始めた。で、ジーンズの前ボタンとファスナーをはずした。白のビキニ・パンティだけである。

抱えている左手はそのまま、女の乳房を揉みしだく。右手は、女の尻のほうから、パンティもろとも下のほうへとジーンズを脱がせていく。女は喘ぎ声を上げながらも、尻をあげ、ぼくが脱がせていくのに協力してくれた。日本人離れした真白な脚とゴールド・ブッシュが、ぼくの眼下にあった。

「ねエ！ オッパイ、吸ってくださいさる？」

目をつむり、喘ぎながら、女は訴えた。自分を真っ裸にしてくれということである。

「うん」

とばかりに、ぼくは女の着ていたTシャツを上にかくしあげ、首を通して脱がせた。ついでに白のブラジャーも取った。女体のすべてが曝された。

まだ九月の上旬。裸になっても寒くは感じない。

くちづけをして、乳房を揉み、腹や、腰を撫し、手をさらに下にのばすと、両脚を自ら開いてくれた。内腿を撫で、そして、大切な秘貝を指で左右に開いた。喘ぐ声がいちだんと大きくなった。女は夢中になって、ぼくのシャツの下に手を入れしがみついている。

と、部屋の片隅にまだ整理しきれないままになっている衣類の中に、数本の腰紐のあるのが、ぼくの目にはいった。

「光子： おまえに“首輪”をかけるよ」

「え？」

ぼくの腕の中で光子は目をあけ、見上げた。ぼくのズボンのチャックをあげ、中の物をぎゅっと握った。

かまわずに、腿の上に女の頭をおろし、手をのばして細紐をたぐった。そして、緩く女の首を縛った。女の手は、いっそう強くぼくの物を握り締めた。

女体を裏返しにする。ぼくの左手には、首輪の紐の端がある。右手で女体の尻を強くぶった。

「ヒイ……！」

「尻を上げなさい！」

ぼくの物を握り、ぼくの太腿を枕にし、ぼ



くのほうに顔を向けた光子は、そのまま、尻を高く上げた。まさに真っ白なメス犬である。

ぼくは腿を脱し、立った。そして、もう一度打って、紐を、ぐいっと引張った。女は犬コロのように寄って来た。狭いアパートの部屋の中を引きずる。女は四肢を使って動く。この眺めは、男にとって最高だ。

「ぼくは毎日来れない。ぼくにはぼくの生活があるし、光子には光子の生活がある。だから、自由にふるまってい。しかし、目に見えない首輪は、しっぴかりはめていくよ」  
「はい！ わかりました。わたしのほうからお願いします。あなたの首輪をつけておいて！」

その直後、首輪をつけたまま四つん這いになっている光子へ、背後から挿し入れて、お互いの思いを遂げた。

＊

＊

美保子との関係の中で光子の事を持ち出したのは、ほかでもない、首輪のことである。女は、これをかけた男に完全に隷属する。それで美保子にも首輪をかけることになるのだ……。

光子の場合、首に輪をかけ、引きづったこ

とが原体験なのか、完なきまでに、ぼくの言いなりになるようになった。関係は、今日までずっと続いている。

が、年輪の重みからくるのか、美保子の所に居ることが多い。そして、ぼくが美保子をイジメルことを楽しみ、美保子はイジラレ、イジメラレルことを欲ぶ。これが、二人の生活の中で、ごく自然のことになっている。

### ロープ・瘤責め

ナイロン・ストッキングが、真田紐さなだに変形した。ミシンの脇で、ぼくが造るのを、笑いながら美保子は見ている。

その美保子をたぐり寄せ、あぐらをかいているぼくの腿の上に、女の頭をのせて抱いた。女は目を閉じて、左手をぼくの右肩の中にこじ入れ、右手はぼくの腰を通って腰にしがみついた。

ストッキング・ロープを緩く、一重に首に巻く。縛って、ぐっと引いてみる。  
「痛い！」

と、女は悲鳴をあげながら、さらに両手に力を入れて、ぼくにしがみついた。そして、目をあげ、ぼくを見上げた。

「久しぶりね」

期待とも皮肉とも取れることばだ。

「こいっ！」  
とばかりに、女の尻を打った。  
「いやア……！」

身をのけぞらせた。それで、ロープを手繰って、ガウンを脱がせた。わずかに小麦色がかった肌に、肌色のブラジャーと同じ色のパンティをつけていた。女は目をつむって、ぼくの腿を枕にしている。両方とも、ぼくの手で脱がせた。

前述の光子の場合もそうだが、美保子も、いや、女という女は、首輪をかけられたら、そして、尻を激しく打たれたなら、完全に、それをやった男に屈従するようになる。

きめ細かい肌触りの女だ。タバコをのんでいないからということもあるのではないか。光子の場合、一日に「セブンスター」を二箱ぐらい空ける。そのせいか、肌にぬめりがなし、首元から肩にかけて心持ち鮫肌が見える。

気性の強いのは、両方の女とも一致しているが、やはり柔らかい肌の女が、抱き心地いい。

女の前首にある縄目を、ぎゅっと引張った。と同時に、女の首が前にのめる。この動作は、相手の男に対しての無条件降伏の証しだ。自分のからだは、自由に操って、イジメテいい



ということ。

ぼくは首の前に来ているロープを、ぐっと、下に持っていった。

「痛い！ またア……！」

女体を横に倒し、斜めにしての作業である。陽は、すでに沈もうとしていた。が、部屋は、まだ陽盛りである。

秘貝に当たるロープの個所に、大きく拳大の瘤の結び目を作った。この結び目の部位が、また、むずかしい。首輪は緩いし、ロープの伸び縮みがある。幾分、上目の個所にする。そのまま、尻線に沿って、ぐっと背中をのぼる。

そこで、女の両手を後ろにやり、くくった。そして、縄目を後ろ首にかかっているロープにつなげた。

完全に埋まり込んでいる秘部を大きく開いて叩いた。

「いやア……！ きびしい！」

これだと、瘤が、ただそこにはいつているだけでなく、女の大事な、いちばん感じる核を刺激する。叩くのを続けると、女体は、七転八倒、苦悶の表情を見せながら、よがり声をあげ、クライマックスに達した。

こうした姿態は美しい。鑑賞出来る男に生まれて良かったと思う。

## ストッキング・マスク

ぼくは、まだ男の思いを達していない。

すぐ脇に、さっき切り離れたストッキングのパンティ部分が散らかっている。

女体は横になっている。

ずっと離れて、そのパンティ部分を手に持った。

「まだ、ナニかするの？」

「うん！」

女の気だるい声を耳にしながら、まず一枚を、頭からかぶせた。それを目の所で二つ折りにする。それを四枚、同じようにくり返した。

これで、女の目は、昼夜の区別はつくだろうが、事物の分別はつかなかった。

「ねエ！ 見えない。こわいわア！」

ぼくの腿の上で、女はつぶやいた。

後ろ手に縛られ、大事な所に大きい瘤を入れられ、首輪をつけられ、いま、また目を覆われる破目になったのだ。しかも、真っ裸だから、女にとって心細いこと極まりないだろう。

女体を裸にして首輪をかける。そして後ろ手にして、両手を緊縛する。その際に、二枚の貝殻を開いて、中に詰め物をする。さらに

目に覆いをつけてしまう。

こうしたら、女体は、完全に男のオモチャになる。

「ねエ、どうすんの？」

かぼそい声で、女は、また聞いた。

「美保子！ おまえ、知ってるだろ！」

「はい！」

腿を枕にこっちを向いている美保子は、身をのりだし、すでに怒張しているぼくの物を、くちびるを動かし、舌を働かせて口内に持っていた。

ぼくのピストン運動に合わせるように、女の口と舌が動く。さらに突き進む。

その夕べ、ぼくは女体の口腔内で最後を迎えた。





## レスポスの園 3

### 結城紀子

豊かで、何不自由ない少女時代。大好きだったお手伝いの多恵さんは結婚してしまい、少し寂しいけれども、充ち足りていた少女時代。来年は中学で、ある名門の私立女子学園を受験しようという私は、小学校6年生の夏休みも、他の子供達とは違って、家庭教師の先生について勉強。

父はビルマへ宝石の買い付けに行っていました。一度出張すると、2ヶ月近くも帰って来ません。義母（その頃はまだ実の母だと思っていたわけですが）と私、そして一日おきにやって来る家庭教師の大学生、遠山さん。この三人の夏の日の出来事。今でも鮮明に思い起こされます。私をこの道に導いていったショックキングな出来事。

家庭教師の遠山さんは、国立の某女子大の学生で、ちょうど二十才のスリムな美人でした。瞳の大きな、丸顔で肉付きのよい顔とは反対に、首から下はキリッと堅くしまった肉体をしていたと記憶しています。

勉強のあとでバドミントンをして私と遊んでくれたので、遠山さん——涼子さんといいました——は汗をかいて、シャワーを使っていました。私は、既にシャワーを使っていた身体を乾かして、習慣の昼寝をするために、自分の部屋へ入っております。いつもはそのまま眠ってしまい、起きる頃には、遠山さんは帰ってしまったのですが、その日に限って、どうしたものか眠りが浅く、すぐ目覚めてしまったようです。浴室の方で声が聞こえるので——また先生、シャワー使っているのかしら——と思い、いたずら心で覗いてやろうと思い、足音を忍ばせて、庭から廻って浴室へ近づきました。浴室の窓から私の眼に飛び込んできた光景は——その時の気持をどう表現したらいいのか判りませんが——頭に血がのぼり、自分がいったい何を見ているのか判らなくなっていました。ショックを通りこして、眼をそらすことも出来ず、ただ身体が氷のように固く、身動き出来なくなっていました。

浴室のタイルの上に涼子先生は、私の方へ脚を開いて倒れていて、その涼子先生の身体の上に、別の女の身体が、これは頭を窓の方へ向けて重なっているではありませんか。その女の人は、何と、私の母なのです。全裸の

二人の女の身体。母の頭は、どうやら、涼子先生の足の付け根のあたりに重ねられて、少しづつ動いているようです。窓は閉められていましたが、時折、涼子先生の、とり乱した声が響いてきます。そのたびに腰のあたりから脚の先までが痙攣したように動きます。母の身体は、涼子先生とは反対に、小太りで、白い肉付きのよい、やわらかな体質で、大柄な、豊満と形容してよい肉体でした。私が息をつくゆとりもなく凝視しているうちに、今度は母のうめき声が浴室を突き破るように響いてきました。涼子先生の顔が、やはり母の下腹部の下で動きまわっているようです。小学校6年の私は、生理こそまだでしたが、乳房も少し盛りあがって、ヴィーナスの丘には何本か、ヘアーも生えかけていたのです。浴室の中の光景が何を意味しているのか、通常、男と女の間で行なわれる行為であることぐらいは、何となく判っていたのです——（つづく）





# 梅雨の感触

——姉弟恋獄——

尼子義久

その若い男は、春風のすがすがしさの次には必然性を持って梅雨のうっとうしさが訪れることを知っていた。

そして、社会人としての生活が板について来たと感じた次の日には、倦怠感と鈍い疲れだけが彼女をつつんでいた。

しかし、その若い男、横田邦彦は両親と姉の待つ家へと急いでいる。

定年退職後も老け込むことなく働こうとしている厳格な父親を内心深く尊敬していたし、病気で苦しんでいた時でも家族には明るくふるまっていた思いやりのある母親を心の底で自慢していたし、誰よりも美しくやさしく清らかな姉を心から愛していたからである。

姉の季実子は、邦彦より一才年上なだけだが、社会人としては三年先輩になる。

四年制大学と短大の差だ。

邦彦は、家族構成の中で弟の位置にある。

＊

ある夜、邦彦は姉の入浴姿を覗いていた。

邦彦にとってその姉は常に美しい天女であったし、そのことは生涯不変と信じていた。

季実子の首すじから肩口にかけての曲線は弥勒菩薩像を超越し、乳房は女性のシンボルとしての存在を十分に強調したビーナス像よりも美しく、腰の線は誕生と成育を抽象化し

たマリア像のそれであった。

指先は仏像の微妙な印相をも表現出来るほどのしなやかに動き、髪をとかす姿は童話の中の人魚姫とまったく同じイメージなのだ。

「……………」

邦彦は、姉に襲いかかって犯してやろうと思ったが、その行為は差し控えた。

巨大でグロテスクな男根を挿入しては、美しい姉が痛がるのではないかと心配したからである。

ある日、邦彦は姉がトイレに入ったのを知りドアに身を寄せ息を密めていた。

シャー……………」

ほとばしる音がしてしばらくの静寂がつづく。

「うう……………ううん……………」

季実子の苦しそうな声と共にポチャン、ポチャンと云う硬くて小さなものが水溜りに落下する音がしたがそれはほんの少しだった。

邦彦は、姉がトイレのドアを開けた瞬間を狙って押し入り、後ろから犯してやろうと思ったが、それは差し控えることにした。

なぜならば、便秘で苦しんでいる姉が可哀想で涙が出てしまったからである。

＊



ある深夜、邦彦は姉の部屋を覗いていた。時折ベッドがゆれ、下腹部のあたりの布団が激しく上下している。

乳房のあたりの布団はゆっくりと波打っている。突然それらの動きが静止した。

「うっ……あぁあ……」

必死で押し殺したような声がそれでも部屋中に響き渡り、季実子はぐったりとなった。

邦彦は、いきなり侵入して濡れそぼった姉を一撃のもとに貫ぬいてやろうと思ったが、それは差し控えることにした。

やさしい姉を驚かせることを恐れたからである。

＊

ある日、邦彦は家娘と食卓についている時に姉からコロッケをひとつもらった。

季実子はダイエットを心掛けているのだ。

箸で突かれて形のくずれたコロッケを、邦彦はたっぷり時間をかけて食べた。

邦彦は、食後公園まで散歩に出る姉を待ち伏せして強姦しようと思っていたが、それは差し控えることにした。

なぜならば、姉にもらったコロッケを口にした瞬間、したたかに射精してしまったからである。

＊

じめじめとした梅雨がついにはじまった。カビと雑草と気持ち悪い虫たちが勢力をどンドン拡大して行く季節だ。

邦彦は、自らの怖じ気に強い嫌悪を感じていた。実姉との近親相姦を心のウラ側で恐れている自分を情けなく思っているのである。

邦彦は、姉の入浴姿を覗きながら、排便の音を盗み聞きながら、マスターベーションを盗み見ながら、食べ残しをもらいながら考えていた。近親相姦は人間が人間としての歴史を持つようになってから、法なる文字をおごそかに宣誓するようになってから禁じられたものであり、単に必ずしも科学的とは云えない道徳面が強調されているだけのことなのではないのか？……。

子孫に悪影響を残すと云うのも信用出来ない。なぜならば、試してみたことなどないのである。まことしやかに語られている離島や山奥の村などの例も、何万分の一、何億分の一と云う偶然をそれまでの道徳体系を守るためにこじつけたものではないのか？……。

もしかすると天動説のようなものであり、近親相姦悪論も神話のひとつにすぎないのではないのか？……。

最近の学者の中には近親相姦によって生れた子供に悪影響などないとキツパリ表明している人がいるが、それがあまり取り上げられないのも二十世紀の宗教裁判ではないのだろうか？……。

邦彦は、それまでの淫乱にのみ根ざした近親相姦者たちとの区別を求めている。

最も身近かにいる年頃の女性が姉であり、それゆえに心から愛せるのではないか？。

子供の頃から全てを知り、知られながら一緒に暮して来た姉を愛する事こそ正常なのであり、突然出会った女性を愛する事など一部の例外をのぞいて異常行為と見ていいのではないのか？。

二千年そうして来たから正しいと云うならば、百万年行なって来た共喰いはなぜいけないのだ？。邦彦は、彼の哲学から近親相姦をより積極的に肯定した。

そして、ある深夜……。

うっとうしい梅雨の日の夜、邦彦はついに姉の部屋に侵入したのである。

＊

季実子の姿は、薄暗い部屋の中にあってもひとときわ輝いていた。

しかし、侵入した邦彦は姉の前に正座させられていたのである。



「父さんに云うわよ」

「……」

邦彦は俯き、すでに露出させていた男根を自ら握って隠す。

「姉さんがここに座っててあげるから、それを見ながらマスターベーションしなさい」

季実子は論すような口調で云った。

「でも……」

「しないなら父さんに云うわよ！」

季実子はそう云うなり邦彦の耳を引っ張って倒してしまった。

「……！」

「父さんに云ってもいいわけね」

その言葉は邦彦を恐れさせた。

そして、固定された男根のピストンと右手のシリンダーによる単調な往復運動がはじめられたのである。

自らにじみ出す粘液が十分に潤滑油となっているにもかかわらず、そのピストンは内側からの熱であつく、あまりにも高温になる。ピストンに直接結びつけられているタンクが縮み上がり、その時が近づいて行く。

季実子は懐中電灯を持ち出した。

点検作業をするようにスポットライトがピストンを照らし出す。

「姉さん！嫌だよう」

「やめては駄目よ！」

「姉さん……うっ……出ちゃう！」

邦彦はどうしても止められなかったのだ。

天井へ噴き上げそうになるものを左手で押さえ、自ら白い粘液にまみれたのである。

ドロリドロリとしたたるものを握りしめ、流れ落ちるものはちぢれた毛によって全てキヤッチした。

＊

次の日の深夜、邦彦は姉の太腿を見せてもらいながらマスターベーションをした。

＊

さらに次の日の深夜、邦彦は姉の乳房を見せてもらいながら射精した。

そして、頭を撫でられながらほとぼしらせ、足先に触れさせてもらいながら果てたのだった。

＊

ある深夜、邦彦は腹這いになり全身をくねらせながら男根を刺激していた。

季実子は邦彦の腰のあたりを踏みつけにしているのだ。

「うっ！……もう、もう出たよう……出たからやめて……」

邦彦は訴えなければならなかった。

噴出したものが下腹部一面にベツトリと広

がり、腰を踏まれるたびにベチャリと音をたてるのだ。

「そのままもう一発するのよ！」

「ベタバタで気持ち悪いよう……。姉さんとやりたいよう……」

泣いて訴える邦彦は、幼なかった頃のことを思い出していた。

邦彦はいつでも姉と遊びたかったのだが、成長と共にそれは許されなくなって行ったのである。性別の意識が季実子に現れ、遊びの内容が離れて行ったのは邦彦が小学校に入学した頃だった。

「姉さんとやりたいよう……」

邦彦はいつでもそう云って泣いていた。

「父さんに云うわよ」

季実子はいつでもそう云って邦彦を遊び場から追い払ったのであった。

邦彦はオモチャと男根との区別がつかなくなっていた。

季実子に踏みつけられながら、一緒に遊んで上げましよう云う声が心の奥から響いて来るのだった。

「そのままもう一発出して！」

「うん……」

邦彦は、ベタバタとする感触のままベチョリ、ベチョリと音をたてながら腰をうごめか



せはじめたのだった。

追い払われないことが嬉しかったのである。

＊

そんなある日、邦彦は会社の帰りにその年の梅雨が明けたことを知った。

ギラギラとした夏が突然やって来るのだ。

邦彦は、駅の階段を降りながらネクタイをゆるめた。マンネリと不必要で面倒な人間関係がバックされた会社に嫌気がさしている。

しかし、邦彦は両親と姉の待つ家へと急いでいた。二十年以上にも渡り何ひとつ変化がないはずなのに、楽しくて愛すべき人間関係に溢れた家庭へ急いでいるのだ。

定年退職後の再就職である父親とOLである姉は定時退社だから午後六時半には帰宅するが、邦彦は毎日のように残業がある。

仕事もないのにつまらぬ人間関係からズルズルと残らねばならない日も多い。

邦彦の社会構成における位置は、民間企業の平社員、自らの労働力を売って暮すしかない賃労働者である。

邦彦は、家族構成における弟の位置に戻るために帰宅を急いでいるのだ。

＊

邦彦は、毎夜姉の部屋へ導かれた。

男根をペロリと出し、床にバスタオルを敷

いて腹這いになる。

季実子はいつものように邦彦の腰のあたりを踏みつける。

「今日はそのまままで四発やらないと駄目よ」

「うん……。姉さんの足はあたたかいな」

邦彦は全身をうごめかせ、グリグリと局所を刺激する。ペロリと露出した肉自体が洗ひざらしのタオルに当たり少し痛みもある。

しかし、邦彦は愛する姉の体温を感じつつけるために射精しなければならぬのである。

「うっ……。姉さん一発出たよ」

「休まないで!! そのままあと三発よ」

「うん……」

邦彦は全身をうごめかせながら幼なかった頃に帰って行く。

姉の肌は常に邦彦よりあたたかった。

水遊びの最中でも手のひらを握るとあたたかく、真冬の夜布団に入るとその足先はあたたかった。

熱があるのではないかと心配した頃もあった。邦彦は幼なかった頃の気憶が姉のあたたかさだけなのを知っている。

小さな女の子たちが集まって遊んでおり、その中に幼なかった姉もいた。

やっと小学校に入った頃の邦彦がその中へ入れてもらおうと近づいて行く。

手にはお気に入りの消防車のオモチャを持って……。

「お姉ちゃん遊ぼ」

「あっち行って!」

「姉ちゃんになりたいよう……」

「父さんに云うわよ!」

邦彦はシクシク泣きながらその場から追い払われたのであった。

しかし、今はちがう。

姉の体温を感じながら一緒にいられるのだ。

邦彦は、二度目の射精へと接近し、一気に動きを強めた。

「うっ……。うっ……。出た……」

「あと二発よ!」

季実子はズンズンと踏みつけながら云う。

「姉さんになりたいよう……」

姉と共にいたい一心から訴える邦彦は、最も体を密着出来る体位での行為を願っているのだ。

「父さんに云って追い出してもらうわよ。ぐずぐずしないであと二発出して!」

季実子は、邦彦の尻へ全体重をかけた。

「痛う……」

萎えた肉の棒はその刺激で立ちなおった。

姉の体重を受けた肉棒は、伸びようとするのだが圧力のためにスムーズに行かず、ペロ



リと外皮を剥いでしまう。

露出した肉自体がタオル地にこすられ、それだけで三度目の射精が行なわれたのであった。ただ、ひたすら深い射精感だけがあり、実際にはどれほどのものが放出されたのかさだかでない。

「出たからもうやめて……。姉さんとしたいよう……」

「邦彦、夏休みに貸山荘へでも行きましようか？」

「え！……。い、行く！」

＊

盆休みの避暑と云うことで、季実子は会社の後輩であり何度も家に連れて来ていた三津子と共に四泊五日の山荘暮らしを計画していたのである。しかし、女ふたりだけでは危険だからと云う理由から信用出来るボディガード役が一緒ならとの条件が両方の親からつけられていたのである。

＊

ついにその日がやって来た。

三人が霧が峰にほど近い貸山荘に入った頃はすでに陽が沈みかけていた。

ずっと自動車を運転して来た邦彦は、当然のように疲れていたが夕食後もとても眠れそうにないのだった。

姉が部屋に呼んでくれるのではないかと思っていたからである。

八人用で寝室だけでも四部屋ある広い山荘は、夏の虫たちの声がやかましく、それだけ静かでもあった。

ボディガード役として来た邦彦は、ベッドに寝ころんでいる。

一緒に来た三津子の顔がふっと浮かんだ。

邦彦より三才も年下、つまり十九才の三津子はいやに若々しく感じられる。

化粧品のCMに出て来るような女性であり、それも夏用化粧品にピッタリと思えた。

前髪をたらしした父親コンプレックスの女性ではなく、目、鼻、口などがいやにはっきりとした顔立ちなのだ。

つまり、すこぶる付きの美女であり、したがって邦彦にとっては単に若い女であった。

季実子のような奥深さがないし、何かしら生々しいと感じられたのである。

姉の存在こそが絶対であり女性の全てであった邦彦独特の感覚なのだ。

「……！」

邦彦は突然嫌悪感に襲われ、三津子のことを頭の中から追放した。

つづいてその空白になった頭の中に姉の顔が浮かんだ。

そして、その瞬間に強い反省が起こったのである。姉と云っても女にすぎないではないか……。抱いてしまえば弟と云えどもその男のものになるに決まっている……。

「……！」

邦彦はついに決心したのである。

一発殴ってやればヒュー泣いて許すに決まっているし、今夜からの四泊の間には完全に征服出来るにちがいない……。

あの三津子とか云う女も年下のくせに生意

気だからついでに犯してやる……いや、性の奴隷として一生涯仕えさせてやる……。

邦彦はそう決心したので。

おとなしくなるまで殴りつけ、全裸に剥がす……。手のひらで全身を撫でまわす……。

全身いたるところの体温をひとりじめにする……。そして、最も熱のある部分へとせまり深々と挿入する……。

姉の秘部から直接体温を奪ってやる……。

そう決心した邦彦は、音をたてないようにスリッパを使わず、猫のように静かな足運びでドアを開けた。

部屋の中と廊下との温度差がちよっとした風を生む。一步、二歩と踏み出すと 下の冷気が邦彦をつつんだ。

ガッン！



「痛い！」

ガッン！、ガン！、バシッ！、ガッン！。

「ううっ……うっ！……うう……」

邦彦は、棍棒のようなもので後頭部を中心にメッタ打ちにされ、その場に倒れたのだ。

一瞬冷汗が出たように感じたが、次の瞬間にはもうそれもわからなかった。

「先輩、うまく行きましたね」

棍棒を握りしめた三津子が云う。

「さっそくはじめましょう」

それは、同じように棍棒を手にした季実子であった。

＊

大きなテーブルに大文字形に縛りつけられている男がいる。

その男は全裸にされており、何本もの細い縄で全ての動きを封じられている。

邦彦であった。

「うう……」

呻く。強打による昏睡状態からさめた邦彦は、ジンジンと痛む後頭部に手をやろうとして一切の自由が奪い去られていることを知った。

「……!!」

邦彦は、これから自らの肉体に加えられるであろう恐ろしい行為を予想して震え上がった。

たのである。

季実子と三津子がニヤニヤと笑いながら見ているのだ。

「お前は姉さんのオ×××を舐めようとしていただろう。それともこの三津子さまのが舐めたかったのか」

「……」

邦彦は目を閉じて頭を左右に激しく振った。

「三津子、はじめろわよ」

「OK！」

そう云った女たちは手にガムテープを持っている。ジーと音がしてガムテープが引き出されて行く。

「なにをする！、や、やめろ！」

邦彦はそう叫ぶなり抵抗をはじめるが、細い縄はそれをほとんど許さないのだ。

季実子は邦彦の男根へ手をやった。

三津子は同じく下腹部へ手をやる。

ウラ側を根元から先端にかけて指が這い、同時に小さな円をえがきながらその行為はつづいた。下腹部は男根に向かってマッサージが加えられて行く。

「うっ！」

男根はすさまじい勃起をする。

「今よ！」

季実子の号令でガムテープがそれに巻きつ

いた。棍棒のようになった男根へ何重にもガムテープが巻かれ、それは袋から下腹部全体へと広がって行く。

ガムテープは勃起した男根を完全にホールドし、下着のように陰部をおおったのだ。

「ううッ！ 痛い！」

季実子によってギュウギュウと握りしめられた邦彦は、さらに限界まで勃起をつづけるのだが、肉の数倍も硬いガムテープはそれを決して許さない。

「ううッ！、やめて……痛い！」

しかし、その時にジャリと云う音がした。

「ギャー！」

そして、邦彦は絶叫したのである。

ちぢれた毛に貼りつけられたガムテープが一気に剝がされたのだ。

ジャリ！、ジャリジャリ！。

「うわああ！、痛いっ！」

次々に剝ぎ取られるテープには奪われた体毛が無数に貼りついている。

ベリッ！、ジョリジャリ！。

テープは肉棒をのぞいて全て剝がされた。

「三津子、グリグリやってやんな」

「はい先輩」

邦彦の袋は三津子の手のひらに収まった。グリッ。



「イッタァー！、や、やめてくれえ！」

グリグリグリグリ……

「ギィヤー！」

グリグリグリグリ……

「ギィエー！」

あまりの激痛とそれによる悲鳴は邦彦の肉棒からその力の全てを奪い、急速に萎えて行くことを命じていた。

しかし、その時にこそ最高の悲鳴が発せられたのである。

「イ、痛ああ！、ギィヤー！」

肉棒は皮と肉自体とに分離したのだ。

萎えた肉棒の中味だけが自由な縮みを許され、外皮はテープに捕えられたままなのだ。

三津子はそのことを知るなりテープを力まかせに握り、中味の体積に合わせた。

「お前のはスピッツのチンチンより小さいな……それでも男か……」

「不能者……それで女を喜ばせることが出来るのか……」

女たちは邦彦の耳もとでささやく。

「インポ……お前はインポだよ……」

「お前のはウインナーソーセージよりやわらかい……コンドームに糸こんにやくをつめたようなものだよ……」

「お前は犬チンより小さい上にインポだ」

「お前はインポだ……」

季実子はサツと全裸になり、三津子もそれにつづく。

「……！」

邦彦は見てはならないものを目にしたのだ。美しい姉の肌は決して見てはならなかったのである。

「イ・痛！……うっ！ギィヤー！」

肉棒は一気に立ち直り、邦彦はすさまじい悲鳴を上げた。

ゴムテープでホルドされた外皮は決して動けないのに、中味の肉自体は激しく伸び上がったのである。

「痛い！」

皮と肉が完全に分離し、乾燥したテープにむけた肉だけがズルズルと当たる。

「うっ……」

そして、それは萎えた。

もう二度と立ち直らないのではないかと思われるほど急速に萎えたのだ。

しかし、季実子はそれを許さなかった。

邦彦の鼻先にしゃがみ込んで女陰を見せつけるのだ。

「うっ……うっ……痛い！」

再びすさまじい勃起が邦彦を襲い、それは同様に激痛をとまったのである。

完全にむけた肉自体は引っ張られてねじまる。

「ギィヤー！」

三津子はその上に追い撃ちをかけるため、袋を力まかせに揉みはじめる。

グリッ……グリッグリッグリッ……

「うう……」

邦彦は失神した。

そして、萎えたのである。

＊

どれだけの時間が経過したのか邦彦にはわからなかったが、まだ朝の訪れまでに時間が必要なことだけは明らかだった。

「うっ……」

大文字に縛りつけられたままの邦彦は、胸にヒヤリとしたものを感じもうろうとした空間から連れ出された。

胸には古めかしいアルミの洗面器が置かれている。そして……

「……！」

邦彦は、カッと目を見開き次の瞬間にそれを閉じた。

いやに赤黒いものがパツクリと口を開け、若干白味がかった極々小さな突起から液体が放出されているのだ。

シャー……



ベチャベチャ……ジャジャー……。

「ね、姉さん！」

しかし、邦彦は驚きはしなかった。

その音はトイレのドア影に身を密めて何度も耳にしていたものだったからである。

つめたかった洗面器の底からはすぐあたたかさが伝わって来た。

「……」

邦彦は惜しいと思った。

姉の体温そのものであるその液体は、放出されて以後はただ冷えて行くだけなのだ。

大氣中に温度を逃がしてしまふのが惜しかったのである。

したがって、邦彦は極力静止し洗面器の底から少しでも温度を感じるように努めた。

自らの身上を一瞬忘れて……。

その温度は奇妙なあたたかさを持っている。

体内にあった以上体温と平衡状態であるはずなのに、出来たてのコンソメスープのように熱いほどののだ。

「姉さん……」

邦彦は小あく云った。

「なんだい」

季実子が云う。

「……」

邦彦は何もこたえない。

なぜならば、姉の声がバツクリと口を開けた女神の谷間から発せられたように感じたからである。しずくがしたたり、ヒクヒクとうごめいた秘唇が文字通り唇と化したように思えたのだ。

「舐めな！」

そう云った季実子はプンと鼻にくる臭いを発する部分を邦彦の口に押しつけた。

「うっ、うぐ……」

邦彦は反射的にそれを吸った。

やわらかい両側の肉がツルリと口の中へ入り込み、再びツルリと出た。

邦彦は舌を伸ばし、ペロペロとその部分を舐める。下から上へペロリと舐めるとその部分の全ての構造がわかった。

ねっとりとした粘液がまず舌先にからみ、

次いでヌルリと侵入する。

さらに舌を舐め上げるとそこから抜け出し最もやわらかい肉に当たる。

そして、割れ目の終点があり後はジャリジャリとした恥毛があった。

ペロリ、ペロリ……。

その一回ごとにそれらのことが全てわかったのである。

邦彦は何かしら思い出の中にいるように感じていた。やっと覚えているほど幼なかった

頃に、一度だけ姉が放尿する姿を見たことがあった。姉が幼稚園児くらいだった頃、一緒に入った風呂の中でタイルに立ったまま打ちつけている姿を見たのだ。

邦彦はそんな感傷の中で別のあたたかさを感じた。しかし、それはむかつきを覚えるようなあたたかさなのだ。

「……！」

いつの間にか三津子が洗面器に放尿している。真赤な秘唇が薄笑いを浮かべ、まるでフランス人形の唇のようなのだ。

それがほぼ新品であり、マスターベーションさえひかえた若々しい色をしていることは誰の目にも明らかだった。

しかし、邦彦には汚ならしいオ××コとか映らないのだ。

ジャジャー……ジャジャー……。

「や、やめろ！、汚ないことはやめろ！」

たっぷりと溜められた洗面器から飛沫が散り、邦彦の胸に水滴を生んで行く。

「生意気な奴ね！」

そう云った三津子は、したたかせたまま鼻先へと移動する。

「うっ！……き、汚ない！」

「姉さんのは舐められてこの三津子さまのは舐められないとでも云うのかい」



「うっ……」

邦彦の唇に赤い口紅をしたような女陰が押しつけられる。

三津子はそのままで前後左右に腰を振る。

「うっ、うぐ……ゲー、ウゲー……」

邦彦はあまりの汚なさにへどを吐きそうになったのである。

「本当に生意気な奴ね！」

邦彦から離れた三津子は、季実子に同意を求めるように云った。

「もうすぐ云えなくなるよ」

季実子は、ふたり分の小水を巨大な浣腸器に吸い込みながら云った。

「あっ！」

邦彦はどう叫ぶべきか迷った。

カテーサークのように色の薄いスコッチを水割りにしたような液体が浣腸器の中で凶悪な輝きを見せているのだ。

そして、浣腸器は三津子の手に渡される。

「うぐ、うぐうぐうっ……」

邦彦は、先端を咥えさせられることを必死で拒んだ。しかし、それは拒まない方が良かったのである。

「先輩」

「そうね」

ふたりの女は、相互に顔を見合わせるなり

目標を邦彦の鼻の穴に変更したのだ。

「………！」

邦彦は、やはりどう叫んでもいいかわからなかったし、それがわかっていても叫べなかったのである。鼻から咽へ、食道から胃袋へと一切の抵抗が許されない流れが伝わって行く。

ツンと鼻頭に刺激があり、シューと水流の音が全身へ響く。

一方の鼻の穴が押さえられて閉じられるとさらに抵抗は不可能となった。

「ゲボッ……ウェー、ウェー……」

それは終わった。

季実子は肉棒を、三津子は袋を手のひらにおさめ、邦彦の耳もとへ左右から顔を近づける。

「……うっ……うっ……」

邦彦は吐き気と共にせまり来る痛みを予想していた。

グリッ……グリグリグリ……と袋が揉まれギューギューギューと肉棒が握られた。

季実子は時折一気にそれを引き下げる。ベロリと外皮は全てめくれ、肉自体が露出して折れ曲がった。

グリグリグリ……。

ギューギューギュー……。

「痛い！」

邦彦は激痛のため下腹部全体がシクシクと差し込むのを知った。

女たちは再びささやきはじめる。

「よくそれで恥ずかしくないね……」

「短かくて細くて、それじゃ犬の方が大きいよ……」

「インポ、インポ、インポ……」

「これじゃ処女でも入ってるかどうかかわらないよ」

「子供のオチンチンぶらさげてどうするつもりなの」

「お前は女と出来ないインポだよ……」

しかし、邦彦はまだ半ば勃起していた。ちよつとした巨根だったし、反り返り方が立派な持ちものなのだ。

女たちは待ち針を手にした。

「痛あ！、痛あっ……痛い！」

チクリ、チクリと肉棒の先端を責める。

「インポ……お前はインポだよ……」

「不能者……お前は細くて短かくておまけにやわらかい……」

女たちはささやきながら待ち針で責めるのだ。

「痛う……イ、痛あ！……うっ……」

外皮の先端をチクリ、チクリと突くと見るうちに縮んで行く。



「やめてくれ！」

「お前はインポだよ！」

そう叫んだ季実子は待ち針をグサリと突き差した。肉棒はグニヤリと折れ曲がり次の瞬間にはスーと針を肉の中へおさめた。

「ギィヤー！」

「インポ！」

そう叫んだ三津子もグサリと突き差した。

そして、それは貫通したのである。

グサリ、グサリ、グサリ……

女たちは繰り返して待ち針を突き差す。

「ううっ……」

うっすらと血のにじんだ肉棒は萎えきり、邦彦は再び失神したのであった。

＊

ふたりの女は、季実子の寝室に戻り小さなテーブルを囲んでいた。

大きなグラスにはほんのちよっぴりブランデーをつぎ、カブト虫がウリをすすするようにそれを口にしている。

窓からは高原らしい冷気が侵入して来るが、虫よけの網戸がフィルターとなりやわらかい風となる。そして、それは夏虫の騒がしい声をもやわらかく変化させていた。

「三津子、やってよ」

季実子がベッドに入った。

腹這いになりそのそと腰をゆすりながら尻を持ち上げて行く。

三津子は、その尻を正面にして座る。

左手の親指の腹がサツと季実子のクリトリに触れ、ゆっくりと円をえがいて行く。

右手の指はチョンチョンと秘唇を刺激する。

「早く！」

「はい……」

三津子は左手の中指を女陰に沈めると、ヌメヌメとした粘液をたっぷりとつけてそれを抜き、肛門へと挿入した。

右手の指は中の三本に自らの唾液をべったりとつけ、女陰へ挿入する。

つまり、右手の中三本の指を女陰へ、左手の中指を肛門へ挿入し、左手の親指はクリトリスへ押しつけているのだ。

そして、それらはうごめきはじめた。

左手の親指はクリトリスを刺激し、その動きは必然的に中指を通して肛門へと伝わる。

右手の三本指はきっちりとかさなり合い、少しずつ回転しながら抜き差しをするのだ。

「あっ……もっとな！」

「はい……」

三津子はうごめかせる。

「もっと速くよ！」

「はい」

グジュグジュグジュグジュ……

三津子は左手の中指と親指を握るようにした。中指は肛門と女陰の間の肉を圧縮し、親指はクリトリスを強く押しつぶす。

右手の三本指は一気に激しいピストン運動へと変化する。

ゴボツ、グジュグジュ、ガボツ、ゴボツ。

「うっ！、ううん……もっとな！」

「はい！」

グジュ、グジュ、ゴボツガボツ……

「あっ……ああっ！、あうう……うっ！

うっ！、うっ！……」

季実子は尻を突き立て、一瞬の静止の後べったりと腹這いになった。

三津子はその背中にすがりつくようにかさなり、両手で季実子の全身を撫でまわしたのであった。

そして、その行為がふたりの女を結びつけていたのである。

季実子は、常に美しく男たちにちやほやされて暮して来た。

しかし、男の精力に対する恐怖が彼女の心に宿っていたのである。

男を膝まづかせても、挿入されることによって結局彼女は敗北した。

季実子は、自らのプライドを守るために若



く美しい女を性行為の相手に限定しているの  
である。三津子のような女に困ることはない。

女同士と云うこともあり、はじめてベッド

インした時からでも淫乱さながらの行為が可  
能なのだ。若い男だと怖じ気づくような行為  
でも同性である女ならさせることが可能なの  
である。三津子は、全ての男を汚らしい野  
良犬のように見ていた。

電車の中などでの痴漢行為ひとつを上げて  
も男が野良犬であることを証明出来ると考え  
ているのだ。

高校時代に仲の良かった友人が妊娠事件を  
起こして問題となったことがある。

幸い、処分は受けなかったが中絶のショッ  
クで性格が変わった。

その時でも相手の男は無責任発言を繰り返  
し、結局逃げたのである。

問題が表面化するのを恐れた友人の家庭も  
その男の逃げを許してしまったのだ。

三津子は、女を妊娠させるだけしか能のな  
い男の全人格を否定するようになった。

そして、自らは生涯男と肌を合わすまいと  
決心したのである。

＊

朝が来て、遅い食事をとった女たちは邦彦  
をはさんで相談をはじめた。

「針を消毒してと……それから、針金とペ  
ンチはここにある……」

「三津子、針は二本よ」

「三本用意してますからだいじょうぶ」

三津子は長さ十センチほどの針を用意して  
いた。それは、竹串のような太さであり明ら  
かに黄金製だった。

季実子はメモを読み上げて行く。

「先端から四センチと八センチだって……」  
手のひらが邦彦の肉棒をつつむ。

グングンと立ち直る肉棒にブランデーがか  
けられる。

「三津子、皮と肉の間にも十分ブランデー  
がしみ込むようにして」

「何をする気だ！」

たまりかねた邦彦が叫んだ。  
勃起するにしたがって昨夜打たれた針傷が

ヒリヒリと痛むのだ。

その痛みのためにゆっくりとしか立ち直ら  
ないが、季実子は丹念にそれを行なった。

「うっ……姉さん、痛いよう……」

反り返るほどの勃起はその自体で痛いほど  
なのである。

「あっ！……や・やめろ！、サディスト！

サディスト！、姉さんやめさせて！」

邦彦は叫んだ。

三津子が太い針金を肉棒の根元へ巻き、ペ  
ンチで締め上げはじめたからだ。

「お前はインポだよ……」

季実子が耳元でささやく。

「お前は女となんて出来ないインポさ……」  
十分締め上げた三津子が耳元でささやく。

「ううっ……」

邦彦は、肉棒全体が焼かれているような熱  
さを感じた。どんどんふくらんで行くような  
錯覚を感じるほど熱いのだ。

「ギャー！ギャー！」

その時、邦彦はすさまじい絶叫を發した。

二本の黄金製の針が打たれたのだ。

先端から四センチと八センチにピッタリと合  
わされた針が中心から少し左右にずれた位置  
に貫通させられたのである。

「イッタァー！、痛い！」

「やかましい！」

そう云った三津子は邦彦のたれさがった袋  
を握った。

グリッ、グリッと力まかせに揉むのだ。

「ううっ！、ヒイ！」

邦彦は下腹部全体に差し込むような激痛を  
受け、ダラダラと冷や汗をしたたらせた。

「三津子、つぶさないようにしてよ」

「え！、つぶしちゃいけないの……」



「メモによると、つぶれてしまうと化膿して腫れて来るそうよ。そうになると切断しないといけないって……」

「なるほど……。形だけでもブラブラさせておかないと楽しみが減っちゃうか……」

そう云った三津子はやっと袋から手を離れた。

「それじゃ読み上げる通りにやるのよ」

「OK！」

「まず……、えっと、陰のうの上から睾丸を万力で締めつける。睾丸の楕円型の短円方向を三割ほどつぶす。締めすぎ注意よ」

季実子はメモを見ながら云う。

「OK、次は？」

平然とその行為を行なった三津子は、邦彦の肉棒に貫通させた針を持ちねじまわす。

「裂けないようにしてよ」

季実子はその行為に注意を与える。

「あち、本当……。血が出て来ちゃった」

「次読むわよ。睾丸の長手軸方向に針を打ち、二、三秒で抜く……。同じことを二回」

「OK！」

三津子は、万力で締めつけられた睾丸を一気に貫ぬいた。

「うっ！、うう……うっ、うっ！」

邦彦は気絶していた。

シクシクと差し込むような痛みもわからなくなっただのである。

「それで完了よ！」

季実子はサッと髪をかき上げ、ニヤリと笑う。

「やった！。インポの去勢犬誕生！」

＊

明日はいよいよこの貸山荘を出ると云う日が来ていた。

「ワンワンワン……ワンワンワン……」

首輪からのびたチェーンをあやつられながら、邦彦は全裸で引きずりまわされていた。

「インポ犬！、去勢犬！、生涯この三津子さまの命令に従うんだよ」

「ワン……」

「命令通りにすればお前の好きなお姉さんのウンチに犬チンを突き差せるように頼んでやるよ」

「ワンワンワン……」

犬は、こんもりと盛り上がった季実子の排泄物に硬化しなくなったかつての男根を沈めて行った。

それは、あまりにもあたたかく、その犬が幼なかった頃から求めつづけていた姉の体温そのものであった。

それは、あたたかくじめじめした梅雨のような感触だった……。

## 新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、繩師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

（株）きたん社内





# 黄金色の恍惚

—オシメ・カバーに憑かれて—

文・画 立石 強 子

わたしが現在の主人と結婚したのは、  
わたしが二十七才の時、薬局に勤めていたこ  
ろでした。わたしには高校を卒業するころか  
ら特別の性癖がありました。それは末の妹、

わたしよりも十四才も下の妹で、その頃、一  
才とちよつとでした。まだオシメカバーをは  
めていましたが、その頃のオシメカバーはま  
だ飴色のゴムカバーでした。わたしはその妹  
のはめているオシメカバーの色や臭いにも

すごく興味があり、興奮しました。ある時な  
ど母がいない留守に妹のはめているオシメカ  
バーをオシメといっしょにはずし、自分自身  
につけてみたりしました。表に張ってあるビ  
ロードの真赤に飴色の生ゴム、股ぐりの縮み、  
妹のオシッコとウンチのついたオシメがすぐ  
わたしの股間についた時は何とも言えない感  
じがしました。いつもはめていることのでき  
る妹がにくらしく思えました。ある時など、  
妹がスヤスヤ眠っている間に、妹のオシメカ  
バーの一ばん下のボタンをはずして、ゴムと  
おしっこウンチのにおいをさぐりながら顔  
を押しつけ、とうとうウンチでベチョベチョ  
になった妹のお尻をペロペロなめ、いつの間  
にかそれをゴクンと飲みこんでしまいました。  
妹のウンチは母乳のせいかいつもやわらかで  
甘ずっぱく黄金色でした。甘ずっぱい妹のウ  
ンチはわたしの口の中でわたしのつばといっ  
しょになり、飲みこまれるのです。妹のウン  
チにはまだ母のお乳の香りが残り、わたしの  
口は妹のお尻を吸っているのですが、わたし  
の頭にはそれが母の乳房を吸っている錯覚さ  
え感じました。その時のわたしの手はもう完  
全に妹のオシメカバーを引きはぎ顔中ウンチ  
にまみれ、片方の手は自身の股間をまさぐり、  
わたしの一番敏感な部分をかきむしっていま



した。わたしは妹がオシメを卒業するまで機会あるごとにそんなことをしながら、自分で自分をなぐさめていました。そして、一時は忘れかけていたわたしのオシメカバー癖でしたが、大学の卒業を前にしたある日、わたしは某医療機器の販売店にアルバイトに行きました。このことがその後のわたしのオシメカバー遍歴をつくってしまいました。お店の仕事は、はじめはほとんど商品の棚の整理でした。商品の整理をしていたある日、わたしは棚の隅にビニールの袋に入った飴ゴム製品のあるのに気づきました。わたしはもしやと思い、あたりを見渡し、だれもいないことを幸いにそっとその袋に手をかけました。袋の中を見て、わたしの胸はドキドキ高鳴りました。なんとそれはダンロップの大人用のオシメカバーだったのです。総ゴムのオシメカバー、こんなオシメカバーがあるのは聞いていましたが、実物を見たのは初めてです。ビニールの上からも生ゴム特有の重みとネチネチした感触がわかりました。そして気のついた時には、わたしはその一枚をスカートをめくりすばやくパンティーの中にかくしてしまいました。その日の時間の過ぎるのがわたしには特にこそく感じました。五時、退社のベルが鳴り終わる間もなく、わたしはあの夢にまで見た総

ゴムのオシメカバーのはいったバックを肩に、いそいそと会社の門を出ました。電車の中でバックの中のゴムの感触を楽しみました。電車から降りたわたしは一キロの道をどうして帰ったか覚えていません。急いでドアをあけるなりわたしはベッドにころがり込みました。そしてバックからオシメカバーを出すなり、大きくベッドの上にひろげました。新品のためゴムは粉がついていてツルツルしていました。腰のちぢみ、股ぐりのちぢみ、ゴムのにおい、そしてあの飴ゴムの色、グロテスクにベッドにひろげられたオシメカバー。わたしは次の瞬間、パンティーを脱ぎすてると一気にゴムカバーにまたがり、腰を押しつけました。そして、あられもない恰好で前あてをかけ、ふるえる手で八個のロッドボタンをとめました。パチン、パチンという音、何とすてきな音でしょう。ギューツとちぢんだ腰まわり、レースを思わせる二重になった股ぐり。わたしはギューツとちぢんだゴムをおし開けながら、右手でわたしの秘所をまさぐりました。もうベチョベチョです。あふれた愛液はもうオシメカバーをぬらしてしまいました。そしてわたしの手は休むことなくこね入り、あられもなく一気に頂上に上りつめてしまいました。それからどれぐらい経ったでしょう。ふと気

がついた時はベトベトになったオシメカバーをはめたままの姿でベッドにころがっていました。何と幸福な一時だったでしょう。その余韻にひたりながら、わたしの顔はまた次のいやらしいことを考えていたのです。わたしはベトベトのオシメカバーをつけたままお台所に行きました。そして、洗面器にポットからお湯をそそぎ、水で手ごろの温度に下げ、戸棚からお酢を少々と食塩をひとにぎりつかんでその中に入れました。それは二〇〇℃Cは優にあるでしょう。そしてベッドにもどる途中、バスルームから灯油のポンプをもつて来ました。ベッドに着いたわたしは、洗面器がちやうどわたしの尻の下に来るよう仰向けに寝ました。そして、両足を高くあげ、赤ちゃんがオシメを替える時のスタイルになり、オシメカバーのホックをはずしました。その間、二十分も経たないのにオシメカバーは汗でビショビショでした。それに私自身の愛液とゴムのにおいとが混って、わたしはまた最高の興奮をおぼえました。拡げられたオシメカバーの上でわたしは灯油用のポンプの注入口を尻にそつとあてがいました。そして、つばをつけた注入口をアヌスに当てがい、グツと力を入れると直径1センチぐらいのその筒はあま



り抵抗なく二センチぐらいはいりました。今度は少し力を入れて押ししました。すると十五センチぐらいのめり込みました。吸油口を洗面器の液につけたわたしは、次の瞬間どうなるかも考えずにポンプのふくらんだ部分をギュッと握りしめました。グリュツ、グリュツと音をたてて、液は勢いよく直腸の壁に当りながらはいっていききました。もうわたしは何を考えるひまありません。ギュツ、ギュツ。見る見るうちに洗面器の液はほとんどわたしのお腹の中へ入っていききました。そして、最後のひとにぎりという時です。キリキリとキリでつきさされるような腹痛といっしょにもうれつな排泄感が一時におそいました。わたしはあわててオシメカバーの前当てをかけ、急いでホックをとめました。「よしできるだけこらえよう」と思った瞬間、またどうしようもない激痛にみまわれました。一分どころか三十秒もたっていないません。わたしは歯を喰いしばってこらえようとしましたが「ウウッ」と大声をあげた時です。ジョジョバババ。おびただしい液がオシメカバーのゴムにはねかえってほとばしっていました。そして、その後はだんだん困形物に変わり、もうオシメカバーの中はジョボ、ジョボです。ぶっくりゴムがふくれ上がり、もうはちきれんばかり

です。その後、液とウンチが交互に出ていきましたが、十分ぐらひは続いたでしょう。わたしはそーっとオシメカバーのふくらみを手でさわってみました。パンパンになったゴムの手ざわりが何とも言えない感触です。ドロドロの液とウンチはおへそのところまで達していました。わたしは片手でオシメカバーをもんでいました。その時はすでに部屋中ウンチのにおいでいっぱいでした。赤ちゃんだった妹のオシメカバーについたウンチ、真っ黄色い甘ずっぱい香りのウンチとは違って何ときたないものでしょう。しかし、不思議にわたしにはそのいやらしい臭いもこらえきれないものには感じませんでした。それどころか自分自身のものに、いとおしさをおぼえました。わたしの右手は先ほどにも増して力を入れてオシメカバーを力いっぱいもみほぐしていました。そしてとうとう逃げ場を失ったわたしのウンチはおへその上をしめつけているオシメカバーの腰ゴム（調節ゴム）をくぐりぬけ、お腹の上にあふれて来ました。もちろん、そのころにはわたしの股ぐりのゴムをおしひろげシーツ、ふとんすべてベチョベチョでした。そして、いつの間にかわたしの手も自分自身の黄色いウンチにまみれ、ちやうど幼児のドロコ遊びの手のようでした。興奮したわたしは後始末のことも忘れてベトベトになったベッドの上を転がりまわりました。そしてその手で髪の毛をかきむしり口の中につっこみ、とうとう最後はウンチまみれになったベッドの上でオシメカバーをむしり取り頭からかぶり、ウンチまみれになったわたしの秘所をかきまぜました。その後、登りつめたわたしはウンチふとんにくるまって寝入ってしまいました。真夜中になって目をさましたわたしは自分のどうしようもない性癖に涙がとまりませんでした。それからというもの、土曜日はわたしのプレイ日になってしまいました。その春に大学を卒業したわたしは、大手チェーンの薬局に勤めました。それは四年前のことです。そのころにはわたしのタンスの中にはゴムカバー、ビニールカバー、ゴムバンテージ、ゴムブルマーと数えきれないぐらゐのゴムカバーと色とりどりのオシメでいっぱいでした。そして、そのプレイは次第にエスカレートしていき、ゴムカバーなしでは生きられないわたしになっていました。そして、運命の日が来たのです。その日はむし暑い日でした。その日は、わたしの誕生日でしたので特に可惡らしいベビーになろうと、わたしの一番好きなオシメ六枚を当て、その上はレースでふちどりした真赤の総ゴム製のオシメカ



バー（特注品）でお尻を包みました。ぶっくりふくれたお尻、その上はスケスケの総フリルのピンクのネグリジェでした。その日は日曜日で十一時ごろに起きたせいか、昼ごろにはゴムで逃げ場を失った汗やおもらしのオシッコで中はむれがひどく、ホックのすき間から少し動いてもアンモニアの臭い（オシッコ）がもれていました。部屋中をアンモニアの臭いでムンムンさせながら可愛らしく、本当に可愛らしく赤ちゃんになり切ったわたしは、自分の姿を鏡にうつしてみました。ブツクリとふくらんだお尻、裾のフリル、キューツとしぼった股ぐり、何てかわいらしいオシメスタイルでしょう。鏡に映った私、何ていやらしいポーズでしょう。私の右手はそんな可愛らしい赤ちゃんのオシメカバーの調節ゴムをおしひろげ、秘所の奥深くのめり込ませているのです。その時です。玄関のチャイムがなってノックの音、わたしはとっさにサッとガウンをかけ前をつくらって何くわぬ顔でドアを半分開きました。そこには隣の部屋を借りている整備工場に勤めている四十二才の立石さんが立っていました。「おはよう、回覧板です」無雑作に言った彼はわたしの顔を見るのではなくガウンの裾の方をおどろいた顔をして見ていました。ハッとして気付き、裾を



見たわたしはガウンの裾がはなれて中からスケスケのネグリジェの下に総ゴムのフリル付きの、しかもぶっくりとオシメでふくれ上った真ッ赤なオシメカバーがのぞいているのに気付きました。その時のわたしのおどろき、そしてはずかしさは本当に今考えても冷汗をかきます。わたしはとっさに、裾を合わせました。そして「ありがとう」と言ってドアをしめようとしてしまいました。しかし、その時、彼の力強い右手はドアのノブにかかっているわたしの手の上からしっかりとおさえていました。次の瞬間、彼は強引にドアの中にはいつて来ると、内側からカギをかけてしまいました。そして、ベッドの上にわたしを押し倒しました。ベッドに仰向けにされたわたしは恥かしさで目のやりどころを失いました。それは昨夜（土曜日）のオシメプレイの後始末が不充分だったことに気がついたからです。天井を仰いだわたしの目にはいったのは室内に張ったロープに総生ゴム製のオシメカバーが三枚とオシメが二、三枚干してありました。しかも、オシメカバーの股ぐりのあたりには生々しいわたしの黄色いものがベットリとついてあるではありませんか。わたしはもう観念して両手で顔をおおうと抵抗をやめました。この光景、彼の目に今、どんなに映っているこ



とでしよう。部屋中、アンモニアとウンチ、それにゴムのにおい、そして目の前にはなまめかしいネグリジェの前をいっぱいひろげ、可愛い総ゴムのフリルをほどこしたオシメカバーをはめた女。しかもその裾からはかわいらしいオシメが顔をのぞかせています。彼の目に私の股間から離れませんでした。そして、次の瞬間、彼はわたしの足にまたがりあつという間にオシメカバーの前あてをいっ気に引きむりました。ムツとするアンモニアの臭いがツーンと鼻をつきました。わたしは恥かしさをこらえて次におこる瞬間を待ちました。しかし、彼は異様に興奮した目をその一点に合わせたまま動こうとしませんでした。そして、おもむろに私から離れた彼は、わたしの顔のそばにすわり、「強子ッ、おれは前から、あんたのオシメカバー癖を知っていたんだ。去年の夏、この部屋のカギが忘れたままになっていた時、部屋の中をのぞいたら、赤ちゃんもいないのに、部屋いっぱいオシメとオシメカバーが干してあったのを見て変だと思い、それから、気をつけていたんだ。そして、ゴミ収集日にいつもパンパースをビニール袋いっぱい詰めてすてていることが分ったんだ。おれは強子が会社に出た後、ごみ箱からこっそり取って来て部屋中ひろげて強

子のオシッコやグリセリンでドロドロになったウンチをむさぼり自分を慰さめていたんだ。近ごろはパンパースでなく可愛いフリルのついた、ウォーキウオーキやムーニーのオシメに変ったことも知っているんだよ。今日こんなことをしてごめん、だけど、どうしようもないんだ。おれもオシメに以前から興味があつたんだよ。たのむ。乱暴したりしないからおれと付き合ってくれ」と泣き出さんばかりの顔で私に頼むのです。私は心とは反対に「いや、いや、恥かしい、出て行って……」と言いました。しかし、わたしの表情で彼はわたしの承諾を理解しました。そのことがあつてからのわたし達の生活は記す必要はないと思います。それから一年して、わたしたちは本当に幸せな結婚をしました。そして、待望の長女、由香が生まれました。今日は土曜日、週一回の私達のハード・プレイの日です。わたしは由香のオシメの洗濯が終わり、ベランダで干しています。可愛い動物柄のオシメ。そして最後にオシメカバーが四枚、プチンと快よい音をたてながら風にとばされないように、スナップをとめます。四十枚近い由香のオシメの中には、もちろん「強子用オシメ」が半分はあるのです。昼近くに

のように八枚のオシメを当てカキ色の見るからになまめかしい総ゴム製のオシメカバーでお尻をまとめます。スヨートはフレイヤーをはき、外からは一見わかりません。一時過ぎに主人が帰って来ました。帰って来るなりスカートをめくり、私のオシメを確かめました。主人はわたしのお尻にオシメカバーがはめられているのを確認すると安心したように「昼メシ!!」といばって言います。昼食を早々に済ませますとわたしたちはドアをロックし、カーテンを二重に張り、ころげるようにベッドに走ります。由香はとなりのベビーサークルでスヤスヤと眠っています。その時のわたしのスタイル、もちろんスケスケのベビードールのピンクのネグリジェ、その下には昼前につけたままのオシメカバー。主人は午前中わたしの準備したものをベッドの下から取り出します。洗面器いっぱいのお塩水、赤ゴム製のエネマシリンジ、予備のオシメ、オシメカバー二枚、それに大巾の飴色のエネマ生ゴムシート。主人は手早くわたしのお尻の下にこの生ゴムシート（この生ゴムシートには「強子用オネショパット」と刺しゅうしてあります）をいっぱいひろげました。そして自分もレース付きの飴ゴムブリーフをつけると準備完了。わたしにのりかかってきました。そし



て、熱い熱いキッス、わたしの唇を舌でこじあけてきて、強くわたしの舌を吸っています。わたしの舌は吸われながら彼の舌とからみ合い、出たりはいったり抽送をくりかえします。そして口中は彼の唾液とわたしの唾液でいっぱいになります。時々彼はそれをゴクンと飲んでくれます。わたしも時々ゴクンとおかしをします。そんな時でも彼の右手はわたしのオシメカバーの裾から指をしのばせ、肉芽をやさしく愛撫してくれています。その時のカバーの中、考えただけでも恥かしくなるくらい、もうジョボジョボです。主人はわたしの身体の全てを舌先で愛撫するとむっくりとおき上がり、いよいよ本番にかかるのです。主人は私の脚を大きくひろげると、オシメカバーのホックを一つずつプチンプチンとはずしていきます。そして八個のホックを全部はずすと一気に前当てをガバツとはぎとります、「アア、恥かしい、見ないで、パパーッ」と甘え声を出す私です。そして主人の前には私のぬれそぼったアヌスがさらけ出されているのです。主人はそんなアヌスにつばをつけた指をそつとあてがいくいと力を入れてきます。その気持のいいこと、わたしは主人の指をぬかせまいと一心にアヌスに力を入れます。主人は「強子、いいぞ、いいぞ、今日は最高の

誕生日にしようね」とささやいてくれます。「うん、パパ、おねがい、今日は強子を最高に可愛い赤ちゃんにしてネ」と答えてやります。そして主人はいよいよ、無気味に黒光りのするエネマシリンジの嘴管を、引き抜いた指の後にそつとはめこんでいきます。一〇センチもある嘴管を含みこんだアヌスに主人はそれが抜けないように輪ゴムで固定します。そして右手でブツクリふくらんだシリンジの中央部をぐいぐい握りつぶしていきます。いじわるな主人は時々一方の端を洗面器からはずし、空気をグルグル、ビビーツといやらしい音をさせながら入れてしまいます。その時のわたし、どうしようもない気持です。腸壁に空気がつきあたり、押し上げ押し上げ、腸の中をかけめぐるとき……、そしてまた、液が





はいりはじめました。わたしは甘え声で「パパ、出そうになって来たわ、もう許してえ、すぐ出そう、オシメカバーのボタン早くはめて、お願いッ」主人はすぐプチンプチンとはめておもらしの準備をしてくれました。わたしは二〇〇〇Cの液をほとんど含みこんでしまいました。そしていよいよ主人は静かにやさしく嘴管を引き抜いてくれました。わたしは押し寄せる猛烈な排泄感をこらえながら「パパ、はやく強子を抱いて」とおねだりをしました。主人のやさしく抱いた手は背中

の愛撫を忘れませんでした。わたしは両手をつかきむしりました。主人の背中がわたしの爪あとで血がにじんでいました。陣痛の苦しみに似た絶頂がおそって来て四回目「パパ、もうだめ強子、おもらししちゃう、だめ、だめッ」と叫んだ時、主人はくるりと向きをかえ69の形になり、わたしのオシメカバーの下に顔をべったりとつけました。そして口でぶっくりふくらんだオシメカバーに軽く歯をあてて噛んだり、耳をおしつけたりするので「パパッ、いや、口を離してッ 出ちゃう、もうだめ、もれちゃう」と言った時でした。限界を越えた力はどうとうわたしのアヌスをおし拡げ、ジュウッバババージョジ

ヨジョッ。それがわたしにもはっきりわかります。主人の耳はオシメカバーに押しつけられています。恥かしい、恥かしい。しかし、どうしようありません。ジュルジュルバババーッバリバリッ。一気にオシメカバーいっぱいに出た後は断続的にジュルジュルという音をたてて出ています。そしてすっかり出終った私は放心状態でいました。少しでも動くものならオシメカバーいっぱいになったウンチがもれ出るのを知っています。主人はゆっくりとそのふくらんだオシメカバーをのみはじめました。「パパ、ダメ、ダメッ！」しかし、私のお願いとは反対に主人の手にはしだいに力が入り、オシメとオシメカバーの中のウンチがドボドボとこねまわされているのがわかるのです。「パパ、お願い、強子、ウンチでベトベトよ、ダメッ！」その声が大きかったのでしよう、ベビーサークルにスヤスヤと眠っていた由香が目を見ました。「ムニムニヌアアア」と声を出しました。考えてみるともう二時間もオシメを替えていなかったのです。「パパ、由香のオシメ……」といいかけると主人はすばやく由香のところに行っただけかと思うと、マジックテープでとめられた由香のオシメカバーを、特有のビジッ、ビジッという音をたてながらはずしました。「由香、気持ち悪かったろう、うあー ベチヨ、ベチヨ」といいながら、主人はベチヨベチヨのオシメでお尻をふきながら、新しいオシメと替えていました。わたしは由香にかまっているのがにくらしく「パパ早く、強子のオシメも、早く 早くう」とおねだりをしました。由香のオシメを替え終った主人は「さあ、今度は強子ちゃんのおシメを替えようね」といいながら戻ってくると、いきなり私の顔に何かぬれたものを押しつけました。それが何であるかは、私にはすぐわかりました。そうです。今、替えたばかりの由香のウンチでベチヨベチヨになったオシメです。私は一瞬はらいのけようとしていましたが、もうその時はいちばんウンチにまみれた部分を私の口の中に押し込んでいました。私は口いっぱいに由香のウンチとおシッコをくわえたまま声も出せませんでした。私はその時、高校時代の妹とのことを思い出していました。妹のそれと同じ味……。すばらしい味でした。主人は私に馬乗りになると、今度はやさしくていねいにオシメカバーのボタンを一つ一つあけはじめました。私は「ダメ、オシメカバーをはずしちゃダメッ」とお願いするのですが声になりません。それどころか主人は由香のウンチのついたオシメカバーで私の顔にマス



クをしてしまったのです。ゴムシートの上に大の字になってころがって、その股間にはオシメカバーがはめられ……。そしてひろげられ、そこにはウンチにまみれた秘所も秘毛も見わけのつかないくらいに……。お腹はおへその上まで……。主人は自分もウンチまみれになるのもかまわず、私を力強く抱きしめました。そして猛りくるった一物をウンチにまみれた割れ目に当てがうと一気に押し入れました。ブチュ、ブチュッといういやらしい音を立てて抽送をしています。主人の背にまわしたわたしの手は爪を立てひっかきまわし「いじめて、いじめて、もっと！ もっと、強子をいじめてッ！」わたしは生ゴムの臭い、ウンチ、アンモニアの臭いを快よくかきながら登りつめていきました。主人もいつもになく全身の力をふりしぼってむかって来ます。その時のわたしたちにはせつかくのゴムシートも無意味でした。主人もわたしもウンチでニルニル、そして何を思ったのか、私の顔にかぶせた由香のオシメカバーを引きむしるなり、くると自分の身体の向きを変えシックス・ナインの形になったかと思うと私の股間に顔をベチョ、ベチョさせながらうめましました。そして彼の舌は私の秘所へ突っ込まれかきまわしていました。私の顔をまたぐ形で

おおいかぶさっている主人、私のウンチでベチョベチョにまみれている主人の一物を私はのどが突き破れるくらいのみ込み、しごいていました。その時です。私の顔の上の主人のお尻がブルブルとケイレンしたかと思うと生あたたかいお尻がむっくりふくれ上がりしました。そしてアヌスが大きく口を開きビューッジョジョババー、私の顔は彼の股で固定されています。よけようにもよけられず。主人のドロドロのウンチを顔中浴びせかけられました。後で主人が白状するには、由香のオシメを替えにちよつとベッドを立った時、自分もイチヂク浣腸を二個施術したのだそうです。五分後、断続的につづいた主人の排便が終わると、二人はウンチにまみれた体を抱き合い、最高のハードセックスにはいりました。その途中でも主人は自分自身のウンチと私のウンチでミックスされたドロドロのウンチを手ですくって私の顔にこねつけました。そして最後の力をふりしぼった主人は私のお腹が突き破れるくらいの力でつきあげてくれました。「強子ッ、強子ッ！」と口にしながら同時に私の体の奥深くいっぱい彼の樹液を地ぎ込んでくれました。どれぐらい経ったでしょう。私達二人は、いや三人は新しい寝具の中で川の字になって寝ていました。もちろん

んベッドの上に張られたロープには外に干せない私の総ゴム製のオシメカバー三枚、ゴムシート、それに主人のゴムブリーフ、それに由香のかわいい、かわいいオシメカバー二枚、二十枚近い動物模様のオシメがところせましと干してあります。とてもとても幸せなこのごろです。





# 浣腸クラブ探訪記

木村敬一

金3万円です」

「マニアとしては排泄場面まで見たいわけ。

大丈夫ですか？」

「もちろんごらんになれます。写真をとる場

合一枚につき2千円です」

「プレイする人のお腹の調子もあるでしょう、

便秘の人なんていますか」

すると一寸考えた様子で、

「そう言う人がいいんですか。じゃ二三日前

から予約して頂かないと……。」

「じゃ明後日行きます。何才位の方が相

手をしてくれるんですか、それに器具はど

うします」

「多分二十才位の方が行くことになります

器具はこちらで用意します。持ち込みは別

料金になります。」

こんなやりとりのあと、当日午後大久保へ

と向った。初めてトルコへ行ったときのように

な気恥しさを乗り切って、駅前から電話を入

れる。近くの旅館を指定され、部屋が定まっ

てから、また電話を入れるようにとのこと。

「連れがあとから来ます」

と言って通されたのは「パリーの間」であっ

た。

「お風呂にでも入って待って下さいね。す

ぐ行きますから。」

思いがけなく店頭で、奇クを手にして、旧 下私の体験をレポートしてみる。SMクラブ

友に出合ったような懐かしさでペンをとった。

の存在に目を開かされた私は、更に「マンシ

高校の頃、白表紙時代の奇クを知り、初めて、

ヨンSMの総て」と言う本を手に入れたが、

浣腸マニアの存在を知ってから二十年、すで

に中年と言われる年令に達したが、マニアと

た。

しての願望は途絶えることはなかった。私の

そして、奇クには載らなかった二ヶ所程ア

場合、女性を対象としたS的なマニアなので、

タックしてみた。

実現性はなく、常に雑誌を友とした、空想の

世界だけであった。この種の雑誌も家人の目

始めは山手線O駅近くの「N」ここは実に

を避け読み終ると、倉庫の奥深くしまい込む

電話の応待が親切で好感が持てたからである。

文字通りの蔵書だが、昔の奇クとあわせて、

明るい張りのある若い女性の声で、

大型のお茶箱に十個、よくもあつめたものと、

「SですかMですか」

われながら感心する。

「Sと言うか、浣腸マニアなんだけど」

この実行不可能とあきらめていた願望を、

「お客さんやりたい方ですか」

現実化して呉れたのが、ほかならぬ奇ク復刊

「そうです」

第一号のSMクラブの紹介記事であった。以

「じゃ、Sですね、時間は一時間二十分、料



静かな宿で、耳をすますとかすかに、女性の悲鳴が聞えて来る。どうもSM専用のホテルらしい、と言ってもそれらしい設備はないようだが……。三十分ほどして、「今日は」と電話で聞きなれた、弾んだ声と共に二人連れの女性が入って来た。

「お待たせしました。この人なんだけど、SMは慣れてないので、一緒に来てって言ってもんだからついて来ちゃった」

二十七八才になるだろうか。気恥かしさを少しも感じさせない明かるさで語りかけながら視線はさり気なく、こちらを観察している。陽気に、次々と話題を変え間をもたせるところは、クラブのホステスそのものである。

若い方の女性が「一寸あたし……」と言って風呂場に入ると、「ウンチ出しちゃだめ、おしっこだけよ」と声をかける。どうも若い方は、どこかの勤めの帰りのような感じである。この人ちよっと太り過ぎで私の好みではない。ただ、若いことと、最大の魅力は、便秘しているところだった。その気配を察したように、「どう、二人一緒に遊ぶ？男の人は、出すまで面倒みなきやいけないでしょ」

「別にそんなことはないよ」  
「あら、本当に浣腸するだけでいいの？あたしも、浣腸されなくなっちゃったワ。もう

身体が慣れちゃって、浣腸しないと出なくなってるの、硬いのが少ししか出ないのよね。」

と、しきりに気を引くようなことを言う。どうも調子が良いすぎるのである。

「それとも、アナルセックスでもさせてくれる？」

「それはちよっとむづかしいのよね。バイブ責め位いならいいけど……」

そこへ若い方が戻って来た。

「もう三日もウンチしてないんだって、もし出ないといけないかしら、あたしもつきあおうか」

「ちよっと待ってくれよ、二人で六万円かい」

「そう、お金ない」見くびられたものである

「ないことはないけど、君たち相手ぢやな」

「あらごあいさつね、ぢやあたし帰る、あと

お願いね」

若い方がのこって風呂に入ってきた。風呂から出たところで、ベッドに寝かせ、アヌスに指を入れた。あまり、慣れていないらしく、指一本入れるのがやっとの感じである。「ア——ッ」と声を上げたが、実に素直でされるままになっっている。看板に偽りなく、文字通り人形の様であった。ところが、三日も便秘していると言うのに、直腸は空できれいなので

ある。興ざめして、

「何だ便秘って嘘か、お腹はきれいじゃないか。」と言うと、

「ほんとにおとといからしてないよ。浣腸すれば出るよ」

そこで彼女の持参した1000CCの浣腸器にお湯を入れて来ると、

「まって、お風呂場の方がいい」

と言って自分から湯ぶねに腕をかけて四つ這いになった。大きなお尻である。まず100CCを入れる。あっけなく入ってしまう。続いて2回、計300CC入れて見た。それから出させると、黄色い水だけが流れ出す。

「出ないじゃないか」

「やっぱり本当の浣腸（イチジク浣腸）を言っている」でないとだめなのかな。もってこなかったし、困ったなア」

本当に当惑しているようだった。そこで石鹼水を作って800CCほど入れた。

「もうだめ入らない」

私はタオルでアヌスをおさえつけた。彼女が便意を告げると私のものは、爆発寸前まで張り切ってしまった。

「もう出る、はなして」

と言うのをかまわずに五分位おさえてから、「よく見せろよ」



と言って手をはなした。

黄色い石鹼水が勢いよく流出する。つづいて少量の便が途切れ途切れに出て、期待している太いものは出てこない。よそでプレイしたあとなのではないかと言う疑いが頭をかすめる。しばらくして「出るよ」と言うのでまたうしろにまわると、こまかい便が石鹼水と一緒に流出する。同じことの繰返しであきて来たので三〇分位で切り上げてしまった。

宿を出ると、彼女もついて来たので、コーヒを飲みながら少し話した。

「浣腸ってあまり良くないね」

「そりやそうだろう、だからお金とってやらせるんじゃないか。」

「疲れちゃった」

「便秘してたって本当か」

「ほんとだよ、いつだってあの位いしか出来ないもの」

彼女の話によると、お店は〇駅から一キロ程のところ、マスターを中心に四人ほどの女性がいるそうである。

家についてからまた電話してみた。すぐにいつもの女性が出た。

「どうでした？」

「期待外れ」

「はじめてですものね」

「出ないんだよ、三〇分位でやめちゃった」

「時間かければ良かったんですよ、一時間二〇分あるんですから。家に帰ってからお腹痛いってトイレに入ってしまったよ」

「やっぱりあんたと遊んだ方が良かったかもね。」

「若い人がいいって言うから、私で良かったら、お相手しますよ、またいらして下さい。」

こゝは、営業としても、どこかしっとりした情感があつて、暇を見付けてまた遊びたい気がするところだった。他のプレイ場を一まわりしたら、再度アタックするつもりでいる。

次にたずねたのは、浣腸専門店だった。リストには「S」と出ている。

「もしもしSさんですか？」

「はい、Sはなくなりました。こちら、浣腸科なんです」

「浣腸科って、やらせるの？」

「お客さん、Sですか」

「Sって、やりたい方だけど」

「じゃ、Sですね。三万一千円です。」

「毎日やってるの？」

「はい、十二時から受付、十二時半からプレイ出来ます」

「身体の調子もあるでしょう。浣腸して何も

出なくてはつまらない。マニアとしては排泄場面が見たいんだから」

「Sのお客さんは一日一度しかとりません、大丈夫です。」

「いくつ位いの人が相手してくれるの？」

「皆さん二〇代です。」

「明日、行きます。」

「池袋西口からお電話下さい。」

日曜日の池袋はごったがえしていた。電話で、あるマンションを指定され、その部屋だけ標札がない。ブザーを押すと、十七、八才のタレントの様に魅力的な美少女があらわれた。

「中は暗いから気をつけて下さい」

室内は暗幕が張りめぐらされ、赤い照明が、異様な雰囲気を作っている。

「お客さんSですね、三万一千円頂きます」

少女は事務的に言う。

「おねえさん、すぐきれいだけど相手して呉れないの」

やっとなにっこりして

「アラ、あたし、Mの方ならお相手しますワ」

「Mになりたいな」

「フッフツ」と笑って

「すぐ呼んで来ます。この上の階にいるんです。少しお待ち下さい。」



と言って奇クをおいて行った。

目がなれて来たのであたりを見回すと、暗と答える。

幕でおおわれた窓際に診察台が置いてあって、「排泄まで見たいんだけど。」

その横に1000CC程液体の入ったイルリ

ガートルが立ててある。出窓になっている棚

には数足のハイヒールが並べてあって、壁に

は四、五本の鞭が掛けてあった。診察台の横

の台上には、大きなローソクを入れたカント、

白色ワセリンとグリセリンの500CC入りの

ビンが並んでいた。二〇分も待たされたの

で、その部屋を出ると、先程の少女がいた。

「大分待たせるね」

「ここはSの方はほとんど受けないんです。

Mの方は仕度に手間どるんですよ。本でもお

もちしましょう」

とビニール本を数冊もって来た。更に三〇分

程待たされて、

「お待たせしました」

と入って来たのは、二十五、六の看護服をつ

けた女性である。

「今、準備します。洋服脱いで下さい。」

と命令的に言う。

「一寸待って、あんた間違えてない？、僕が

やりたいんだよ」

とあわて、言うのと、

「浣腸して下さるんでしょ。上衣とったほう

がやり良いですよ。」

と答える。

「排泄まで見たいんだけど。」

「いいですよ」

と言いながら、

「今、生理なの、汚いとこ見えちゃうかな」

「えーっ、そりや大変だ、いいのかい」

「電話の子が受けちゃったと言うから仕方な

いと思って来たんだけど……」

「看護婦みたいな服装しちゃって」

「あたしたち、看護婦仲間でやってるの、ほ

とんどMのお客さんばかりよ」

「じゃやらせる方はあまり好かないわけか」

「そうでもないわ。浣腸は好きだから毎日や

ってるの」

「毎日やってたら、お腹きれいだろう」

「今日はまだ起きたばかりだから入ってるわ」

と言いながら、紙コップにお湯を入れて来た。

検診台に横になると

「浣腸はこれだけよ、もっとも上手にやった

らもう一回やらせてあげる」

「これを使うのよ」と500CC浣腸器を渡た

し

「肛門から直腸の方に向けてしずかに入れる

の、痛くしちゃダメよ」

命令的な口調であまり愉快ではない。

「アヌスがよく見えないよ」

と言うと、思い切りよくくると足を上げる。

タンポンの入った部分の下に小さなアヌスが

顔を出した。毎日浣腸しているにしては、ひ

きしまったアヌスだった。先端をさし込んで

入れ始めると、

「もっと強く、一気に入れなくちゃダメ」

また命令口調である。興ざめたがどうにか

500CC浣腸器で3回繰返えすと、お湯がな

くなってしまった。するとすぐに、

「あ、きいて来た」

と立ち上がってしまう。

「ずい分早いな」

「毎日浣腸してるから早いよ。がまんして

ると、腸に吸収されちゃうから、早くださ

なくちゃ」

「どこでやるの」と言うと、洗面器を出して、

「ここでもいい？」と聞く。

「良く見えないよ」

「じゃこの上でやるわね」

と検診台の上に洗面器をおいてその上にしや

がむ。後からのぞき込むとすぐ排泄がはじま

った。黄色くなった水を出すと、すぐ拇指大

の軟便を次々と排泄、3分程で終わってしまった。

テキパキと後始末。この人は総ての行動

が実にキビキビしている。プレイが始まって



から一〇分位しかたっていない。

「さあ、今度はあなたの番よ。ズボン脱ぎなさい」

と言う。私はあわて、しまった。

「僕はいいよ」

「あら、浣腸マニアの人って、自分がやられるのも好きなんだけど、本当の浣腸教えてあげるわよ」

目がギラギラ光って迫力充分。このときはじめて、この人がSだと気付いた。

「いや、いい、やられるのは好きじゃない。

それより、時間がまだあるだろ、話しよう。」

「あんた本当の浣腸マニアじゃないわね」

「そんなことないよ。でも、浣腸よりもっと排泄場面が見たいんだナ、それもあんたのような普通便では面白くない、便秘症の人が幾日も苦しんだ末、二〇分も三〇分もかかって排便するところが見られたら、最高だけど、それは普通不可能だから、浣腸して苦しめるわけ」

「あなたはSでもMでもないわ」

「そうかな、でも、婦人雑誌の、便秘の告白記事を読んでも昂奮するんだよ。それにアナルセックスによる苦痛の描写などを読んでも同じだ。やっぱりSに入るんじゃないかな。」

「あんたのはフェチって言うの」

「フェチって、パンティなんかぬすむやつだろ。僕は全然興味ないな」

「それもフェチの一種ね。要するに汚ないものに興味をもつことをフェチって言うのよ。肛門だって汚ないところでしょ」

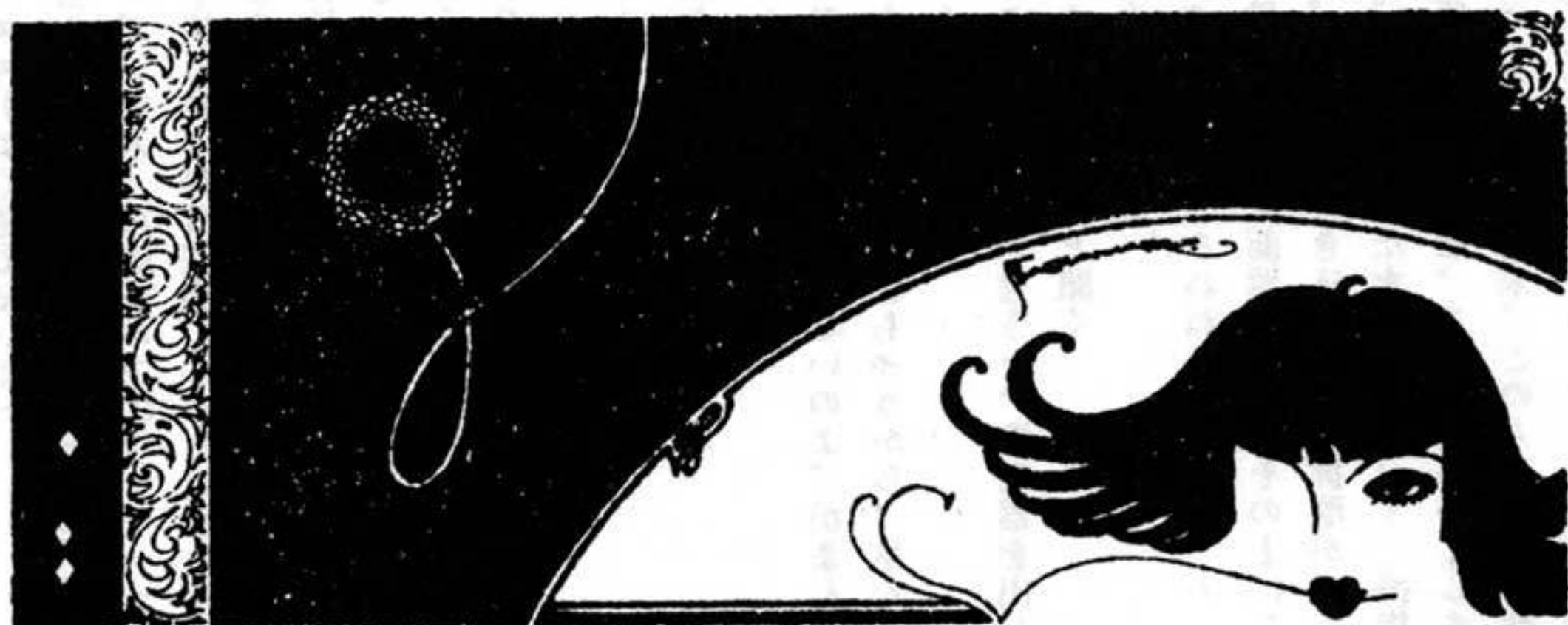
それから彼女はいろいろと例を上げて、Sの話を話してくれた。彼女に言わせると奇クの投稿者も、医師などが多いとのことだった。

「あたしはSだから、Mにはなり切れない。

Mの人とプレイしているときに本当の自分でいつもの自分は仮の姿だって気がするわ」  
帰りに耳もとで「あんたにピッタリの人を紹介するわ、またこない」と言う。「近いうちにね」と答えたが、私のような要求は、いくら看護婦さんでも無理であろう。

こゝの特徴は、よく設備がととのっていて浣腸専門に出来ていることである。二つあるもう一方の部屋などは、病院の手術室のように、浣腸に関するどんなプレイでも出来るようになってる。Mの人には素敵なプレイ場と言えるだろう。Mの代金は一万円安い。むしろ手間暇かかると思われるのかえって安いのはおかしいことである。

以上浣腸マニアの立場から二ヶ所ほどレポートしたが時間とポケットマネーをにらみあわせて、総てまわってみるつもりでいる。





# 投稿画廊



ルードヴィッヒ・蘭



磔写真の疑問  
にお答えする

# 考察・磔の美学

ロマン派生

## 磔と女

本誌四月号に掲載された私の雑文「ビニ本  
選びのノウハウ」について、本文はともかく  
として、最初のカット写真「磔」について、  
読者からの問い合わせが、編集部に殺倒して  
いるそうである。

「あの写真は映画の一カットなのか」

「あれは誰が、どこで撮ったものか」

「あのモデルは誰なのか」

「両足を横木の上に乗せず、横木の前で縛  
ってあるのは何故か」

編集部ではいちいち対応しきれないので、  
私に説明して欲しいとの依頼があった。そこ  
で、誌上で詳しく説明しようと筆をとった次  
第である。

あの写真に対して、編集部で付けた説明に





「ロマン派生氏の愛蔵する云々」とあったが、私が愛蔵しているには間違いないのだが、あれは、猥友坂本信三氏と共に撮影したものだから、「ロマン派生氏撮影の日々」と書いて欲しかった。多分編集部では、私があんな野外の磔シーンを撮影出来る筈はない、どこかで手に入れた写真を大切に蔵っておいたのだろう、と考えてそう書いたのだろうが、どっこいロマン派生はなかなか思い切ったこともやるのですぞ。

そんなわけで、まず、撮影者はかくいうロマン派生その人で、モデルは六月号にも登場した、坂本氏の大切な女囚、上川ユキその人である。

場所は京都郊外の北山方面だが、詳しく書くと差し障りがあるので、あいまいにしておく。

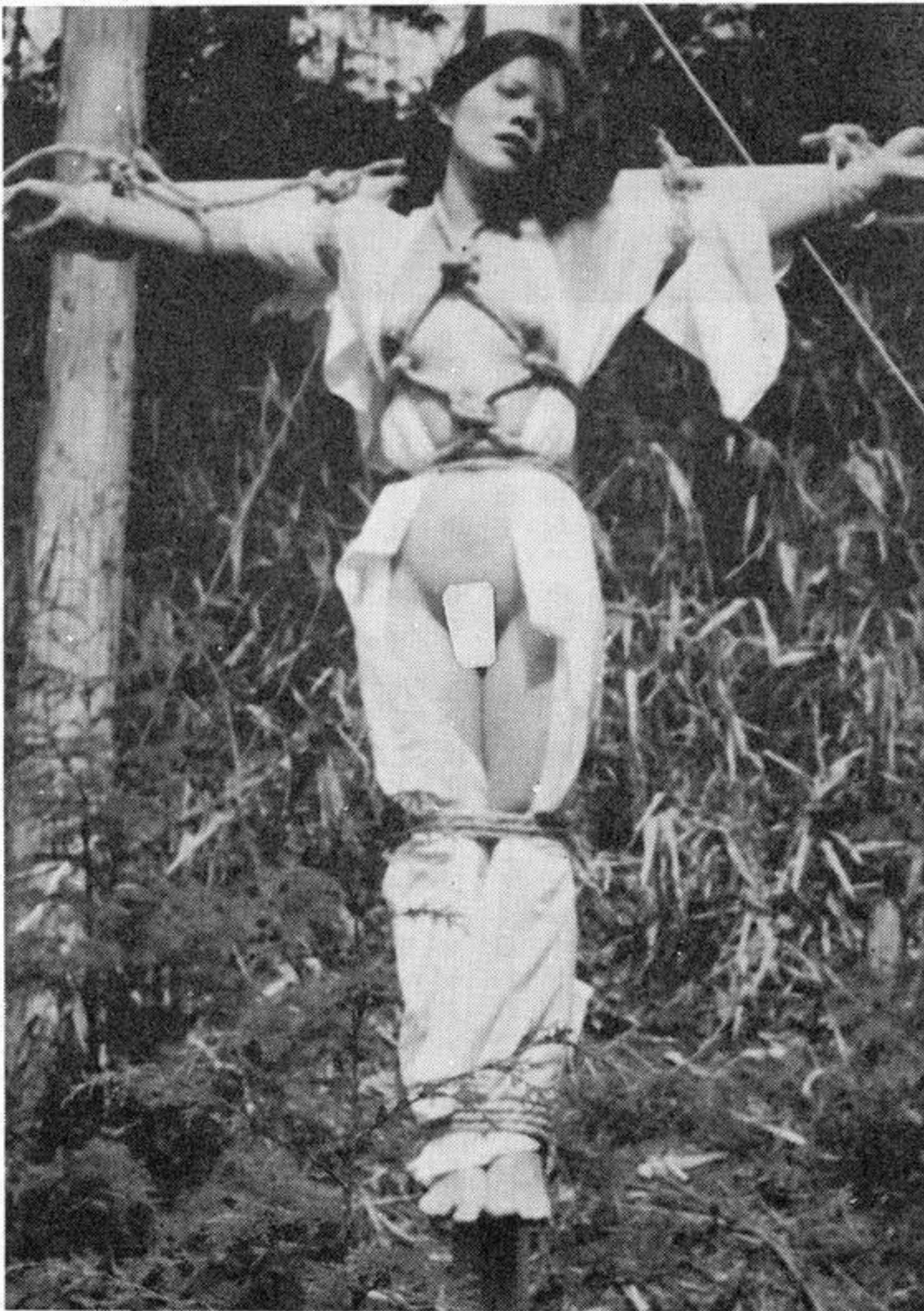
さて、ここまで書いてくると、一部の読者の方からクレームがつくかも知れない。

それは、実はこの写真及び、今回発表する写真の多くは、すでに昭和五十四年二月頃、「えすとえむ」というミニコミ誌に発表したものと同一ものである。同じ写真を二番煎じで使うのは、寄稿家のモラルに反するということは重々承知しているのだが、私としてはあの磔写真は自分でもかなり気に入っている

ので、大勢の人に見てもらいたい気持ちが強かった。残念なことに「えすとえむ」誌は実売数が数百部にすぎず、あの写真を見て反応を示してくれた人は数名に過ぎなかった。そのうちの一人の方とは、それが御縁で。その後現在も親しくお付き合い願っているが、自分と同じ嗜好の人と知り合い、語り合うことは、何よりも楽しいことである。私が毎月セッセ

とつまらない雑文を書いているのは、私と同じ趣向の人達と知り合いたいというのが目的で、原稿料が欲しいわけでも、有名になりたいわけでもない。

そんなわけで、かつて「えすとえむ」誌上で、私の磔写真を御覧になった方々には誠に申し訳ないとは思っているのだが、もう一回本誌に載せることを、お許し頂きたいと思う。







なお、「えすえむ」論調査をするわけにも行かないが、どうだろう。誌の浦戸編集長には了解を得ているので、そちらの方からはクレームはつかないことになっている。

どういう星のもとに生れたのか、私は物心ついて以来、磔に強く惹きつけられている。

子供の頃から、小説や映画などに磔の場面が出てくると、胸がドキドキして来たものである。最近でも、テレビの時代劇などで磔シーンが出てくると、妙にソワソワして来るのは、子供の頃と同じである。

このような磔にとり憑かれたように強い興味を持ち続けているのは私だけだろうか。

「貴君は磔に関心を持っていますか」と与

う。人類の三〇パーセント位は関心があるのではなかろうか。そして、多分一〇パーセント位の人達はかなり強い関心をもっているのではないかと思う。

そう推測する理由の一つは、古今東西の小説、演劇、映画等に、磔シーンがとり上げられることが非常に多い。そして、その多くの場合は磔シーンはストーリー展開上必然性をもって登場してくるわけではなく、むしろ悲しく美しいエピソードとして語られているようである。と、いうことは作者も見ると磔を一つの美しいショウとして楽しもうとしているからだと思う。

ま、そんなことはどうでもよろしい。それよりも、世の中の人口の一〇パーセントの人は磔に関心をもっているに違いない、ましてや本誌を読む位の方々なら三〇パーセント以上が強い関心をもっているだろうと、勝手に断定して、それを頼りに書き進めよう。

キリスト教国では磔というまぜキリストの磔刑を連想するので、磔にかけられた女の美しさ、などと考える人は少ないかも知れない。

しかしキリスト教徒ならざる私にとって磔にかけられた人物は、若くて美しい女でない



と、どうにもならない。あまり不器量だった  
り、身体の線が崩れていては全く関心が沸か  
ない。

若い女は、別に磔にかけなくても美しいの  
だが、それが磔柱に縛りつけられると、さら  
に一層美しさを増し、神々しいというか涙が  
こぼれそうになる位のものである。

何故美しいのか詮索するのも野暮かも知れ  
ないが、多少の理屈をこねてみよう。

磔が美しく思える理由の第一は、まずその  
ポーズの恰好の良さにあると思う。両手を左  
右に広げられた形は、人間のポーズのうち最  
も美しいものであろう。

そして、そのポーズが自分でそうしている  
のではなく、他者の力で無理に強制されてい  
る所が、いかにもマゾヒズムを象徴してい  
るように見える。

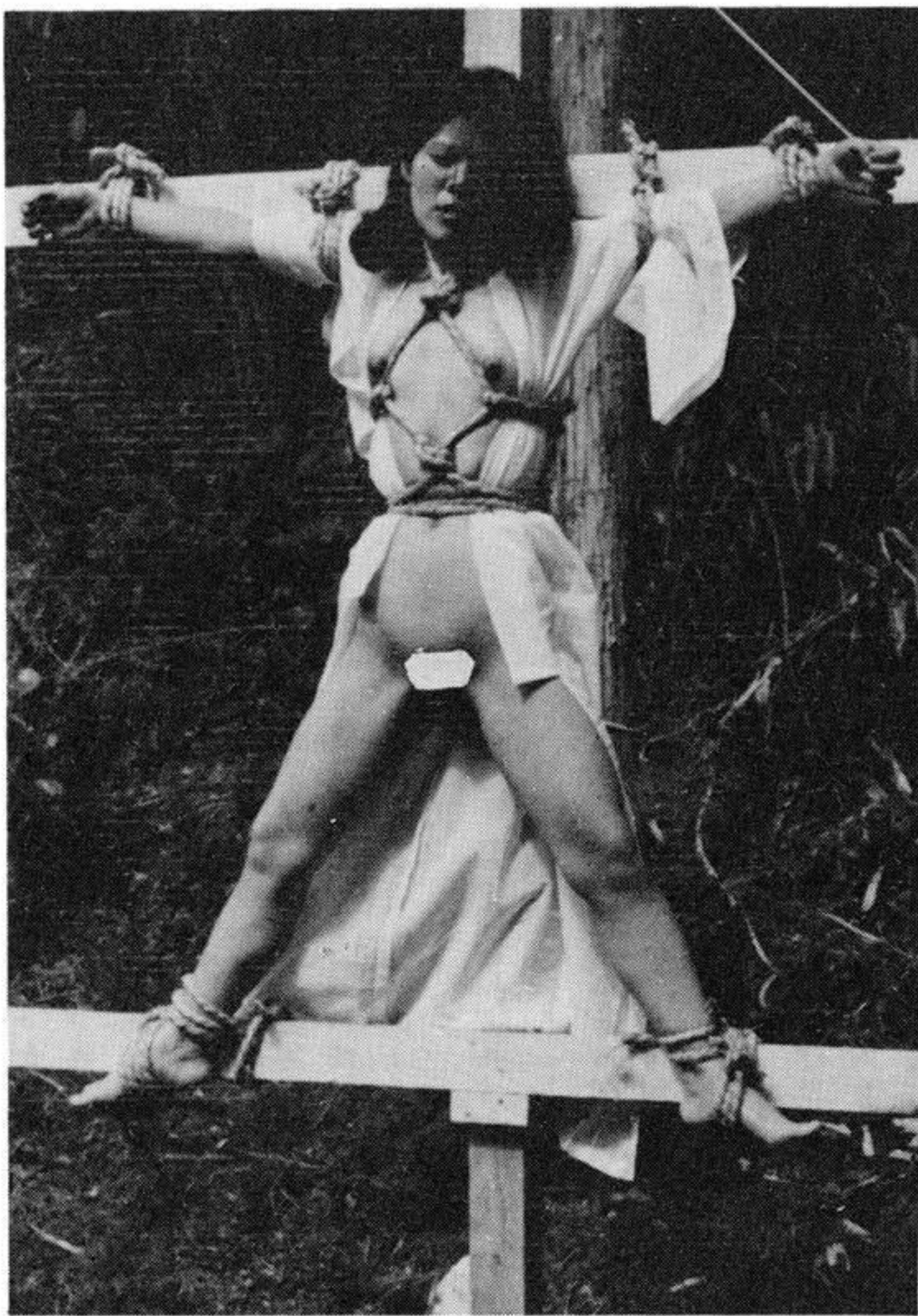
第二の要因としては、柔らかい女体が、硬  
い木材にしっかりと縛りつけられて、身動き  
出来ない緊張感がよろしい。若い女は、何も  
磔でなくても、きつく縛り上げれば、それで  
十分に美しいものだが、それが柱なり、磔柱  
に縛りつけられれば、一層身動き出来る余地  
がなくなる。本来ピチピチと動き廻るべき女  
体をガッチリと固定してしまう所が磔の魅力  
の一つであらう。

第三に、磔にかけられた女の足が地上を離  
れて中空に浮んでいることも、その魅力の大  
きな要因の一つである。考えて見て欲しい、  
磔にされた女の足が地面についていたら、な  
んとしまりのない姿に見えることか。

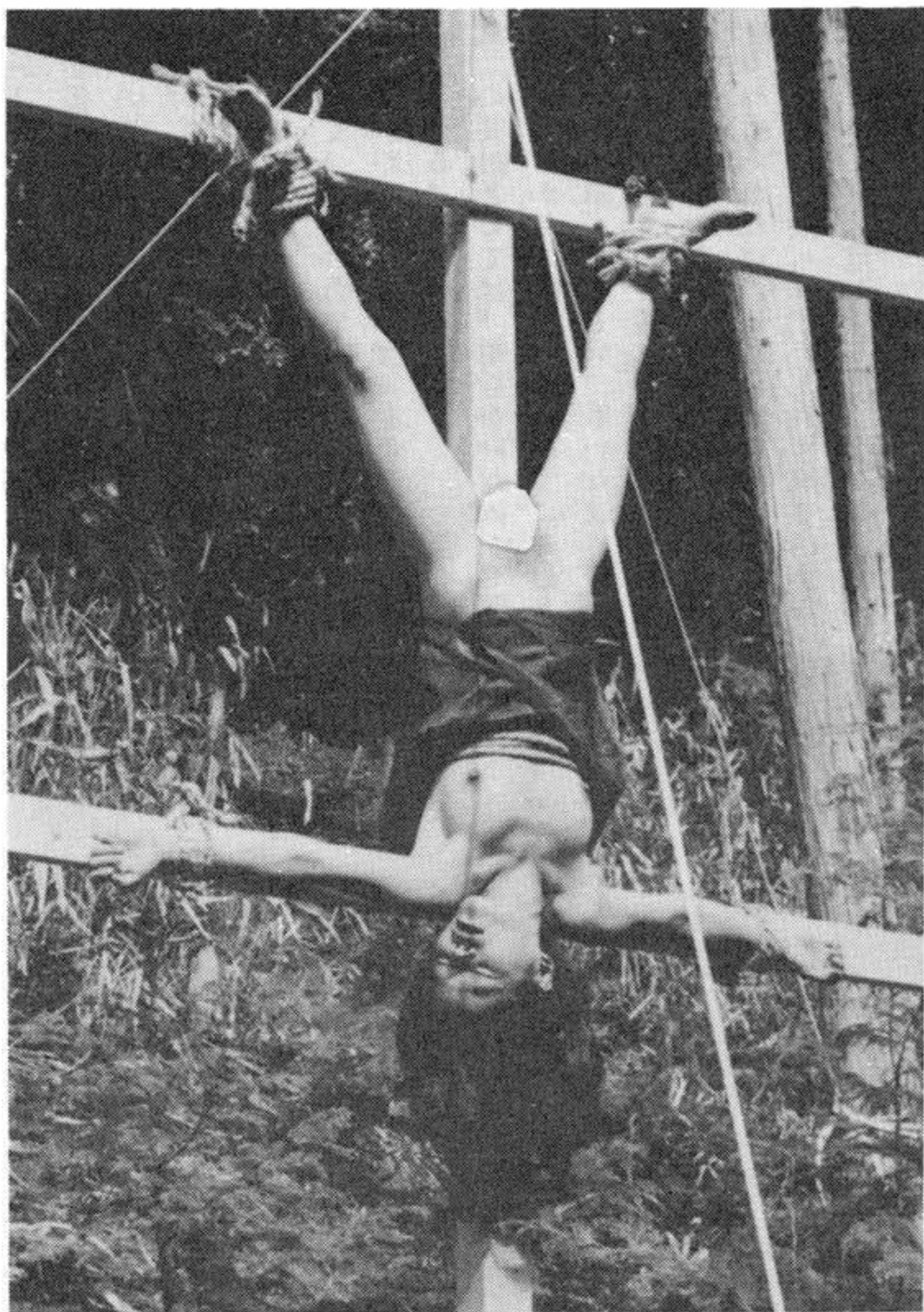
それは柱や立木に女を立縛りにした場合で  
も同じで、足が地についているか、中空にあ  
るかで、その美しさはぐんと変わってくる。

また柱縛りではなく、宙吊りにした時も、  
女が空中に浮かんでいるということは、それ  
自体美しさの要因となる。

何故そうなのかはよくわからないが、羽衣  
伝説のように、空中にある女、すなわち天女  
という民俗学的な審美感覚があるのかも知れ  
ないし、あるいは仰ぎ見る角度が美しく見せ  
るのかも知れない。ともかくも、磔られた女







だから、私がここで、女の磔はこういうのが最も美しいと思うと、色々と述べ立てて見ても、それは全く個人的見解であって、本来はどうでもよいことなのであろう。それなのに何故書くかといえば、私とかなり似たような審美眼を持つ人も結構居るようなので同志を募りたいという、いわば、大日本磔党旗揚げのP・Rが目的なのである。

## 磔に適した女

体格は並か小柄で、やや細身の女がよい。出来れば乳房は少しだけ大き目で、全身が柔らかく輪郭がぼうと霞んでいるようなならば最高である。

顔は細身で、愁いを帯びたというか、悲しそうな顔がよい。幾ら美人でも、宮崎美子のように健康そうで明るい感じの女は、磔にはむかない。

首が細くて、見るからにいじめたくなるような弱々しい女が良い。

もちろんパーマをかけず直毛の長い髪がよいが、これはかつらを使って修正することも出来る。

の美しさは、地面から足がはなれていることが大きな条件なのである。

磔の美しさは、このような三つの要因に分けて考えられるが、さて、実際にどんな磔を美しいと思うかといわれれば、それこそ細かい問題が山程ある。

磔に限らず、SMの愛好家は、それぞれ自分の好みの女性、好みの縛り方、好みのプレ

イが、かなり厳格にきまっています。自分の好みには三文の値打ちも認めない。それは極めて個人的な好みで厳しいものである。云いかえれば、それぞれの審美眼があって、普遍性はなかなか求めにくい。もちろん、それで良いので、縛りの美学の規格を統一しようなどということは誰も考えはしない



## 柱の形状

磔柱には十字形、X字形、Y字形、T字形その他色々あり、西洋では、セントアンドリュースクロスとか、セントアンソニークロスとか、それぞれ由緒正しい名前がついているらしい。

しかし、日本の女を磔にかけけるには、X字、Y字形、T字形等はあまり似合わないようである。

矢張り十字形あるいは下に足を開股させて縛るための横木を一本加えたキ字形にしくはない。

徳川時代の御定法では、磔柱の寸法がちやんとときまわっていて、四寸角の材木で、足が地上四尺位になをように作られていたらしい。

しかし、この寸法は男囚の処刑にはよいとして、女を縛りつけるにはいささかゴツすぎるようだ。

女を磔るには十センチ角の柱に、十センチ×五センチ厚さの横木を使い、足が地上九十センチ位の高さになるのが良い。柱の上部は女の頭の上に十五から二十センチ出る位とし、腕の横木は、伸ばして縛りつけた女の指先から十ないし十五センチ出る程度がよい。

開股磔の場合、足を縛る為の横木は腕の横木より左右とも三十センチ位短かくした方がよい。

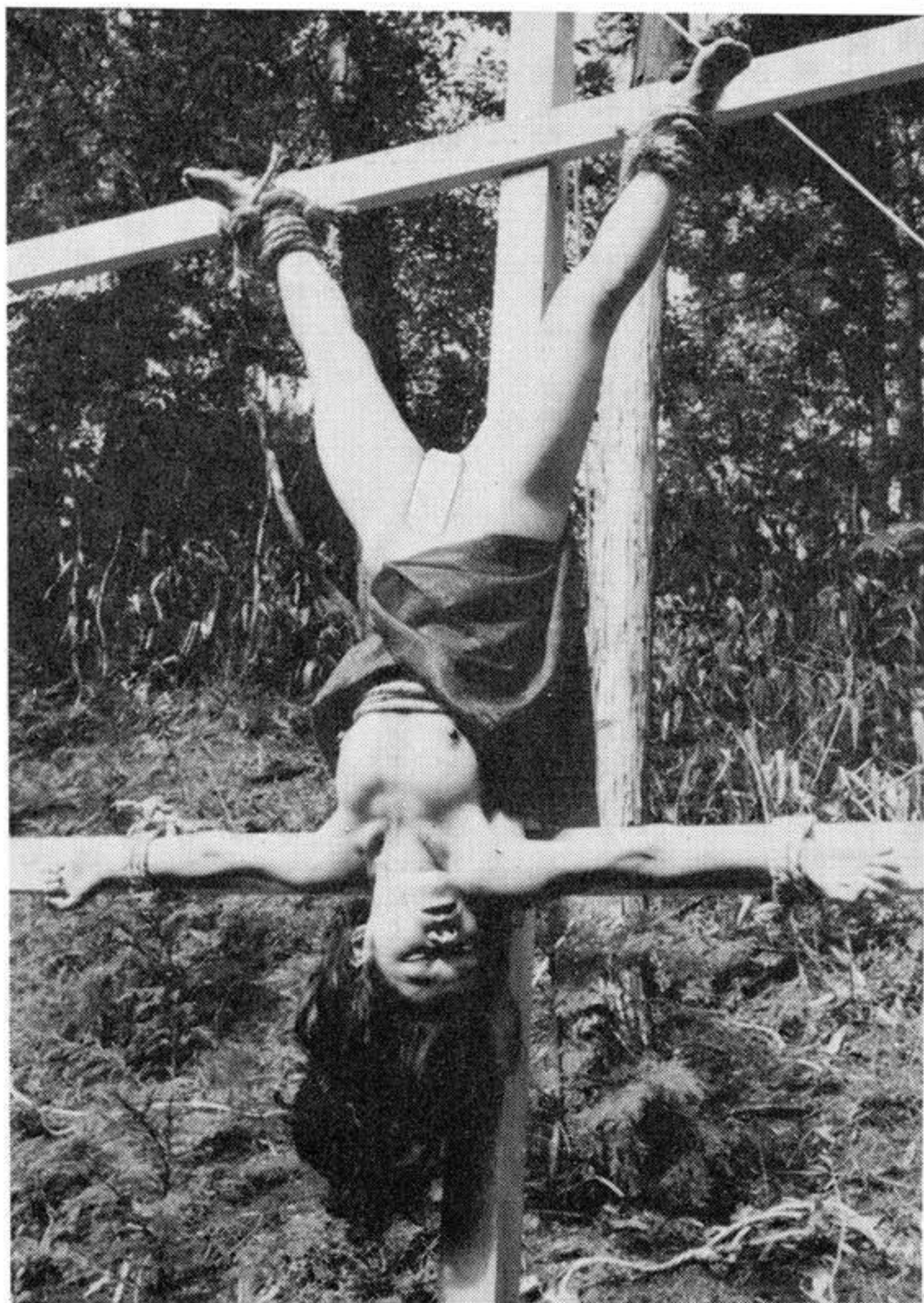
腕木と足木の長さのバランスとその取りつけ位置も結構大切なものである。

もちろん足を載せる台などについては、全くのぶち壊しである。

## 衣裳と縄

全裸の磔は、それなりに味があると思うが、どちらかと云えば、それは現代的な感じの磔で、スケ番のリンチといった雰囲気になってしまいそうである。

私のイメージにある磔は、どうしても時代





劇のお仕置きという感じがこびりついているので、全裸よりも囚衣とか赤い腰巻などを身につけさせたい。

白い囚衣を着せられて裸馬に乘せられ、市中引き廻しの上磔というシーンが、固定観念になってしまっている私には、白い囚衣が磔にはもつとふさわしい衣裳だと思う。

白い囚衣には黄色い荒縄がもつとも似合う。

色彩の配合もさりながら、荒縄のトゲトゲした材質感と、それが柔らかな女体を巻き締める痛々しさがまた良いコントラストを与えている。さらに、荒縄すなわち使い捨てという感じが、処刑というムードにぴったりする。

あまりにも立派な縄では、一回の磔刑で使い捨てるとい感じがしなくなり、即、処刑ではないお遊びという印象になってしまう。

どうせお遊びには違いないのだが、なるべく見た目に迫力があつた方がよい。

まさか真赤に染めた縄を使ったりする人は居ないだろうが、映画などの磔シーンに袋編みにした洋風のロープで縛ったものがある。

これは、たとえそのストーリーが現代のものであってもちよつとしらける。少なくとも麻縄程度の粗野な感じの縄を使って欲しい。

白い囚衣は、江戸時代の公刑のムードだが、

赤い腰巻き一つで上半身を裸にすると、それは悪代官とか、百姓一揆とか。あるいは山賊に捕えられた村娘のような印象になる。これもまた面白いと思う。特に、逆さ磔など、公刑ではなかったような形に磔ける時には白い囚衣よりも、赤い腰巻き一つの方がふさわしいと思う。

## 磔の形

本来の公刑での磔は、女の場合は両脚は揃えて柱に縛りつけるようにきまっていたそうである。

この形はシンプルで、股間の露出性に欠けるが、実際には、最も美しい形だと思う。

両手を一杯に上げられ、胸部の囚衣を切り裂いてぶつくりととび出させられた乳房の周囲に荒縄がかかり、腰から足までキツチリと縛りつけられた女は、女のつつましさを、柔らかさ、悲しさを最も美しく表現していると思う。

この開脚での磔に限らないのだが、横木に縛りつける腕は、肩より手の方が低くなってしまうのは絶対にいけない。肩と手とが水平か、手の方が少し高くなるのが絶対に必要である。磔柱に足台などとりつけると、時と

して、肩の方が手より高くなって、まことにだらしない磔になってしまうことがある。

また、両手がピンと一杯に伸びていなければ、みっともない。

それには、手首、肘、肩と、少なくとも三ヶ所をきちんと縛らないといけない。

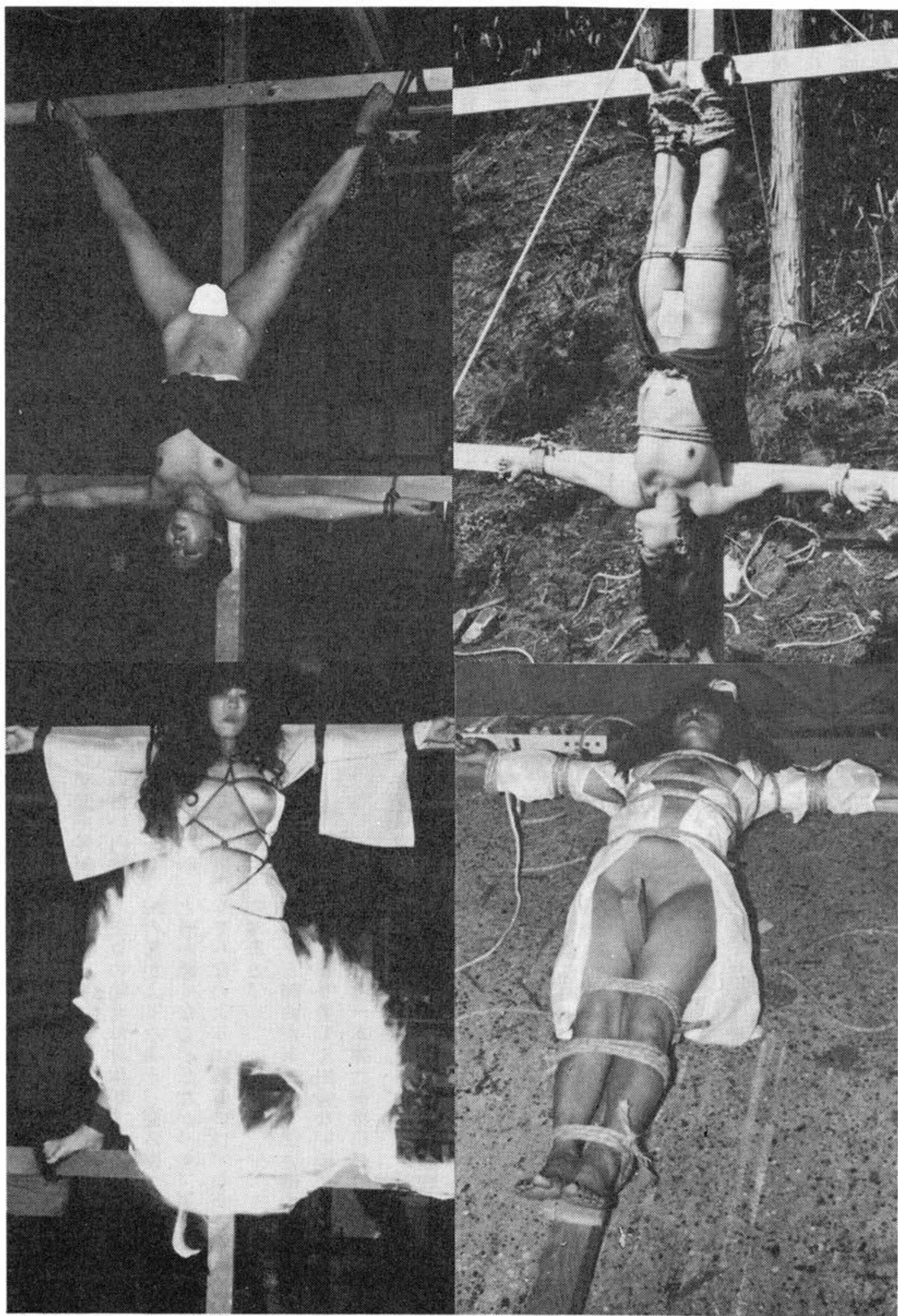
しかも、腕と横木とを一緒にぐるぐると三重以上に巻いた上で、それと直角に一筋縄をかけて引き締めた。これを専門家は割り縄というが、これがあるかないかで、緊縛感がまるで違ってしまう。

なかなかうるさいものだが、いい加減な縄がけで腕が動いてしまうようでは、折角の磔が台なしになってしまう。

胸の縄がけは、菱縄が好ましいが、これは必ず柱ごと縛らないと面白くない。女体にだけ縄をかけたのでは、いくらきつく縛っても、それは何等女体を抱束する働きをしていないので、しらじらしい感じになるからである。出来れば囚衣を切り裂いて乳房を露出させ、囚衣を切り縄で束ねると、本物の磔めいてムードがたかまる。

脚は、大腿、膝の上下、足首と四ヶ所位縛りつけたい。足台がなければこの位きつく縛らなければ、ずり落ちるが、少しずり落ちると、縄目が一層きびしく引き締って美しくな







る。

それが足台の上にチョコンと乗っかっていては、いかにも女が楽をしているようだし、縄目はゆるむし、全く緊張感がなくなる。

足台は女上位の象徴で、我々大日本磔党の敵であって、断固紛砕すべきものである。

開股磔なんてものは本来はなかったのだから、女を辱かしめるという意味では、閉脚のものよりはるかに激しいものである。

たとえ囚衣や腰巻をつけていたとしても、

大きく開股してしまえば、どうしようもない。

もちろんパンティをはいた磔などは、大日本磔党の目録にはあり得る筈がない。

閉脚した場合、その角度が広いほど良いようにも思えるがおのずから限度があつて、アクロバットのようにあまり広げすぎると、バランスが悪くなり、良い形とは云えない。私としてはおおよそ両脚のなす角が九十度位がよいように思う。あまり狭くては迫力がない。

ここで大切なことは、両足が横木の上に載っているのは面白くない。その理由は、前の閉脚の場合の足台と全く同じである。

それではどうしたら良いかと云えば、横木の前面で、足と横木と一緒に縛ればよい。すなわち、足の裏にかかった縄をふんばつ

て体重を支えることになる。こうすると横木の上に載っているよりずり下る上、少々不安定で、足が緊張する。その上、つま先が外側に九十度広げられるので、一層女の白い内股が外側に向けられることになる。

開股磔に際しては、必ず女の足は横木の前面に縛るべし、というのが、大日本磔党の綱領である。

## 逆さ磔

頭を下にして、両手を広げた逆さ磔なんてものが、どれだけ実用的な意味があるだろうか。おそらく、これは何んとか残酷そうだと考えた頭だけの産物で、歴史上実際に行われたことはないのではなからうか。

あるいはあわて者の刑史が間違えて上下逆に柱を立ててしまったなどということでもあったかも知れない。

この場合も、女囚の両脚を揃えて縛る場合と開股させて縛る場合がある。

両脚を揃えて縛る場合は、当然上部の横木は不用だから、そんなものがあつては不自然である。

逆さ磔で、両脚を揃えた場合は、どうしても女囚の身体がずり下りがちで、そのために

両手が、肩より高い位置になってしまふ。これは大変美しさを損うもので、正立の場合と同様に両手は、肩より低くなくてはまずい。正立の場合は身体がずり下ることによって腕の形がよくなるが、逆さ磔では、ずり下ると形が悪くなる。したがって、逆さ磔ではずり下らないように縛るのは、なかなか大変なのである。

色々理由があつて、逆さ磔の閉脚のものは、あまり美しく出来ないので止めた方がよい。むしろ一本棒に後手に縛りつけて、逆さに立てた方が美しい。

そんなわけで「逆さ磔は開股に限る」というのが、これまた大日本磔党の綱領の一つである。

そこで開股逆さ磔の話になるが、この場合は、前にも書いたように赤い腰巻き一つが似合うようである。

そして女囚も、いささか鉄火肌というか、あねご風のしたたかな感じの女がよい。刺青なんかのある女も似合うかも知れない。

縛り方は、開股した女の足首に体重がかかるようにするとずり下ることが少ないし、見た目にも良い上、逆さ磔にかけられた女囚自身も苦痛が少なそうである。



# 奇ク「友の家」紹介

本誌愛読者のご好意により奇ク「友の家」が誕生しました。場所は、国電・総武線「本八幡」駅よ

り、クルマで一〇分。高塚交差点近くです。

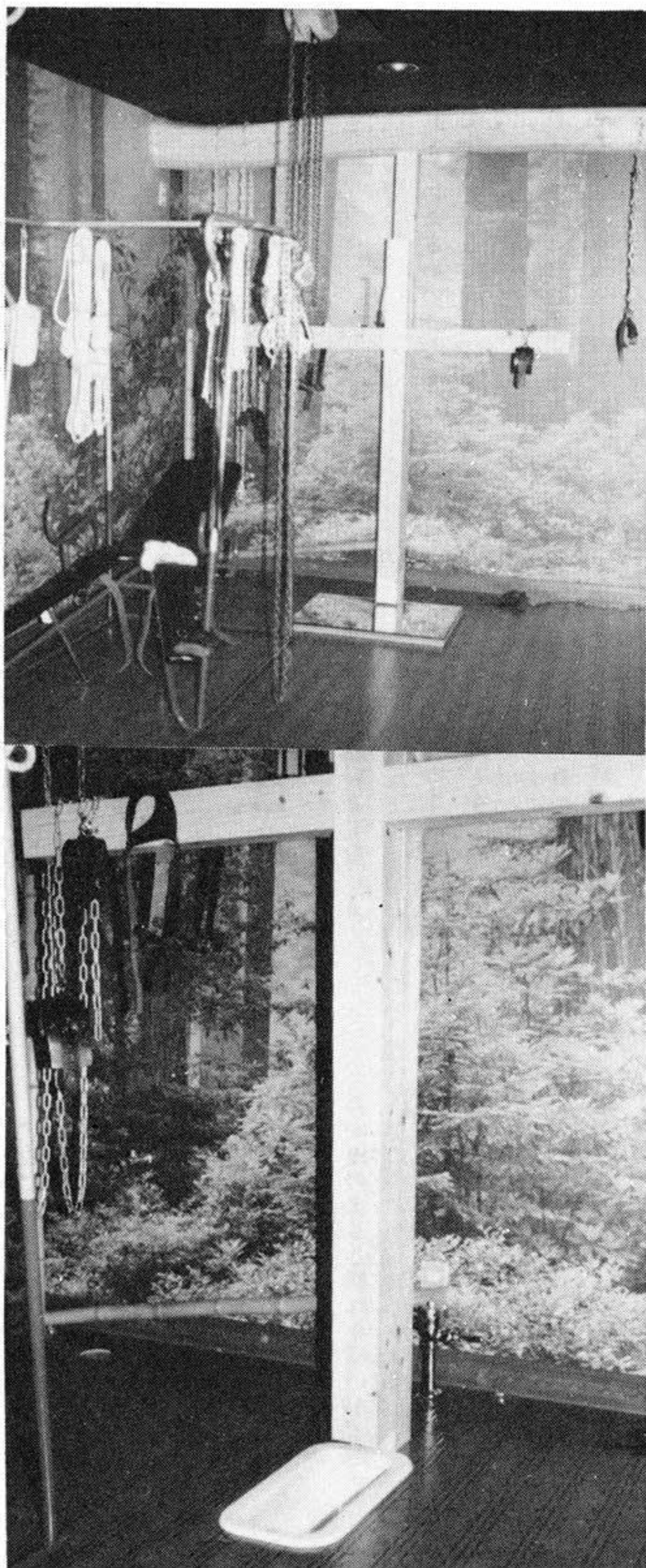
提供者のT氏が、ご自分の専用

プレイ室として作られたもので、プレイに必要なものはすべて揃っており、完全防音の一軒家なので、存分にプレイが楽しめます。

費用は、使用料として五千円、宿泊は五千円増となります。

使用希望者は、編集部までお問い合わせください。

※一般客は使用できません。





# 切腹一〇一首

— 加寿子幻想 —

巴鳥訓右

乙女ごろの悩みせつなし

やはだに血のにじむまで腹を切る  
真似のはげしさ 悩みせつなし

腹切るに切れぬ竹光もどかしさ  
強くはげしく引きてにじむ血

わが腹のまこと切れなばいかばかり  
こころよからむ想ひは深し

悩ましき乙女ごろのせつなさに  
腹切らましを死ぬ気なけれど

思ひきり深く切らねばふくよかな  
腹は切るとも生命たもたむ

われとわが腹切るとても浅く切り  
手あて済まさば人には知れじ

腹を切る痛み苦しみとはねど  
残る傷あと如何に云ひ訳く

いくそたびしんじつ腹を切らましを  
想ひを抑ふまだ娘ゆゑ

切腹なさむ想ひいとしむ

年ごとに想ひはつのり切腹の  
秘願はげしき娘となりぬ

悩ましく想ひつのれるせつなさに  
腹切る手ぶり真似てみるなり

竹光を腹に突きあて引きまはす  
軽き痛みのこころよきかな

腹切りを真似て痛みのゆゑ知れず  
こころよきかなくなり返しみつ

息つめて引きまはすとき竹光も  
腹切る真似の痛みはげしき

人知れず腹切る真似をくり返し

ゆゑ知れず春のめざめのころほひに

心に生ひし腹切るねがひ

いつ知れずゆゑすら知れず切腹に  
こころたかぶる少女となりぬ

切腹のすがた雄雄しとあこがれて  
われとわが腹ながむひそかに

ふくよかにゆたかになりしわが腹の  
清し美し乙女ごころに

美しさ眼に立ちて来しわが腹を  
われと切らまし乙女ながらに

いくたびかあらはせし腹ながめつつ



嫁ぐ日のいつかある身と思はえ  
ばわれとわが腹傷は残せず

いつの日か嫁ぐこの身の臍ちかく  
ゆゑよし云へぬ傷は残せず

切腹の傷あとをもつ娘など  
めとらむ人は世にはあるまじ

悩みつつ娘ざかりのよろこびは  
夜ごと走らす腹の竹光

思ひきり力をこめて擬刀もて  
幾たびか突くわれとわが腹

悩みつつ乙女の月日重なりて  
今は娘のままに二十五

今ははや嫁ぐその日を想ふより  
腹切る悲願とげましものを

年つもり想ひもつり真刀を  
つひに当てがふわれとわが腹

肉みちてゆたけき腹をわが手もて  
まこと切りたし浅くはあれど

覚悟してまことの刃もてわが腹を  
浅く切らむと心きめたり

家びとに気づかれざらむわが想ひ  
心たのしくまつ腹切る日

悩ましき梅雨のはじめの夜は更けて  
独り留守居の刻はめぐりぬ

今宵こそかねての願ひそのままに  
腹切らむずる仕度ととのふ

湯に入りて洗ふ乳房や臍めぐり  
わけてつやもついとしうつくし

湯あがりの肌のかおりにわれながら  
ゆたけき裸身娘ざかりに

姿見にうつして見ればわが素肌  
若さにみちてしろくつややか

むせかへる六月の風かぐはしく  
なまめきて見ゆ腹あらはせば

つややかに張りもつ腹をわが手もて  
切らむよろこび胸とどろかす

もりあがる乳房おさへて胸しづむ  
腹切る想ひばし凝らして

双乳のふるへるまでに高まりし  
想ひは一途切腹に寄る

今ははや腹切り刀右手に執り  
臍脇下がり腹に差し当つ

思ふさま力をこめて突き立てし  
刃先の痛み夢みしごとし

巻きしめて残す刃先の三分ほど  
腹に刺さりぬ手ごたへ軽く

手もふるへ心もふるふよろこびに  
恐れげもなし腹浅く切る

しみひとつ見えぬしろさの続の肌  
まろきわが腹ここを切るべし

何ごとと定めと思ふわが腹を  
かき切るとてもつゆ悔いはなし

われとわが手に刃走らす力こめ  
右腹かけて引きまはすなり



肉はづむ娘ざかりの腹しろし  
刃たしかに切れ味を見す

切れてゆく腹の痛みは云ひ知れず  
しびれるごとく身にはひびかふ

臍ま下真一文字に七寸余  
みごと切りたし浅くはあれど

われとわが腹ひとすぢの傷あとを  
作れど今も悔ゆることなし

嫁がじと心に定め思ふまま  
腹かき切りぬ娘ながらに

今はただ思ひのままに  
われとわが腹かき切るをよろこびとする

かくなれば若きの消えぬ今の間に  
花のいのちを散らす覚悟ぞ

いつの日か悲願のままにわれとわが  
腹割き果てむ心さだまる

夢の世に三十路とならむ今ははや  
残る色香の短きを知る

かねてきく古来まことの切腹は  
腹十文字介錯もなし

たをやめの身には似合はぬ念願は  
古武士のごとき十文字腹

咲ききりし花のさかりは短くて  
白くつやもつ肌も峠よ

散るからは花も色香の失せぬ間ぞ  
素枯るるまでを待つははかなし

今生の思ひにわれと十文字  
腹切り割かむ覚悟さだまる

積年の願ひを果たす時はいま  
みごと仕とげむ十文字腹

うれしくもかなしくもあり念願の  
腹切る今日ぞいのち果つる日

いさぎよく双肌ぬげば肉みちて  
脂ののれる娘の裸身

張りみちて白く光れる乳房の  
ふくらみいとしゆたけし今は

ゆるやかな腹のまるみを撫でおろし  
統のやは肌われといとしむ

つややかに白く張りたる臍めぐり  
まろみはいとし美しわれにも

色消えて眼には立たねど傷あとの  
長く走れり臍の真したに

青じろく光る刃を右手に執り  
しばし見つむる切先の鋭さ

見るからに切れ味よげなこの刃  
わがやは腹をこころよく割け

臍したのここぞと思ふ脇坪に  
切先あてて呼吸をしづむ

今ここにおんな腹切るわれとわが  
刃に腹を切り割かむとす

左手もてしかと抑へし脇腹の  
張りにも強く肌ひかりおり

息つめて右手に身うちの力こめ  
刃を強く突きながら引く



ぶつとりと柔肌割けてわが刃  
わが腹深く肉をつらぬく

脇腹に透る刃先の鋭さに  
熱し激しもこの痛みはも

われ知らず眼とぢあたりわれとわが  
腹に刃の立つこの一瞬を

苦しさも痛みも何せむ切腹の  
ねがひをとぐる今のわが身に

雪白の肌のにじみて血の朱は  
熱き心の色をそのまま

左手も右手の刃にそへにつつ  
双手の力われと腹割く

きりきりとゆたかにまろき臍下を  
真一文字にわれはかき切る

今まさに切り割けてゆく臍下の  
まるみ見つめてわれは腹切る

おのが腹切り割けゆくを見きはめむ  
眼はなさじわれは腹切る

あまさにわれとわが腹ふかぶかと  
かき切りにけり真一文字に

こころよき切れ味みせてわれとわが  
腹割く刃握る手ふるふ

腹割けばかかる痛みも苦しきも  
覚悟せし身につゆ悔いはなし

臍ましたやうやくすぎて右脇へ  
あと一と息のところまで切る

くれなゐの糸を乱すに似て血汐  
真しろき腹をわれと染めゆく

思ふさまかき切りし腹見つむる間  
つのる痛みと苦しみに耐ふ

まだ足りぬ腹一文字は左より  
右の脇まで切るが定めぞ

覚悟して腹切るからはこれしきの  
痛み苦しみ耐へねばならぬ

いま一度力をこめて右脇へ  
きりきり引く刃呻きをこらふ

充分に右脇腹へ引きまほし  
みごとにわれの一文字腹

身をかめおさへし腹ゆ刃を抜くに  
しばしはとどむおのがはらわた

少し身をおこさばとげし切腹に  
はらわた出づるさまわれは見む

十文字に腹切る覚悟はらわたの  
あふるときは妨げられむ

腹を切るわが念願は十文字  
仕とぐるまでを耐へねばならぬ

とり直す刃臍窩に突き立てて  
いざわれ縦に切り下げむかな

切り下ぐる刃に力深くこめ  
身を起こしざま腹をせり出す

眼くるめく痛み苦しみああわれは  
腹十文字の願ひとげたり

さまざまに腹切るさまを真似つつも  
所詮は夢に終はる一と生か



## 十文字腹

三富浩生

この間も主婦割腹自殺と新聞に報道があつたが、読んでみると刺しただけのようである。

切腹が盛んになりはじめた鎌倉時代、文芸的で実録とは云えないとも云われている義経記に、佐藤忠信の腹の切りようが詳述されて

いる。源義経の臣、忠信は鎌倉勢に京の隠れ家を囲まれ、もとの義経館へ走って勇戦の末、雑兵の手にかかるより腹を切りたいと、寄手に「剛の者の腹切る手本をお見せしよう」と申入れ、寄手の見守る中で切腹した。その有様は、大刀で鎧の引合わせを切り、膝を立てて居丈高になり、取り直した刀を左脇下に刺貫き、右脇下まで一気に引廻した。そこで抜いた刀を鳩尾に突立て、臍の下まで切り下げた。これが正十文字の切腹と云える。

源義経が衣川で自害に際し忠信のやり方が賞められているときいて、「疵口の広いのがよいのであらう」と云い遺し、左の乳の下に突立てて背へ徹れとばかりに深くかき切り、

疵口を三方へかき破った、というから一文字のを上下へ切り上げ切り下げて、十文字にしたものであらう。

太平記にも詳述していないが「腹十文字に腹切り」という表現が少くない。室町時代の顯著な例として、管領細川政之の家督争いが合戦になった時の挿話がある。細川澄元との抗争に敗れた細川澄之は、側近の波波伯部伯耆守に「お腹召され候らえ」とすすめられたが、公卿出身として「腹切るようを知らぬ」と答えた。そこで伯耆守が、「お腰のものを抜き左の脇に刺し立て、右手の脇へ引廻し、返す刀にてお心もとに刺し立てて、袴の着ぎわへ押しおろし候」と教え、そのとおり澄之が正十文字の切腹をとげている。

鍵十文字の切腹は江戸時代中期ごろまでの文献には見当たらないようである。思うにまず一文字に割腹したのち、抜きとった刃をあら



森田敬三・画

ためて鳩尾に刺して切り下げる方法は、氣力体力を感じたあとゆえ、失敗したときを思つて、比較的十文字に近く、しかも刃をぬきとる動作を省けるので、この方法が用いられたのであらう。

明治元年堺事件に際し切腹した土佐藩士、大石甚吉は、腹なでおろし右手の短刀を左の脇に突立て左手で柄をおして切り下げ、刃を転じ左手を添えて引廻し、右脇腹でまた刀の峰に左手を加え切り上げたのである。

土佐勤王党の弾圧に連座切腹した弘瀬年定は、常に人に、まず刀先を浅く左腹の下部に突立て右の腹へ一文字に引廻し、刀先を斜に刎ねあげその勢いで一息に左乳下急処を刺したら、腸を破らず出血も少して死ねると語っていたが、その切腹に際しては、その言葉どおり見事な最期をとげたという。土佐でもこういう違いがあったのは興味ふかい。



# 鞘 和彦 凄絶画譜！



デッサン



## 禁男の宴 (一)

八重垣 薫

## 一、愛 撫

「妙子……」

かすれたような声がして、みづほの右手が妙子の背中を抱いた。

新宿、××劇場の三階、最上段……。

階下は相当に混んでいるのだが、この辺りには、そこゝにアベックの数组が居る程度で、殆んど人影もない。

さすがのワイド・スクリーンも普通の画面のように小さく見える。

「……………」

無言で妙子の肩が、ぐったりとみづほの胸のほうに引き寄せられた。

ホーッと大きく、彼女の体が波をうつ。眼

は、閉じられていた。彼女たちにとって、映画などは、どうでもよいのであった。

「ベーズ……」

再び、みづほがさゝやく。同時に、彼女の体がくると妙子のほうに向きなおって……、二人の唇が合わされた。柔い感触の唇は、たちまち唾液に濡れ、口紅が溶けて、甘く香ぐわしい液体がトロトロとみづほの口の中に流れ込んでいく。

ハア……、と熱い息を妙子の顔に吐きかけて、みづほは唇をはなした。

暗がり、じつと愛しい相手の顔を見る。

閉じられたまぶたが、ひくひくとふるえて、妙子は唇をなかば開いたままあえいでいた。

プップと音を立てて、妙子のブラウスの胸のホックが外れる。その下に真白いシュミ

ーズが浮きだすと、彼女はあわてて、みづほの首に両手をまわし、

「お姉さま、大丈夫かしら、こわい……」

「平気、平気……、私にまかせるの……」

ブリッと丸々した乳房が、シュミーズの横から躍り出た。

「平気だから、前を向いてらっしゃい」

みづほはそう云うと、上体を曲げて、激しく妙子の乳房に吸いついた。

「ウ、ウフン……」

妙子は、片手にみづほの背をかかえ、片手で椅子のヒジをしっかりと握りしめながら、それでもビリビリと肉体の深部に伝わる快感に耐え切れず、ズルズルと腰を浮かせた。時々、鋭い快感が走る度に、ピクッとけいれんするようにみづほを抱く腕に力が入る。



「フウ……ア、ウフ……ン、お、お姉さま、  
ウッ、フウ……」

かすかな断続的な吐息が、絶えず妙子の唇から洩れ、せまい椅子の中で上体がぐねぐねと悶える。その度にみづほは、彼女の乳房を追ってあえいだ。

「ハ、ハア……、い、いや、もう……、あ、あッ、ウウ……ッフウ……ハア……」

一生懸命に息をつめて、快感の呻きを洩らさないようにするのだが、少しづつ、その声が高くなってくるのをどうする事もできない。

みづほもさすがに気になって、ギュッと抱き締めた両方の腕で、力一杯、妙子をゆすぶるのだが、それも聞かばこそ……。

「ハッハッ……、お姉さま、も、もういや、妙子、我慢できないイ、ウウ……」

とうとう、つめていた息を吐き出すと、妙子は泣き声をあげてしまった。

「馬鹿ね、みづほでもないじゃないの」

みづほは、あわてて彼女の乳房から顔を上げると、周囲をうかがって、さりげなくスクリーンを見つめながら、

「ホック、はめるのよ、間違えないようにね」  
「……………」

妙子は、まだかすかに鼻をならしながら、やっとの思いで身づくろいすると、

そつと、みづほの手を握りしめるのだった。

それから、しばらくの間、二人はスクリーンに目をおとしていた。が、妙子は、先程の快感が体中に残っているようで、そわそわと落つかない。

「どうしたの、妙子。さっきからモジモジして……」

「だって、お姉さま。いや……」

「濡れちゃったの？」

「ウン、いじわる……」

「馬鹿ね、早くトイレに行ってらっしゃい。」

ちゃんと仕末しなけりゃ、毒よ」

みづほの声を、うわの空で聞いて、妙子は席を立った。

大急ぎでトイレに入り、冷たく濡れて内股にはりついているパンティを脱いで小さく丸め、その後をハンカチで拭いて、妙子はホッと吐息をついた。

なんという、それは不思議な感覚であろう。レスポス……女同志の愛戯、甘美な泥沼のような世界であった。妙子もみづほも、この

女だけの世界に住む、呪われた天使なのである。一度この世界に引きづり込まれたが最後、

彼女らは同じ年頃の娘たちには想像もつかないような、淫欲と耽美の限りを尽してとどま

るところを知らない。

「もう、いいの？」

トイレから出て、そつと隣りに腰を下した妙子に、みづほは声をかけた。

「ええ……」

「パンティ、脱いできたんだろ？」

「……………」

「私のバッグに入れなさいよ、持って行つてあげるよ」

「でも……」

「いいのよ、早くこの中へ入れて……」

ツンと甘ずっぱい香りのする小さく丸めたパンティをハンドバッグの中に押し込むと、

みづほは立ち上った。

「出ましよう……」

「あら、映画見ないの？」

「つまらないわよ、それより……、私、妙子がほしいの」

「お姉さまったら……」

「いじめるわよ、今夜。よくって、妙子……」

外に出た二人は、何事もなかったように、駅の方に向って腕を組んで歩いた。

## 二、逸楽の夜

小田急線を下北沢で降りて、山の手の方に



五分ばかり行くと、こぎれいなアパートがある。みづほは、外国系商社に勤めながらこのアパートに住んでいた。

二十三号室という札の打ちつけてあるドアの鍵を開けると、内部はさすがに女の部屋らしく、キッチンと整頓されていて、ハトの掛時計がくるくると目を動かしながら、八時半をさしていた。

「泊って行っているんでしょ？」

「家へは、そう云ってきたけど……」

「そう、じゃ、ゆつくりでいいわ」

途中で買ってきたハムなどを切って、洋風のあつさりした食事を終えた。

「コーヒー、いれようか？」

「そうね、どっちでもいいんだけど……」

「疲れたときに飲むと、頭がハッキリするからネ」

モカをストレートで飲むと、先刻の妖しい情欲が、むらむらとよみ返ってきた。

「久しぶりね……」

どんよりとした眼に淫らな光をたぎらせてみづほが云った。

「そうよ……」

「着がえよう、妙子、手伝って……」

みづほは立上ると、スルスルとスカートをとり、上着を脱いだ。妙子が甲斐々々しく、

そして、さも幸福そうに、それを手伝う。身についたあらゆる布をとり除くと、薄桃色に均勢のとれた肉体が、

「どう？ 妙子……」

スッとポーズを作って立った。すらりと伸びた脚、その合わせ目にあるべき筈の柔毛は全部剃り落されて、わずかに黒い一本の縦の陰影となって息づいている。そして、細くびれた胴、平らな腹部、乳房は小さく引き締まってキュッと反りかえり、しなやかな腕の付け根の腋毛もきれいに仕末され、ちよつとけんのある美貌に、大胆なリーゼントがよく似合って……。それはまるでギリシャ時代の美少年を連想させるような中性的な美しさを発散させていた。

みづほの異常な美しさに、妙子はうっとり魅せられていた。

「素晴らしいわ、お姉さま……」

「さ、早く、アレを取って頂戴」

「ハイ」

大急ぎで妙子を持つてきたものは、薄いナイロン地のパンティとブラジャーである。ストリップパーのはくバタフライのように切れ上った両股がピッタリと肉に食い入るように身について、まるで肌の一部になったよう。更に、ブラジャーをキリキリッと胸に巻くと、

押しつぶされた乳房がむきたての桃の実のような新鮮さではみだす。

「さア、妙子も早く……」

みづほの若鮎のような四肢が躍って、たちまち妙子のブラウスが脱がされ、シュミーズをとると、映画館でパンティを脱いだままの妙子は、早くも全裸であった。

思わず両腕であふれるような乳房をかかえる妙子の乱れた髪はゆらゆらと肩のあたりにまで波打って、ふつくりと肉づきのよい肩の丸みも露わに、豊かな腰の線、中央部の真黒な茂み、そして、見るからに柔かそうな大腿から足首にかけての素晴らしい曲線は、みづほとは全く対照的な、いわば、美しいフランス人形を裸にしたような青春の歓喜をいっぱいにたたえていた。

妙子の両肩に、ふわりと純白のケープが投げられた。それは、妙子の全身をすっぽりと包んでしまう程の大きさで、絹地の所々にレースのふち取りをつけたナイト・ガウン。妙子の長い髪がバサリとその上にたれかかってアンデルセンの童話にでも出てきそうな、夢幻的な美しさを室内に漂わせている。

「きれいよ、妙子」

みづほの言葉に、まつ毛の長い黒い瞳が、ニコリとほほえむ。



これが二人の逸楽の夜装なのであった。  
その時、妙子は、ふと気がついたように眼を丸くした。

「あら、お姉さま、そこが……」

「え？」

「無精なさってるの？」

みづほの秘部から腹のほうへかけて、よく見ると、うっすらと短い毛が生えかけているのだ。

「フフフ……、妙子、よく気がつくのね。私、本当は昨日までメンスだったの。妙子、剃ってくれる？」

「ええ、いいわ」

妙子は鏡台から剃刃をとると、ガウンをフワリとひるがえしてみづほの傍へ寄る。バイオレットか、甘い香水の香りが快い柔かな風となって室内に流れた。

### 三、夢 幻

「ここでいい？」

「いいわ、ここのほうが……。ベッドは暗いから」

そう云いながら、みづほは、ピッタリと肌にはりついているナイロンのパンティを取る

を立ててなれば開くと、

「傷つけちゃいやよ、気をつけてネ」

「大丈夫、慣れています」

妙子もちよっとおどけて見せて、ガーゼを温湯にひたして、ピタピタとその部分を濡らし、女体の一番柔らかな部分に剃刃を当てた。

かすかな音をたてて、短い毛が剃り落されていく。そして、剃刃は下腹部から肉唇へ、掌で愛撫するようにそろそろと刃を当てていくと、その刺激で、みづほの肉体はピクピク

とふるえ、愛液が透明な水玉のように肉穴に湧き出すと、たちまちツツと流れ落ちそうになる。

「あらッ」

妙子は小声で叫ぶと、チュッと音を立ててその透明な液体を吸いとった。

「ハァ……」

思わず、みづほの胸が快感にゆれる。

「まだなの？ 妙子」

そうなると、快感の波は、もう止まることのない波のように、後から後から押し寄せてくるのだ。女性の性感は微妙だ。わずか剃刃

一本の刺激にあらゆる幻想が呼び起されて、妙子が、流れ出る愛液を吸いとりながら、や

つとの事で全部の毛を始末し終った時には、みづほは、もう激動の極限に近づきつつあ

た。

レスポスの女性にとっては、刃物とか火とか云うものが、常人の想像も及ばぬ効力をもつて性欲の昂進に役立つのだ。

「妙子、妙子……、は、早く、早く……。あ、妙子、来たわ、来たわ、素晴らしい……、ああ……、来たわッ」

みづほは、歯をきりきりと噛んで、妙子のあふれる黒髪の間の手をさしこみ、全身をふるわせながら激しいエクスタシーに酔うのだ。何をする必要もない。ただ抱きしめて

いるだけで、グッグッと快感が盛り上り、全身がふるえるのだ。

妙子も、無言でみづほの波うつ胸に頬をうづめ、とりすがっていた。男が気をやる時のような、あつけない、いわば爆発的なものではなく、じつと妙子の肉体を抱きしめていると、みづほの体内に、更に強い快感が湧き上り、全身がカァッと熱したかと思うと、やがて、また徐々に汐の引くようにおさまっていく……。

「ごめんね、妙子、苦しかった？」

腕の力を抜いて囁くみづほに、

「……………」

妙子は、夢中で首を振るばかり。彼女もまた身内にうづく不思議な快感に溶けきってい



るのだ。それを優しく肩から背へ、撫で上げ撫で下ろし、いたわってやるみづほ……。

でも、妙子の場合は、みづほのように全身を灼くような強い快感ではなく、ピリピリとけだるく四肢がしびれるような、波間に揺れる小舟に横たわっているような夢幻の恍惚感なのである。

みづほに抱き起こされ、ふっと我に返って眼を見合わせると、お互いにニコリ笑って唇を合わせた。再び、ヒシッと抱き合せて眼を閉じる。妙子は顔を仰向けて、みづほはその上に覆いかぶさるようにして……。

と、何故か、妙子の眼尻から、ツーツと涙が一筋、こぼれ落ちた。

「さ、おいで、ベッドへ行こうネ」

「……………」

こつくりと、妙子がうなづいて、手で乱れた髪を直している間に、みづほは、中央のカートテンを引いた。清潔な敷布の上に、ピンクの毛布が一枚置かれている。

「行きましょう、私の可愛い人」

みづほは、こうした愛欲の遊戯に耽けるとき、ちよつと氣取って妙子を呼ぶ。そして、妙子は、みづほを、いとしいあなた、と呼んだ。

#### 四、愛 欲

二人はもつれるようにして、ベッドの上に倒れた。妙子のナイト・ガウンが、風を含んでまるで大輪の白いバラのように美しい。前が割れているので、その間から可愛いらしい膝小僧がチラ、とのぞく。

「可愛い人、こちらをお向き……」

全裸といってもいい、みづほの肉体がうねって、ガウンの中に可愛い赤ン坊を包みこむように妙子の体を引き寄せる。

大きく波をうっている黒髪の真ん中に、白い顔が笑っていた。

「いとしいあなた……」

うっすらと汗ばんだ妙子の額に、みづほはそつと接吻を与えながら、静かにガウンを左右に開いた。そこに現われたのは、素晴らしい魅力秘めた二ツの双丘、そして、期待にかば開かれたふくよかな足、その中心にある、黒々とした恥毛。みづほの手は、その上を、サラサラとかすかな音をたててたわむれる。

妙子はじつと眼を閉じたまま、大きな息を吸って動かなかった。すべてを任せきって、桃源の彼方にさまよう少女の姿は、あまりにも美しい絵であった。燃えるような視線を、

妙子の額から胸へ、胸から秘部へ、そして、足へ注いでいたみづほは、突然、たまりかねたように、激情の中に身を投じた。

「ああ……………」

今までにない乱暴さで、妙子に接吻すると、それだけではまだ足りぬようにあらゆる部分を触れ合わせようと、胸から腰にかけてのしかかり、少女の口を吸いながら、頬ずりし、髪をかきむしり、腰を前後にすり合わせて、全身の情欲を妙子の体内に注ぎ入れようとする。それでも妙子はなすがままになっていた。眼を閉じ、両手をだらりとさせて、僅かに力の入っている部分といえば、時々、足の爪先が、ビクビクとふるえるだけ、みづほの狂乱にくらべて無感動と思われる静けさであった。

みづほはそれに構わず、唇を、妙子の唇から離すと、そのまま耳朶へ、首筋へ、そして乳首へ、接吻というより、舐めまわすといったほうが適當なくらい、執拗な愛撫を加えるのだった。

それでも、妙子は、声ひとつあげなかった。ただ、みづほの唇が、チュッと音を立てて乳首に吸いついたときだけ、ピクッと全身がふるえたのだが、再び、息をしていないのではないかと思われる程の冷静さ。先刻、映画



館の中で愛撫を受けたときに見せた媚態は、見られなかった。

しかし、妙子の平静さを装った肉体の内部には恐しい火が燃えているのだ。爆発寸前の火山のように、今にも焔を吹き上げようとする、動中に静があるのだ。が、それが遂に破れる時が来た。何という不可解な感動なのだろうか、男女の情交に於ては全く見られない奇妙な倒錯がそこにはあるのだ。ツツーッと再び、妙子の眼から涙が落ちた。

二筋、三筋……、みづほの激烈な愛撫を受けて、涙はとどまることを知らぬ泉のように後から後から流れ出して、純白の濡らした。やがて、クククッと妙子ののどが鳴ったかと思うと、たちまち、クッ、クッとむせぶように、彼女は両手で顔を覆った。

「いいの？ いいの？」

上づつたみづほの声に、

「ええ、え……」

という答えも声にならず、妙子はますます激しくすすり上げるのだった。

「いい子、もう泣かなくてもいいのよ。いとしい人、可愛い子……」

そう云いながら、再び頬を寄せるみづほの首筋に、妙子はいきなりしがみつくと、ウワッと我を忘れ、身をよじり、顔をでたらめ

に振りながら泣き声をあげた。まるで、赤ン坊が、火のつくように泣き出した時のように前後を忘れて泣きわめくのである。泣きながら、妙子の肉体は燃え上り、早くも快感の絶頂に近づいて行くかのようにであった。

オイオイという泣き声が、次第々々に呻き声になり、身悶えしていた体が硬直し、全身を弓なりにちぢめて、さすがのみづほが、支えきれない程の力で、彼女の肩から胸にしがみつく、

「来るわ、来る……わ、ウウ、あ、ああッ、くくうーッ」

瞬間的に、強いエクスタシーが訪れたようであった。ぐらぐらッと妙子の腕が抜け、ガククリとベッドの上に倒れると、ハッハッと嵐の様な息使いに、しばらくの間、口を開くこともできないでいる……（つづく）





# SMテレホン通信

毛利 敬



私の家の近くの駅から私鉄電車で三ツ目の駅の近くに、将棋道場を経営しているN氏は、五段の腕前で、将棋を指しに来るファンからN先生、N先生、と呼ばれて人気のある初老の中肉中背の紳士だが、五年程前に、奥さんを亡くしてから、めっきり頭に白いものが多くなり、一人り娘を近くに嫁に出し、毎朝その孝行娘が、道場やN先生の居室を掃除に来る。掃除が終る十時頃には時間を持て余した御隠居さんなど、二人、三人と集り、夜の九時過ぎまで、六百円の席料で将棋を指したり、世間話に興じているが、常連は一ヶ月四千円の割引料金で夜遅くまで居るのだが、今夜は十時を少し過ぎて居るので、N先生は一人でSM雑誌でも読みながら酒でも飲んで居ることであろう。

私は、風呂上りの妻を下着も付けさせず、首繩の替りに、横棒に、首が離れぬようにネクタイを締めると、乳首を指で、ちよつとはじいて、「よーし、出来上り」と云って立上り、机の上から電話器を両手で降し、妻の横に置いてダイヤルを廻した。

私「もしもし、今晚は、先生」

N「やあやあ毛利さん、今夜は吉村さんと中田君が十五分位前に帰ったところだね。今夜あたり、通信をくれるんじゃないかと、



たのしみに待って居たんだよ。土曜日は、良かったですよ。奥さんも少し酔っていたでしょう、今迄での最高でした」

私「そうでしたか」

N「たゞね、もう少し長く聞きたかった。登りつめて、もう三〇秒、いや、二〇秒かな、山頂のちよつと下で電話を切って……、とにかく残念でした。今夜はどんな様子ですか」

私「いやあー、土曜日は、あれでも一〇分間以上でしょう、きつめに縄をかけたので手の色が変わってしまいましたよ。それにね、最後の呻きだけは許してくれ、と家内が申しますので……」

N「そうですか、それで今夜は……」

私「今夜は、私の手作りの縦板と横棒があるんですが、今夜は横棒だけです」

N「ほう……」

私「一メートル半はあります。両腕を真横に開いて、左右二ヶ所づつ棒に付いているロープで縛ってあるんですが、首だけは赤いネクタイで締めてあります」

N「それで、胸の所は……」

私「麻縄で菱形が横に二ツ並んで乳房を締つけてありますよ」

N「脚は伸びたままで……」

私「いゝえ、横棒の両端に金物の輪が付いていましてね、膝の少し上から輪を通して、吊上げてあります」

N「股縄はなしですか」

私「ええ、可愛がるのに邪魔ですからね」

N「なるほど」

私「赤い豆電球を一ツだけつけてあるんです。照明のせいでしょうね、四十を過ぎたとは思えぬ肌ですよ」

N「半年位い前でしたか、一度だけ、お会いした事があるんですよ。どこかの駅のホームで。ばったり、毛利さんにお会いして、紹介して下さったので、色白な奥さんだなーと、憶えて居りますよ」

私「そうでしたかな、乳房はあまり大きくはないけど、ペチャでもないし、剃り落した下腹が、つるりつとして、可愛らしいんです」

N「そうでしょう……、ぜひ見せてほしいです。トリプルを願えば、幸せなんです」  
私「はいはい、そろそろとも、考えてますがねえ。N先生、六十を過ぎて大丈夫ですか、息子さんの方は」

N「まだまだ立派なものです。ぜひお願いしたいなあー」

電話器に電話マイクをつけて、カセット・

ラジオにつなげてあるので、それを聞いた妻が、動かぬ体をゆすって、  
妻「あなた、なんと云う事を……」

私「うるさい、だまりなさい」

右手の三本の指で右の乳首を、揉みながら引張ると、  
妻「いたい——、うむ——」と悶える。

N「うむ——、そろそろ良い声を聞かせて下さい」

私「まあ、少し待ちなさい。今夜は長くなりますから、先生の方からかけ直して下さい」  
N「はい」

私は、受話器を置くと、男根を型取ったバイブレーターにゴムを被せると、妻の股間へ左右に、ねじ込む様にしたが、湿りが不足で、思う様に入らないのでやめた。リーン、リーン、と、すぐ電話が鳴った。受話器を取ると、  
N「はい、もしもしNです、続きを、お願いしますよ」

私「はいはい、今ね、オモチャを入れようとしたんですが、入りません。あれが足りないんです」

N「そろそろ聞かせて下さい」

私「いや、今夜は、話して、ぬらさせて見せます。先生の一物を出しなさい」

N「私のですか……、——はい、出しました」



私「電話器の置いてある、棚の下、ボール箱に、チューブに入っている、ぬり薬があるでしょう」

N「はい、よく知っていますね」

私「N先生、あなた自身の先端と、そのチューブの口とを、キスさして下さい」

N「はい、ちよっと、待って下さい、受話器を置きますから……。——どうもお待せしました」

私「もしもし」

N「はい」

私「受話器を置くなで、先生の一物は、寝てますね」

N「いや半分起きてます」

私「だめですね。起きていれば、片手で出来ますよ。そして、チューブを、押して」

N「はい」

私「見えないと思って、だめですよ、云う通りにしなさい」

N「はい、やっています」

私「少量しか、薬を、入れないでしょう」

N「いゝえ、そうでもありません」

私「チューブの薬を置きなさい」

N「はい」

私「右手で××をにぎって、根元の方に、しこいてとめて……」

N「はい」

私「力を入れて、前にもどして」

N「はい」

私「穴に入った、薬が少し出て来ましたね」

N「ええ」

私「それで頭を、なぜ廻して」

N「えー」

私「息子の頭ですよ」

N「はいーうむ、感じます」

N「完全に起きてしまいましたよ。早く、奥さんを可愛がって」

私「まだ、だめです。N先生」

N「はい」

私「先生は、お酒を飲むと、おしゃべりになりますね」

N「そうでもない、と思いますが」

私「いや、そうです、酔っぱらっても人に云いませんか……」

N「もちろんです。云いません、うむ……、早く聞かせて下さい。良い声を」

私「まだです。自分の事は云わずに、私の事を人に云ったでしょう」

N「いゝえ……、わかりませんよ、人には」

私「みなさい、それに近い事を酔っぱらって」

N「いや、……、その、名前は云いません。私は、たのしい電話があると……」

私「おしゃべり先生……、もし、トリプル

レイでも、さして上げたなら、毛利さんの奥さんは、具合が、どうのと、得意になって云うにきまっていますよ」

N「いゝえ、絶対に、他言しません。もう良いでしょう、たのみます」

私「手を休めずにしごきなさい」

N「はい」

私「先生は、助平なだけです。SM雑誌を、何冊も買って読んでも、SでもMでもないようです」

N「はい、まあ……」

私「私の観察では、先生はMの素質が多いに有りますね」

N「そうですか——」

私「そうです。私が、仕込んであげます」

N「すいません、つまらない事をおっしゃるので、息子が、小さくなってしまうかもしれません。でも、芯の方で、薬のせい、もえてます。どのような仕込むのですか」

私「そうですね、先生の両手を後に、縛って家内の内股を舐めろ、と云ったら」

N「それはもう、二、三年も女性に接して居ませんので、喜んでやらしてもらいます。そうすれば、息子も立つし、久しぶりにセックスも、さして下さるんでしょう」



私「だめです。じっと我慢するのです」

N「それでは息子が可哀想ですよ——」

私「いゝや、聞分けの悪い息子は、お仕置をするのです」

N「はあ——」

私「先生の息子と同じ位いのローソクを、息子にテープで抱かせましょう……、ビンズメもよいでしょうね」

N「いや——、それはひどいですね」

私「まあ、家内も、先生も、時間をかけて少しずつ調教しなくては、いけませんね。今夜は、話は、この位いで……、さあて……、どう責めますか」

N「毛利さん、奥さんの、今夜の格恰では、王手飛車角取りが良いですよ」

私「なんです、それは」

N「いや、毎度、おやりになっていると思いますが、下穴が王で、向って左の乳房が飛車、右が角です。王の少し上の香も、つまむのです」

私「なるほど——」

私は受話器を置くと、オモチャをねじ込んで、膝で抜けないように押さえて、飛車を口にくわえて右手で、角を三本の指で、こりこりと、もみ出すと、妻の鼻息が荒くなり出した。

私「先生、これから家内の、口と耳のところに固定しますから」

と云うと荷造用のガムテープで、受話器を顔に固定して、オモチャのスイッチを入れた。

私は、ヘソの辺りを舌で、両手をのばして飛車角を……。妻は、電話の向うの先生に聞かすまいと、口をつぐんでいるが次第に声が洩れてくるのが、良くわかります。

私「もしもしと云へ、云うのだ」

こんどは豆を、親指の腹でこすりつける。

妻「うう……ん、いい……、いいます」

私「先生、聞いて下さいと云へ」

妻「うーあ——、セン……、セイ、あ——ん、

キイテ……、クダサーイ」

私「これから、良い泣き声を、出しますからよろしく、いっしょに、行きましょう……、と云へ」

妻「う……、あ……」

私「云わないな、こら——」

オモチャのバイブを半分引抜き、左右に廻しながら、ピストン……。

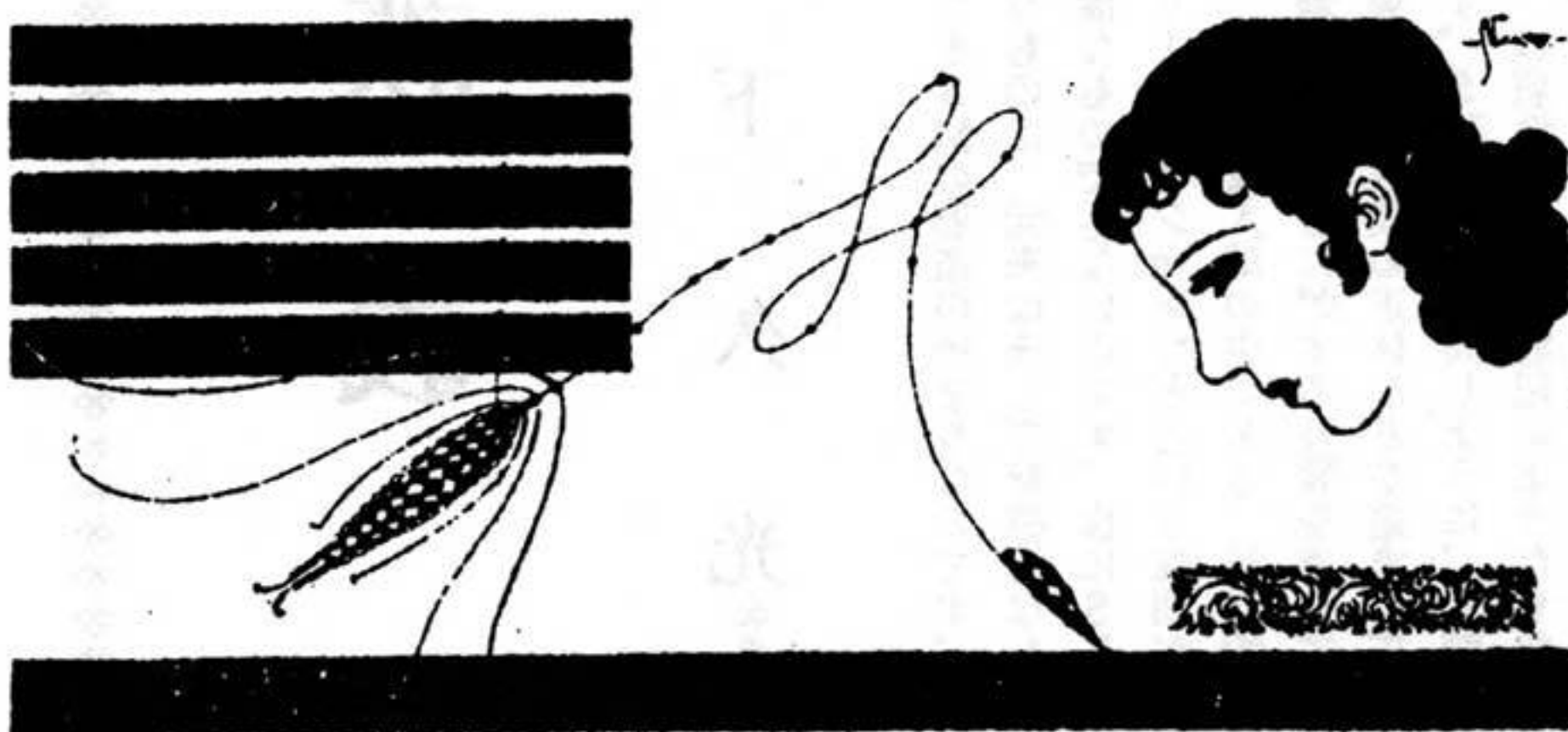
妻「あ……う……、これから……、う……、

良い……、声……、うむ……」

N「うむ……、私と一諸に……、行きましょう」

私「そうはいかんです」

と、私は手をとめて、今度はどうしてやるかと考えるのです。





特集

## 旧号 読書投稿作品

※文中の分譲品案内などは、  
当時のまま掲載。現在は扱  
っておりません。

最近の奇クを見るにつけても、色々なことが目につくので、あえて重い筆を再び取った訳です。それだけに前回より更に手きびしく、気分を害されるようなことを言うことになりそうなので、お断りしておきます。

先ず、私が『奇クはSMとしては邪道だ』と言ったら、どうでしょう。おそらく読者の方々から『そんなバカなことがあるものか』と反論が殺到するでしょう。しかし私に言わせれば、かならずしも誤っていないと思うのです。では、なぜだという質問に答えるためには「SMとは何か」と言うことを考えなければなりません。

私の意見

# M S 談 義

岩 下 久 光

そこで、一つの問題を考えてみましょう。

『SMとは世間一般の倫理から見て、本当に排斥されなければならないような背徳的で醜い不潔な感情なのではないでしょうか？』

それに対して編集者や読者は、どう答えるでしょうか。私の見るかぎりでは、どうも考へるともなしにそう考へているらしい。平たく言えば、SMとは要するに社会の必要悪だ。必要には違いないが、やはり悪だ。そういった潜在意識にとりつかれているといった感じを強く受けるのです。少くとも、そういった感情が心の一部にあることは否定できないのではないのでしょうか。私に言わせれば、

それこそSMの邪道の始まりなのです。SMというものは、元来は決して背徳的なものでも不潔なものでもないのです。世にSF、ミステリー、アクションなどという読物があります。これらは人間の中にある、科学的想像や推理、活劇などに対する性質を通して面白さ、美しさ、人間の正体などを追求しているのです。SMもそれと同じように、人間の加虐性、被虐性を通して前記のようなものを追求するものであれば、決して悪いものではないはずです。私の見る限りでは、SMの附属品がそれにとって代り、主客位置転倒してしまっているというのが、現在の状態に思える



のです。我々が普通、SMという直ぐ浮かぶのは縛り、次に拷問ではないでしょうか。そのため最近ではSM縛り、とか、SM拷問などといったイメージが完成されてはいないでしょうか。しかしSMというものは、決してそんなものではないのです。サドの、『悪徳の栄え』を見ても、あれは善女を踏みつけ、悪女をのさばらせるという中に、善良な者を虐げたがる人間の加虐性、逆に悪者に虐げられたがる被虐性を通して、表面は善人を装って悪を排撃しているように見せかけている人間たちに対する痛烈な風刺を行なっている訳けです。これこそサドの本領であり、加虐性を通して人間の美、楽しさ、主張を引きだすことであつたはずで、それが現在では、Sというのは、特に楽しさばかり追求して、ついに本末転倒し、元来S表現の一手段にすぎなかったはずの縛りが、逆にSの本体のごとく考えられ、更にセックスやヌードが加わりグロ化し、Sとは性的興奮を追求することだといわんばかりの風潮が起つてしまっているのです。

とは直接の関係はないのです。縛りも拷問も単なるSM表現の手段にすぎず、決してそれ自体がSMではないのです。しかし現在のSMは、その真髄を忘れて邪道に走っているとはいえないでしょうか。それでは？ と、おそらくこんな質問があるでしょう。「グロもなく、ヌードもなく、セックスも責めも縛りもないSM読物なんか、あり得るのだろうか？」私は、この問いに対して、はっきりと『あり得る』と答えることができます。では、どんなものかという、意外に思ふかもしれないが、最新の映画を例にとると、『暗くなるまで待つて』(Wait until dark)という映画ですが、多分にSMの真髄をついているといえるものです。大の男三人が、盲の美女を虐げるといふ想定自体うまいと思うのですが、何といつても見せ場は、殺し屋とヒロインの盲の美女の一对一の対決の場である。この殺し屋先生、盲の女一匹と見て『ガソリンを撒いて火をつけるぞ』とおどかし、柔らかな絹のマフラーで『しめるぞ！』と、首をくすぐってヒロインの恐怖に脅える表情を楽しげに見物するなど、Sまるだしで

ある。しかし、余りいい気になつていて、盲の女のために、ガソリンはかけられるわ、現像液をぶっかけられるわで、ナイフもマッチも取られてしまったのだから、殺し屋の無念さ加減は、大変なものである。そのため、再度、逆転した時の嬉しそうな顔。おもむろにナイフもマッチも取り上げてステッキをヒロインの首に引っかけ、階段から引っぱり降ろす。ヒロインの恐怖の表情。この場面は最高の見せ場だ。「人形をあげますから、このまま帰って……殺さないで……」という必死の言葉に対して、殺し屋先生、すっかり上機嫌で「どうぞ、おとり下さいと言え」と、いたぶる。ヒロインの方は胸のはりさける思いで上を向いて、見えない目を閉じ歯を喰いしばって、辛うじて小声で「おとり下さい……」と言う。ところが殺し屋先生、いい気になつて油断していたので再度逆転されてしまう。その無念の形相。重傷の身で「絶対、殺してやるんだ」とヒロインを追っかける。

この映画をみて、私は奇巧のSMは邪道だという考えを、ますます深くしたのです。たしかにこの映画には、縛りもヌードも出てこないし、オードリー・ヘッポーン(ヘップバーン)とは発言しない。HepburnのPは無声音で



ある)という女優自体、およそセックスやヌードとは正反対の存在で、およそ奇クなどとも無縁の女優のように考え勝ちですが、これを見ていると、どうもその逆のように思えてくる。SMとセックスやヌードは、直接の関係はないということの裏づけのような気がするのです。考えてみると、ヘボンンは、前に『ジャレード』の中で、ウォルター・マクーにピストルをつきつけられた時、ジェームス・コパーンに、電話ボックスに閉じこめられて、マッチの火を押しつけられた時、ジョージ・ケネディに義手を振りあげられた時などの顔は正に最高。西洋人だけに表現がややオーバーではあるが、あの方がよっぽど奇クよりもSMの真髓をついた美だと思うのです。彼女こそ奇クとは違った意味における最大のSM女優ではないでしょうか。これでもわかるように、奇クはSMの概念を誤って、セックスやヌードにおぼれ、ついにはグロテスクな妊婦まで登場させるに及んでは、もうその裏にあるべき真のSMを忘れてしまっているのではないかと言いたいのです。

要するに私の言いたいことの第一は、奇クは真のSMを忘れて、邪道ともいうべきヌードやセックス、妊婦などに狂っているのでは

ないかということです。最近の号を見ても、とうとう(正に)そこまで落ちたのかと、思うような話などが多すぎるのは、全く情けないことです。第二に、奇クは看板にいつわりがあると言ったら、どうでしょうか。そんなことはあるものかと、反論が続出するでしょう。しかし、これも私は誤っていないと思うのです。巻頭の断り書きには『風俗文献を研究する人を対象とする。読む雑誌である。刺激の強い物はさける』ということを書いていますが、これがそうでないことは、前記においても明らかですし、読めばわかる通り、奇クに載っている物語や記事が、刺激の強いものでないなどと言えますか。私は、特に読む雑誌であると述べている点を取り上げてみたいのです。前の投書で散々言ったように、奇クに載っているものは『花と蛇』にして、その他のものもすべて読物ではなくて、写真や画を文字に変えたというだけの誌上シヨイなのです。いくら経っても相変わらず見せ物から脱皮できず、純粋なSM文学はいつたいつにならなかったら出てくるのでしょうか。

私は前に、こんなものを載せて見てはと、『女ターザン物、姫剣士物』などを例に挙げましたが、その後とり上げられた様子があり

ませんでした。その理由は大体、見当がつくのです。

「そんな題材は奇クに載せられるような物語にならないではないか」おそらく、こういうことだと思うのです。もし、その通りだったら、私は声を大にして『看板に偽りあり』と言わないわけにはいきません。

ここで奇クに載せるような物語というと、私は『花と蛇』のように、最初から最後まで縛られたり拷問されたり連続、これでもかわせてもかかと、そんな場面ばかりが、つぎ合わせたように続くという話だと思うのです。しかしこれは、私が前に述べたように、写真を文字に変えたというだけの、全くの誌上ゲテモノ・シヨイにすぎません。これでは読む雑誌だの、文献の研究だの言った看板が、泣こうというものです。何度も言っているように、最初から最後まで、縛りや拷問の連続でなければSMでないなどと言うのは、全くの誤りです。縛りのないSM物語も作ろうと思えばできるのです。単なる表現の手段などよりもその裏にある美や精神の方が、どれほど大事か考えれば直ぐわかることです。『花と蛇』や今度掲載された『緋縮緬地獄』など、その骨組は悪人やゴロツキが美女を誘拐して



閉じこめ、縛って拷問して……ただそれだけの話の筋書きを、よくも長い間、飽きもせず繰り返しているものだ、思わずにはいられません。それに又、その内容たるや、全くひどいものです。『花と蛇』は、上流夫人と令嬢、グレン隊と貧しさからこの道に走ったという、説明つきのズベ公。この両者の対照は、美女と野獣という組み合わせを考えたのでしょうか、これが全くのカラ振り。だいたいの現在の日本のように、小市民や中産化の発達したところで、上下の角逐ということスローガンにしている政治家ならとも角、SMの題材として果して適当かどうか。金持の夫人や令嬢と聞いて我々の頭に浮かぶイメージは、本当に青白い美しいおしとやかな……であるかどうか。これが映画のコレクター（白水社から訳がでている）のようにイギリスなら通用します。事実、コレクターはフレディという下の下の階級の者が、自分ではどうしても手の出ない上の階級の娘を熱愛するということがテーマとして生きていた。どんなに金ができても所詮コンプレックスを抜け出せないフレディと、気位が高いと思えるほどのミラレダの、フレディに対する自尊心の強さということが、実にうまく生かされていた。

『花と蛇』は、この点ですでにつまづいていた。静子夫人や小夜子などは、人気スターや歌手にした方が、読む者にはピンときただろう。また、ズベ公たちは歌手やスターのなりそこないや、ライバルにでもした方が生きてきただろうと思う。SMの美や精神にうちぬかれていれば、縛りだの拷問は絶対に必要ではないのです。こう考えてみれば誌上ショウならとも角、前に述べた題材でいくらでも物語は書けるのです。例えば、『琴姫七変化』や『月姫峠』のような姫剣士の冒険物語など載せてみてはどうでしょうか。一つの話に一つ以上の割合いで縛りなどの受難場面を登場させ挿画（何も受難場面に限らない。ようするに話の進行を助けるもの）なども入れたら、立派に奇クに載せる物語が出来上ります。これなど書くのがむずかしければ『琴姫七変化』の松山容子のイメージや設定、話の筋など、盗作にならない程度に借りてきて、改造すればいいはず。一話ごとに受難、捕獲場面や、それに至るまでの筋道、悪人側の設定など考えて作るべきです、何よりも大事なものは、受難場面以外の所における姫剣士の男のM向きかと思われる潑刺とした活躍でしょう。悪人側としては、やくざや野盗団、

陰謀大名や悪徳役人、邪教や南蛮人、海賊など。『霧姫様』では妖怪など実によく考えて作ったのを登場させていたし、捕獲場面などよく使われたのが落し穴（紐を引っばっているのではなく、土間や地面に掘った穴であったのが奇妙に魅力があった）である。受難場面では、縛られた上、すのこで巻かれて海に投げ込まれたところや、琴姫が後手に縛られたままでチャンバラをやる場面など、奇クも少しは見習っては？ と思うようなのがあった。また、捕獲場面ばかりではなく、脱出場面なども考えて工夫をこらすことは勿論のこと、このような話など下手にリアリスチックぶった話にしないで、姫シリーズのように元来、子供向きとも思えるが、大人が見ても非常に楽しめるような年少、年長者を問わず面白くてそれでいてよく工夫をこらした物語にすることです。女ターザン物など、姫物語のようにシリーズにしてもよいけれど、これなどむしろ、創元社から出ている、火星シリーズ、金星シリーズのようなスペース・オペラの手法をとり入れるとよいでしょう。現在のアフリカなどは話の舞台としては適当でないで、宇宙の想像の世界の中で、女ターザンが出てくるものと創造すればよい訳で、



スペース・オペラのように色々の怪物や不思議な国などを登場させ（これなど工夫をこらすと面白い悪役になる）その中における女ターザンの勇壮な冒険ドラマなど、工夫をこらした受難場面などを随所に折り込み、姫物語のように受難場面以外の所における潑刺とした活躍と合わせて書くと、よい物ができるはずです。

その他、時代劇では『女忍者くの一』など余り話題にならないけど、わざともしっかり敵の手に捕えられ、拷問に屈したように見せかけて、ニセの情報を流すことを秘術としている忍者の話など参考にして、やはりシリーズ物にして一話一話、敵方の様子や拷問のやり方など特徴をいかせればよいのではないのでしょうか。漫画『真田剣流』の桔梗の話など、忍者の武者修業的な話にして冒険物語など作ったら面白いでしょう。他に女海賊などは、洋の東西を問わずよいと思うが、たとえば海賊の女首領がSで……なんて話はよいでしょう。映画によく出てくる八幡船のように大洋を舞台にした壮大な冒険物など、どうでしょうか。

現代物では何といってもサーカス物です。しかしサーカスというと時代錯誤的に考えら

れ勝ちなので、やはり想像の中の世界にしてSM的な曲芸や魔術などを売物にしているサーカスの楽屋話的なものでも作るというのではないか。けれども、こういったものは直ぐ悪い親方が少女たちをいじめるという筋書きになるが、それがいけないと思います。

今までの説明でも述べたように、SM物語というのは女の方が潑刺としている人物像でなければ面白くないという法則がある。奇クなど女性側が、ただ責められてヒイヒイいつているだけで、およそ生々としたところが無い。これが話をつまらなくして、女性像を交ぜない薄ぺらなものになっている原因で、著しく欠点として目立つ。こういうサーカス物に登場する少女たちは、強制されて芸をするのではなく、むしろそういった仕事を自分の天職と考えて芸に励むといったようなものにした方が面白いし、楽屋の泣き笑いや新しい出し物の研究や練習、内部の人間関係、外の人間との接触や交流などを描いたり、あるいは読者を客席に坐らせ、舞台裏はなしはどうなっているのか？ などと想像をめぐらせながらショーを見せるのもよいと思います。

この想定など、宝塚式にSM女優の養成学校などを創造してもよいし、娼家のようなM

女性を貸す店を創造して、そこにおける人間模様など描いたら面白いでしょう。これなど映画の『昼顔』のような設定を取り入れたらよい。もっと簡単にできるものとしては、江戸川乱歩の原作で最近、三島由紀夫の改作で上演されていた『黒とかげ』など、正に驚くべき傑作であるのに、全く問題にしないとは……。知っての通り、これは美人の女賊が宝石や美術品を盗みためて博物館を造り、更に飽き足らなくなって、次には美しい人間を誘拐してきてオリに入れ鑑賞したり、水槽に入れてバタバタやるのを眺めたり、さんざん楽しんでから殺してしまう。そして特別な方法で、生きているままそっくりの複製にして、博物館に陳列するという話でした。

これなど手本にもっともよい話だと思う。盗作にならない程度に真似をして話をつくればいい。原本の中には随分、奇ク的な会話もでてくる。たとえば、黒とかげが宝石商の令嬢、早苗に向かって「お嬢さん、あんただけは本当に可哀そうだと思うんだけどね。日本一の宝石商の娘に生まれたのが不運だったと諦めな。その上、あんたは美しすぎたんだ。あたしはね、宝石も大好きだけど、宝石なんかよりも、あんたのその美しい身体が欲しくな



ったのよ。決して諦めやしない……」

なんて言う場面がでてくる。奇クも、物語を作るとき、このようなものを考えてしかるべきです。ただいたずらに性的刺戟やヌードのショーと混同しないで、たとえば、『花と蛇』のように、社会からも下品で背德的として攻撃されるようなものとは、キッパリ訣別しなければならぬ時にきています。

では、キャラクターやSMの服装についてもう一度、書かせていただきます。本年の六月号に、鈴木氏の緊縛美雑感がありました。これなど全く、奇クの読者のSM美に対する最大公約数的な意見ではないでしょうか。私も私なりのキャラクターやスタイルの分類を前に述べましたが、もう一度、補充させていただきますと思います。

先ずキャラクターの面では、前述の話のジャンルに照して考えるなら、姫物語の最大のタイプは、何といても松山容子でしょう。私はSMで一番の美人というのは、松山容子と土田早苗だと思います。特に時代劇など、この二人のように顔が純日本的でキリリとしまつて、身体つきがピリツとした、どこなくボーイッシュな感じの方が、SMには似合うのです。女ターザンでは、ジャングル・ガ

ールが最高でしょう。要するに、SMのキャラクターというものは、余りセックスを感じさせるような肉感的なのよりも、すんなりした清楚なのか、きりりとしてしまってボーイッシュな感じの方がよいということです。

スタイルについては前にも書きましたが、大別すれば現代物、特殊物、時代物になると思ふのです。この中、時代物は高貴型、特殊型、野生型に更に分けられると思います。

先ず高貴型ですが、いわゆる姫物。典型は若衆侍のスタイルでしょう。この服装は映画テレビを通じて、奇妙なことに余りデブデブした感じでない美人であれば、どんな女優がやっても、よく似合うという法則がある。

次に特殊型、これは女忍者などがやる型で傑作はテレビ『風』の土田早苗が正に最高。その他に『風雲真田城』に出た加路昌美がある。『くの一』も一昔前の魅力ゼロの黒装束姿は影をひそめ、現在は黒タイツや網タイツをはくようになったらしい。(その頃、そんなものがあつたかなどとは野暮な話)

この黒タイツや網タイツ姿の女忍者の効用価値きわめて大で、殊に味のある服装であるが、面白いことにこのスタイルは、意外と似合う人と似合わない人との差が激しい欠点がある。

別に太っているわけでもなく中肉中背の女優でも、このスタイルになると妙にデブデブした感じになってしまう。土田早苗のよきに、よほど肉がしまつて、全身すんなりしていなければならぬ。腰のあたりがふくらんでいたりすると、もうおしまいということになる。たとえば加路昌美など、このスタイルで失敗しているわけで、似合うタイプの女優は限定されます。

また、この型には女やくざがある。これもやはり、重要なのは足。つまり太腿むき出しで脚胖というこのスタイルは、前記の『くの一』のタイツと同じで、きわめて重要。

六月号では鈴木氏が、二の腕、太腿むき出しのミニ・スタイルがいいと言っておられましたが、私ももちろん、このミニ・スタイルは時代物の重要な型であると思っています。しかし後述の土民、野盗型同様、ただむき出しというのは余りよくないと思うのです。つまり、タイツ、脚絆の類をはくことによって始めてこの型は、より一層、足のむき出しを表現し完成させるもので、もしただ、むきだしだけなら、何の変哲や表現のアクセントがなく、全裸などと交らないものになってしまう。それに『くの一』型は、どちらかとい



うと、はっきりと腕は手首まで袖のある方がよいのですし、野盗、土民型も手甲や腕ぶくろをつけた方が明らかに、いい場合が多いのです。それはともかく、この女やくざスタイルも、似合う似合わないの激しい差があるスタイルで、元来は女性のスタイルでないこともあって『くの一』同様、身体が引きしまつて、すんなりした人でないと、デブツと太った感じになり、見られたものではない。またこのスタイルでは、よほど顔が、キリツと引きしまり、かつボーイッシュでないといけない。このスタイルが似合うのは、松山容子のような、ごく限られた女優だけで、他の女優がやれば、目をそむけたくなるように思う。だから、お楽しみも相手のタイプを考えないと駄目である。しかし、もし似合ったら最高です。

次に土民、野盗型であるが、これは忍者の中にもこれに、属する者がある。前に書いた漫画『真田剣流』の桔梗などこの型で『くの一』には前述のようなタイツ姿の時代劇としては超近代的なものと、このように野性的なもの、はっきり二つにわけべきです。どっちにしても、一昔前の黒装束に比べると、はるかにSM的に美しい物です。その他に、

この型には、テレビの『真田幸村』の野川由美子がありますが、決定版は『隠し砦の三悪人』の上原美佐。正にこれは最高。さすがに巨匠の眼は高いと思ったものです。これらはいずれも服の下に表現のポイントがあり、すがミニ、または、超ミニスカート型か、上原美佐のようなショートパンツ型になっていく。どちらかというとショートパンツ型の方がしまっていて活動的な感じでいいのですが……。上は上原美佐など、腕むき出しなのがえあって引きたつけれど、前述のように何かつけた方が、いい場合もあり、一長一短。

なんとも言いますが、美の表現のポイントは脚絆であることは共通のところ、これがこの型の重要点。この型は、テレビで放送された映画『八幡船』や、裾の長い物としては『琴姫七変化』の中の大原女などあるのですが、この型は、よほど身体の肉づきがしまっていて顔もキリリとしていないと、妙にデブデブした感じになってしまう。テレビの『赤影』はじめ多くのものが余りスタイルほどこさない。鈴木氏が、いいと言っておられた『戦国無宿』も私から見ると、やはり太ってデブデブした感じになってしまっていた。それから重要なのは、このスタイルである。野

性的だから、顔は余り上品でなくていいと思うと大ちがい。特にこのスタイルであればあるほど、意外なことに高貴さがないと似合わない。その意味からいくと、高貴型よりよほど高貴さを強調しているといえる。もともと見る方も、高貴な姫君などが事情によってこういうスタイルをしているという想定だと思いうから、よけいおもしろく見られるので、非常に重要。ふつうの女という想定では、つまりません。

時代物は大体、以上ですが、共通していえることは、時代型の場合、身体の肉づきがしまっていないといけない。現在の悪い例のように、栄養ばかりよくてブヨブヨしたようなのはダメということ。また、時代劇の場合、美しい娘というと、十代の年頃なので、娘というより少女という感じの人でないとダメである。それから話の中で、ある程度、服の着がえなど行なった方がいい。話の初めから終りまで、まるっきり同じというのは『隠し砦の三悪人』のような例はあるし、それも一つの味だけれど、技術的にうまくつくるのが難しい。挿画など入れるとしても、こういうことをよく考えた方がいい。

話のタネとしては『隠し砦の三悪人』のよ



うに、敗軍の姫が軍用金とともに、追いつ追われつをやりながら逃げる話など、前述の物語り同様にいいし、ギャグとしては最近の物として、やはり松山容子か、『海の次郎丸』の雪姫の役でやっていたように、追手に人質を押さえられて一人で名乗り出るというよりも、突き出されて柱に縛りつけられる。しかし、これは実は計画で、突き出した者が救出をはかるといふ手法は、一見の価値があり、いずれも人物像は、余り年増やポリウムやセックス肥えを感じさせるものであってはいけません。

奇クの文中の話は、どれも美や精神的な味わいより、性的刺激を追っているようで、人物のイメージがどれも肥大的で不潔になってしまします。

次に特殊型。これは六月号で鈴木氏も言っておられた、土人娘だの支那服の女など、いわゆる外国の服を着た女などが入りますが決定版は『女ターザン』で、しかしこれも、ポロの服や動物の毛皮ならいいかという大違い。前にも言ったことのあるように『ジャングルの女王』と、『ジャングル・ガール』を比べてもわかるように、女ターザンならばこそ、ちゃんとした服を着せないといけない。

この『ジャングル・ガール』の服は最高である。布はビロードを思わせる感じの、なめらかなもので、やや厚手の、すそがミニ・スカート状になっているのに、ピラピラした感じがしないものがある。大きなバックルのついたベルトをしめ、頭にはヘアバンド、腕は手首まで袖があるもの。この袖が、重要である。もし袖がなく腕が剥き出しだったら、多くの『ターザン』に出てくるジュエーンのように、何の変哲もない、つまらないものになってしまう。腕が完全に包まれるのが、かえって引き立った。下は短長靴（皮の半長靴を、もう少し短くした感じで、短靴より少し長いもの）が、よく引き立たせていた。時代物でもそうで、足の完全露出は、およそ何の変哲もなく、つまらない。脚絆、タイツ、こんな靴などはいっていないと感じが出ない。『ジャングル・ガール』の場合、捕まって縛られる前が生々していて、木から木に飛び回ったり、崖から水に飛び込んだり、太股で人の首をしめたり、といったのが縛られた場面との対比によって一層引き立っていた。この型には前述のスペースオペラなどがあるが、顔なども、やはり感じのいい女性でないとダメである。ここでもセックス過剰型は嫌われると

いう法則がある。やはりセックスとSMは直接の関係はないのだから、余りセックス的な女性に適さず、可愛い人や品のある人がよい訳です。また『女ターザン』など、捕まる直前までさっそうと活躍しているのではないと、おもしろくないということも知ってないといけません。

現代型。これは前にも言ったことのあるように、サーカスや魔術などの種々の曲芸服。パレー、カンカン踊りやテニス、アイス・スケートの服などがあります。これらは、もう説明の要はないと思います。最後に、現代の服の場合、スカートはミニかロングかを説明すると、結果は要するに一長一短なのです。ロングは上品で静物的な感じなので、余り動きの少ない、きちんとした姿勢で縛られた場合などに適し、ミニは縛られてころがされ、裾が乱れてめくり上がっている、という場合などに、適しているのです。それを考えないで、ただミニがいいなどとは低俗な話。

次に縛り方、責め、捕獲などについて総括的に述べたいと思います。猿ぐつわについては、六月号で鈴木氏が述べておられるのにも私も同感です。私は口のみを覆う型の方が好きです。縛りのロープは、太くも細くもなく、



中ぐらいのものがよい。『隠し砦の三悪人』

は縄が細くてよくなかった。テレビなども一般に縛る時の縄が細いものが多い。色は余り白いの、よくないという、これも法則がある。縛り方については私は鈴木氏とちがって柱や椅子に縛りつけられたのが、静物的で一つの型としてよいと思うのです。しかし何といても縛り方は、余り凝らないで普通に縛るとか、あるいは徹底的に嚴重に縛るとか、どちらかにした方がいいと思います。また、

ヤセ犬の遠吠え

## 疑問

私は、新参読者でヤジウマの名に恥じず、本当の意味の「S・M」がどういうものか知らないが、なほばなしい直接的感覚を伴うプレイのみを追うことが、S・Mのすべてではなからうことぐらいはわかる。大きな口はたたけないが、直接にセックス感覚のみを求めるから、悪書よばわりされるのではなからうかとも思う。

なるほどキレイな女性のキレイなヌードが縛られている姿は私にとっても魅力はある。出来得れば、デイト相手に要求してみたい気もする。しかし本来、拘束を嫌うのが人間の

拘束具や拘束衣なども、よく考えて使うことが大切です。鉄仮面や鉄の長靴なども、使い方によってはよいものになるのです。時代劇などにも、拘束具を使ったらいいと思う。責めについては、前に述べたように、むしろ捕わるまでの、追いつ追われつのスリルや、捕えた喜び、捕まった無念さ、脱出までの苦悶や連行の状況、処分をきめるスリルなど、そのようなものに、重点をおいた方がいいのです。奇くは責めという直ぐ全裸、鞭打ち、

## 系振昇

否、生物全体の本能であろうと思うから、そんなことはもってのほか、と眼に角を立てる人が大多数であろうこともよくわかる。その裏の奥底から湧き上る複雑な心理が快感に結びつくのだらうと、私は、理解出来るつもりだが、理解出来ない、否、出来るのだが無理に否定(?)している人たちも、大多数の中にはまぎれ込んでいるのだらうと推測している。きっと、ナマナましいセックス直結を感じ、今尚、セックスを恥ずべきことと考えていられるか、もしくは、あるワクの中で、ある作法通りでのみ許されるべきものと、独り

浣腸、などに持っていきますが、これらは皆およそ嫌悪感や、不潔感をもよおすばかりです。どうか徒らに性的刺激ばかり追わないで真のSMを目ざして貰いたいと思います。

最後に一言。現在の奇くはSMの正道を外れているので、一刻も早く体質改善して、新しい研究や知識の吸収を積極的に行って、真のSM的美的感覚を養って下さい。

カット写真「三好サーカスナッツ」

阿部能丸・提供

ぎめしている人達だろうと、思っているのだが、私の誤推だろうか。

それはそれで、今、書きたいことは、社会一般のことがらの中に、私の「受感性」をくすぐられる事が多いということだ。私だけの感覚かも知れないが、どうも直結でないものは、リクツはともかく、本誌ではS・Mとはいわれないらしいこと疑問を持つ。

例を挙げよう。特殊な勉強好き以外、大ていの子供は学校は苦手が普通のようなだ。親の涙を吞んで(?)の将来への布石が重石となつて、小さな胸を痛めての悲劇も少なくないのも事実であろう。私の近所のママは、今年二年生の子供を、バスと電車で約一時間近くかかる学校へ通わせている。苦心の越境入学らしい。頭の出来は知らないが、下校後も方



方の塾に行くそうだと。体は細く顔色も悪いところをみると「秀才」なのだろう。加えてボーズスカウトとかで、日曜毎に制服姿も勇ましく(?)出て行く。私の受感、その子を見送るママの、理智的な眼鏡を光らせて「シヤンとして行きなさい!」との声によって呼び起こされた。

もう一つ、今、テレビ放映中の漫画で好評の「巨人の星」というのがある。野球の鬼のような父親に、自分が果せなかった夢を引継がされた少年の、シゴキ抜かれる物語りである。わが仔を谷につき突き落す獅子を例にとつての筋運びで、大人が見ても面白いのだが、父親の身代りにされて鍛えられる少年の苦闘は過酷である。大成するための厳しさを押し出しているのはわかるが、その目的の為に過酷なシゴキも残酷ではないのだといっているようにも受けとれる。これに関して私の受感の働いたのは、これが婦連の推せん番組だという報道が目についた時であった。

私の勤務先での恋愛ゴッコ(?)も少ない。大胆な行動の数々を、噂話に聞くのは興味がある。私の課付のタイピストが、可愛い眸をキラキラ光らせて残業を嫌っていた頃はそうでもなかったが、突然に休んだり、打ちしおれてミスを重ねるようになったのを見て、俄然、私の受感が刺戟された。

私も一下級サラリーマンであるが、会社に

限らず、雇傭関係や仕事全般にもいえる。

仕事だから仕方がない。仕事だから自分をそれに合わせる。仕事だから自分を一つの歯車にする……という事に疑問を持ったことのない人は少ないと思うが、こういうことは、すべて社会のルールとして普通のこと、否、義務であるとされている。またそれが必要だとはわかるが、この大目的のために派生する影響のもとに、個人々々が受ける束縛やら忍従は、「生活」という強力な餌と罰を背景に、おおいにさびさびしている。これをS・Mに結びつけたら叱られるかも知れないが、私としてはどうしても受感が働く時が多い。

としたら、見聞するものすべてがそうであるから、何も事改めて奇クを読んだり、こんなクダナイことを書くこともないというような気にもなるが、三度の飯を食っていてもやはり、時にはオヤツが欲しくなるのも人間なればこそと理由づけしているが、正直いって奇クに夢中にはなれないのだ。これは何も私だけのことではないかも知れない。オヤツとして読んでいる人が多いのでは(?)とも思うが、私が軽症というばかりでなく、受感を通り越して、あてがいの感と共に、余りお手軽なセックス追求が、感じられるからではないかとも思う。どうもうまく表現出来ないが、ビフテキはナイフとフォークで、握り寿司は指でつまんで、というわけで、ハシを使

いたい客にも、強引にその作法(?)通り実行させる店の感がないではない。とくに小説類の場合にそう思う。

物事すべて、批判や論評することは易く、創り出す困難さを知らない如くであるのが普通のようなものである。私の書いていることも同然であろうが、S・Mの定義(?)なり、行為(?)なりというものは、それぞれの自由な感覚によるのが、本当ではなからうかと思うだけに、感じを「与えられる」のではなく、「感じさせられる」方向のものを望みたいのである。

といって、ヌード写真を一枚眼前に突きつけられ、どう感じようとおまえの勝手。何か着せようが、そのまま縛ろうが、好きなように想像せよ。といわれればなんともお手上げにならざるを得ない。

莫然とした望みを並べてもしようがない。ここで一言お訊きしたい。子供にせがまれて困る母親。もっと収入をと切実な内職に精出す主婦。その主婦から泣きつかれて尻を叩かれる亭主……等々の普遍的なことがら。直接的な感覚との繋りはなさそうだけれども私の受感性は刺戟されるのだが、この感覚が奇ク誌上のそれとは異質なものであることはわかるが、これらは果してS・M的な状況とはいえないのだろうか。私だけの感覚なのか。お教え戴きたいものだ。



# トイレット談義

川崎進一



あるようでないもの——なんていうと、下手なクイズめくが、銀座八丁を彼女でも連れて散策してみ給え。

「あら、おトイレしたくなかったわ」

てなことになったら、さしずめ喫茶店で、二人合わせて二百円也のコーヒーでも飲まない限り、一寸やそとでは公衆トイレにお目にかかる事は出来ない相談だ。東京都の調べによれば、銀座周辺には十一カ所の公衆トイレしかない。而もそれは、橋のたもととか、ビルの谷間の一寸人目につかない小公園の隅

とか、銀座、三原橋、数奇屋橋界限からは程遠い辺りだからである。

そこで利用されるのが喫茶店、アベックのささやきもさることながら、喫茶人口の驚く程多いのも、トイレ利用の目的が可成りのウエイトを占めるのではなからうか。

喫茶店のトイレの楽しみは、本誌においても好箇の題材となつて、多くの方々の筆にとりあげられている。

昨年、一昨年と続いた東京断水残酷物語の時には、美女の出て来た直後のトイレめがけ

て、数多くの男性諸氏が、先を争って後に続いたものだった。かく申す小生もその一人、男性の入るのをチツと舌打ちしながら、トイレ真近の席にわざわざ陣取って美女到来を待ち受けたのも再三ではなかった筈。

美女の出た後の女性用トイレのキン隠しの中には、必ずといってよい程、使用してないトイレットペーパーが、そつと覆うように置いてあったものだ。その端をつまんでそつと剥いだ所に、しつとりと濡れて丸められたチリ紙と、薄黄色の美酒を発見し、その香にむせた人も少くなかったと思う。

小河内貯水池も六年ぶりで満水となった今日此頃では、断水の楽しみもなくなったが、美女の出てくる直前のトイレも楽しみだ。

「あ、失礼」

とか何とか言いながら、洗面台の前で、前こごみになりながら、肉付きのよい丸い大きなお尻をこちらに向けて、靴下など直している女性の後を通るのも一興。しかし最近の女性には本当に強くなった。会釈や羞じらいはものかは、グツと睨まれるがオチとは。

喫茶店で二百円が惜しいとおっしゃる方はデパートが便利である。といつても夕方六時で、「ハイ、それまでよ」がチト不便ではあ



るが。デパートのトイレは男女入口が判然と  
区別されているのが最大の欠点である。これ  
はビルのトイレでも言えることではあるが、  
ビルの場合は、入口こそ違え、アクリルの半  
透明の板か何かで、背中合わせになっている  
場合が少くない。こちら男性側に蹲んだまま  
仕切りの向うなる女性側の物音に耳を傾ける  
のも楽しい。

コックを引いて水を流す音にまぎれて、お  
小水の音を消そうという淑やかな女性もあれ  
ば、滝の如き快音を響かせるたのもしき女丈  
夫。あまりトイレでは独り言はしないものな  
のだが、便秘で凝固した宿便を押し出そうと  
するのだろうか、ひそやかな

「ウーン、ウーン」

という呻きと共に、ピシャともポトとも表  
現出来ぬ落下音、そして、ほのかに漂ってく  
る放香、やがて小水の音がして、ガサゴソの  
一瞬があつてジャーッとばかり水洗されて一  
巻の終り。すかさずこちらも廊下へとび出し  
て行って、只今すんだばかりの美女のツンと  
すました顔を、出合い頭に見る楽しみも又一  
入である。

こうしたオフィスのトイレで聞く美女達の  
会話も楽しい。一つのトイレに二人で入って

いるのにはまだお目にかかった、いやお耳に  
入ったことはないが、——いやかえって、男  
女カップルで入るものとも聞くが——結構、  
洗面台の鏡の前でおしゃべりにうつつを抜か  
しているものだ。

上役、同僚の噂悪口が大部分だけれど、た  
まには、こんな会話もあつて楽しい。

「あんた便秘しない」

「するわ、メンスの前」

「あら、私は後なのよ、変ね」

「個人差があるって訳じゃない」

「今丁度そうなのよ、困っちゃう、もう三日  
よ、気持が悪くて。あんたどうする？」

「イチジク浣腸使うのよ、具合いいわよ」

「浣腸？ いやーだ」

「あら、どうして」

「恥ずかしいわ」

「そんなことないわよ、平ちゃらよ、自分で  
するんだもの」

「そりゃ当り前よ、でも——。あれお腹痛く  
なるんじゃないこと」

「ちっとも。軽くすぐよ」

「どこで買うの、恥ずかしくっていやだわ」

「下の薬局よ、平気よ、だったら買ってきて  
あげましょか？」

「そうね、じゃあとでお願いしようかしら」  
人の来る気はいに会話は、ここで終ってし  
まったが、心暖まる一時ではあった。

デパートのトイレはこうは行かない。判然  
と区別されているだけに女性用に猪介を掛け  
れば、痴漢と間違えられて警備員につまみ出  
されるのがオチである。

しかし、面白いのは、デパートのトイレの  
残留物だという。最も多いのはパンティだと  
か。新しいのを買ってはき替えてすててゆく  
のだろう。靴下、ブラジャーなども大方の想  
像はつこうというもの、ところが、指環ネッ  
クレース、さてはハンドバッグともなると、  
余程のあわて者とか考えられぬという。財  
布蝦蟇口の類は、中に金銭が入っていればあ  
わて者、ところが空の財布が実に多いという  
言わずと知れたスリの仕わざだ。

スリといえば万引団の暗躍も見逃せない  
という。ハンガーごとやるのだろう、婦人服売  
場のハンガー、丸帯の巻き芯、時計のケース  
等が、万引諸姉にとっては恰好の捨て場と相  
成り、掃除のオバサン達を、顰蹙させるとい  
う。一旦店内に足を踏み入れればお客様、ト  
イレ拝借だけなら愛すべきお客様なのだが。

トイレと言え、旅をよくする私に愛着が



あるのは国鉄のトイレだ。国鉄のトイレ談義も出つくした感はあるのだが、長旅にどうしても必要欠くべからざる上、それが衆人環視の中に、はっきりと、只今便中と明示されるのがたまらない魅力なのだろう。便所、手洗所、洗面所、TOILET、LAVATORY、WCと、国鉄の表示もややこしい。でもこれは駅の話、車内は便所に統一されているようだ。

さすが新幹線のトイレは一応行き届いている。一時、開かずのトイレの騒ぎはあったがスペースも充分、三面鏡、電気カミソリ用のコンセント、一応狭い車内としては及第ではないだろうか。貯留式なのもやっと近代化した証拠である。

貯留式といえば、従来のタレ流し式には困ったものだ。

「停車中は使用しないで下さい」は必ずしも守られず、そうでしょう、ローカル線の待避などは三十分も停車することは、その間我慢して下さいたって、冬の夜など、雪のホームを歩いて、ナイロンの靴下のお嬢さんなど、駅のトイレまで行けますかという訳。さしずめ、ホーム下のマクラ木の上が徒らに黄色くなる次第だ。

殊にいけないのが、時速九十キロのとはず飛沫だ。鉄橋、トンネル通過の際、窓から風が下から吹き上げてくるのは御承知の筈、前方のトイレからの落下物が細い霧となって吹き上げて来ない方が不思議である。美女の霧ならいいって、勿論そうでしょう。でも、いらぬお世話の話ながら、野郎も、皺くちや爺婆も乗っているのですよ。

大体、下車三十分前となると、大概の人はソワソワと準備をはじめ。殊に女の方にそれが著るしい。お化粧直しというやつだ。洗面所へ行く。大阪から東京へ、新幹線は別として、夜行の寝台急行など、丁度大船から川崎あたりが、そのピークだ。お小水も適度に膀胱に充滿し、場合によっては直腸にも昨日の食物が下りて来ようというもの。それが時速九十キロで、戸塚、保土ヶ谷、川崎といった通過駅のホームに立っている人々の顔にまともに、ぶつけられるのだからたまらない。京都——大阪でいえば、神足、山崎、高槻から吹田あたりまでの被害は、沿線の洗濯物まで色が変わるというから恐ろしい。

下らぬ話はよしにしよう。楽しい旅の車内の一駒といこう。さっきからハンドバッグの口金を開いて、モゾモゾしていた斜め前の年

の頃二十四、五の美しい女性、すべるように席を離れると、タイトスカートの腰の線を美事にくねらせて、通路を後の方へ、一六五センチはあろうかという、均斉のとれた身体を車内の眼は一斉に追う。中扉をあけて、左手はトイレだ。車内の沿線地図の上に取付けられたランプがパツとつく。

「只今便所使用中」

これではあまりに可愛そうではないか。横のチャックを下げ、お臍のあたりまでまくられたタイトスカート、ずり下げられたピンクのレースのついたパンティ、ハイヒールに体重をあずけて、今蹲がんだ彼女の体内から迸り出る液体が、列車の震動にもなあって、左右三〇度の角度をもって放射されるのが聞えるように、眼の辺り見えるように思えるから不思議である。

ランプが消えて、彼女の影が右手の洗面台の方に消える。誰です、すぐ席を立ててトイレに突進するのは。あ、向うの車輦から、連結を渡ってデップリした重役タイプの紳士が一足先にこのトイレに消えようとは。

もうしばらく、次のチャンスまで、奇くでも読んでいたらいいでしょう。



## 〈浣腸報告〉

### フリートエネマ

### 使用の記

栗瀬

長



「アメリカってのは、浣腸までしパンなんだなあ」

同志相集って、フリートエネマを手にしての感謝の声である。

フリートエネマって何だ。エネマファンの方ならもう知らぬ方はあるまいと思うが、未知の方の為に、その概要をお伝えしよう。

東京は日比谷のアメリカンドラッグにて発売されている輸入の軽便浣腸の名前である。軽便浣腸といえ、私達はすぐイチジク、オロナイン、ハート十字、ビワ、ウサギ等のあの可愛らしいイチジク形のものを想像する。

ところがだ、このフリートエネマときたら、そんな生やさしいものではない。その形は、注射用アンプル、いやビタミン剤のあのアンプルを極大にしたものと思って戴きたい。

今私の手元にあるフリートエネマ、それは乳児及び幼児用としてある。さしずめ、イチジクなら十グラムの小児用に当るわけだ。それが何と、

全長……十五センチ

嘴管……四センチ九ミリ

嘴管の直径……先端で六ミリ

基部で九ミリ浣腸液量……六十八ミリリッ

トル

というのだから驚くではないか。大人用となると、形態でこの一・五倍、容量は百二十ミリリットルとなるから物凄い。

「アメリカ人ってのはしパンだなあ」の声も無理ないと思う。

さて、このフリートを手にとってしげしげとながめよう。日本の軽便のようなマスコットの愛らしさはないが、何かグッと迫ってくるような迫力がある。良質、半透明のポリエチレン製だ。

まず嘴管にはやや硬質のキャップがはまっている。日本のように針で先端に穴をあける必要はない。そのキャップが、すぐにはぬけない。今を流行のタッパーウェアの食器のような一寸したひっかかりがあって、一寸力を加えようとすぐぬける。再びはめれば密閉するのにも心にくい。

さて、キャップをとれば、そのまますぐ肛門への挿入が可能だ。見よ、その嘴管には、ちゃんとワセリンがべったりと塗られているではないか。これには敗けたと言わざるを得ない。一同、ウーンとうなった次第である。

嘴管と本体の間には、ネジ部があって取りはずし自由、従って一旦使用後も、本体に薬



液を満たして再使用も可能である。嘴管部を本体から取りはずしてみれば、嘴管部基部に何と液の逆流防止装置がついている。ほんの一寸した心づかいが感ぜられて、さすがと思わせるものがあつた。

本品は、グリセリンではなく、蒸溜水に三〇%のリン酸水素ナトリウムを含有したもののことである。

能書きはこの位にして、次に、その使用感をのべて、ファン諸兄弟の御参考に供したいと思う。

大人用百二十グラムにはおそれをなして、お恥ずかしくも小児用六十八グラムの御厄介になることとした。マッカーサーの、日本人十二才論を思い出して不図おかしくなる。

さて、嘴管挿入、先にのべた通り、ワセリンがぬつてあるので。甚だ具合がよい、何の準備もなく、容易に挿入出来る。小児用ですら五センチ、異物挿入感がころよい。イリガートルの嘴管と同様の感である。

ポリの本体を押しつづす。中途の逆流防止装置が、かすかな抵抗となつて、一気に注入されるのを防ぐ。徐々に流入してゆくのが分る。これも一気の注入、即刻の便意、となつて充分な排便効果が得られないのを防ぐ、実

に効果的な方法かと思われる。

静かに二十秒程かかつて注入完了。同時に手元のストップウォッチを押す、一分二分、一向に便意が起らない。因みに、当日は体調完全。意識的に本日の排便を停止して、前日排便より約四十時間を経過していることを付記しておく。さて、次に順次、手元のメモ帳にメモした感覚を再録してみよう。

三分……ほのかなる便意を感じるも微弱。  
四分……やや便意あるも、簡単に我慢がで  
きる程度。

五分……便意はさほどないが、下腹部がゴ  
ロゴロとなる。

六分……便意やや強し。

七分……可成り便意強く、一寸力をこめて  
我慢する。便意遠のく。

八分……再び強し。我慢すると、腹がゴロ  
ゴロとなつて、便意遠のく。

九分……又、襲ってくる。一寸寒気に似た  
感じ。腹がなつて遠のく。

十分……一寸便意があつて、すぐ遠のく。

十一分……便意あまりなく、全般的に下腹部  
が張つて、慢性的微弱便意感が連  
続する。

このまま我慢を強制されれば恐らく相当長

時間こらえられそうだが、聊か面倒になつて排泄。長時間我慢したせいであろうか。この排便が実にスムーズに行われたのは、今迄のイチジク、グリセリン、ドナン、石鹼液、塩水、何れにも較ぶべきもない。ドナンの灼熱感、グリセリンの膨満感、塩水の鈍痛感等が全くなく、実験せる友人の一人が、

「実にソフトな感じですね」

といった、その「ソフト」が正にピッタリとするフリートエネマ使用感であつた。

我々エネマニアのコレクションは言うに及ばず、実際に便秘、痔疾等に悩まれる諸兄弟には、敢えてソフトな感ある、フリートエネマをおすすめしたい。

アメリカンドラッグで売っているが、入手困難な方の為にはお取次ぎしてもよい。

貴重なる外貨を消費して申し訳ない次第だがよいものはよいとして、素直に受け入れてもよいのではないだろうか。

終りに申し忘れたが、あまりソフトなため貴道具としてはやや物足りないの感、なきにしもあらずだが、あまり浣腸になれない御婦人を対象としてのプレイなどでは、結構我慢の表情が長時間楽しめるのではないかなどと空想して筆をおく。



## <告白>

# ふんどしを締めましょう



香 肌 雲 出

か だ は も いづ

二十才の女店員です。

学校の頃、出席をとる先生が、私の姓名を読み上げてから、ハッと赤くなったものでした。どの先生も二度目からは「出雲さん」と姓だけを呼びます。

「本名か？」とよく聞かれますが、ちゃんとした本名です。私は自分の名前に誇りを持っ

ています。

小さい頃、私は文字どおり『いつも裸』で育ちました。丸はだかではありません。可愛いふんどしを締めていたのです。

イタリヤの『砂上物語』というノンフィクション映画が、かくれた大入り記録を作ったようですが、あれはフランチェスカという女

の子役がビキニ形パンツひとつの裸で、そのパンツが、お尻の割れ目に深く食い込んでいるスチール写真のためだと思っています。私も胸をワクワクさせて見たのですが、あれは嘘でした。映画はブカブカしたふつうのブリーフでした。

私の子供の頃は本物です。父の識見と母の愛情がこもった小さなふんどしは、今では私の宝物です。時々とり出して虫干しをします。

色は白、真赤、黒、それに紺が主です。赤はおろしたてのまっかなのが、白は洗いざらして色が落ついたのが、黒とかすりは少し色があせた頃のが大好きです。

洋服向きの模様がいったのや、マンガのアヒルを刺繍したようなのは、ひとつもありません。ストリップパーのツンパではなくて、あくまでふだんの下着であり、そして上着でもある『ふんどし』なのです。

鼻すじが通って、目がクルクルした、かわいい女の子(!!)が、裸でふんどしを締めて遊んでいる、その全体が美しいのです。裸の女の子は景色の中のアクセント、ふんどしはその体のアクセントですから、ふんどし自体がゴテゴテとかざり立てである必要はないの



です。

形もすべてシンプルです。ビラビラのフリルがついたり、レースでふち取りしたようなものは、ひとつもありません。

標準型は前が逆三角形、後が巾二センチぐらいたて一本。男の水泳用バイクの型です。後の布は、横紐をくぐらせてからスナックで止めるようになっていきますので、紐をほどこなくとも用便できます。

次によそ行きのビキニ型。両よこで結びます。前も後も逆三角形です。小学校四年、娘になってからは、さらしのモッコふんどしを自分で作って使うようになりました。前も後も紐通しにしてありますので、デリケートな加減ができますし、必要なときは脱脂綿も入れられます。

中学に入ってから、試験のときなど、六尺を締めます。前だれをたらすこともあり、たらずにクーツと締め上げることもあります。

最後に母の愛用のサイズ。これは、半紙ぐらいのネルの一端に十束の黒い木綿糸を等間隔にとりつけて、その他端八センチのところを、ひとつにまとめて一メートルたらずの白い縄に結びつけたものです。ネルは濃い茶か

紺系統のがら物です。縄を腰にまわして前でむすび、布をうしろからくぐらせて、おへその上で越中ふんどしのようにはさむのです。海にもぐるときは、これが、いちばん快適です。こうら干しするときは、乾いたのと取りかえて、ぬれたのは岩の上にひろげて乾かします。

私が小さい頃は、都会の観光客はほとんど来ませんでした。夏はふんどしひとつ、秋はチャンチャンコの下から陽にやけた丸いおしりにチョココンとふんどしをのぞかせて遊びました。友だちは、みんな、うらやましがりました。おとなは、とてもかわいいと言ってくれました。

小学校へ行くようになると、さすがに外では服を着ましたが、ズロースをはいたことはありません。また、夏は家の中や人のいない所では、服をぬいでしまいます。

父も母もそうだったのです。父は、いつも六尺です。母は六尺か、サイズか、たまにモッコ型をしていました。家の中では腰までのチャンチャンコをはおっていることが多かったようです。人が来ると、柄物の腰まきをグルッと巻きつけて即席スカートにして応待します。へんな話ですが、ごはんの時、母が

立ち上がると、ふんどしをキュッと締めた茶色い大きなお尻が目の前に来て、おいしそうだな、と思ったことがあります。

ことわっておきますが、父母は決してヌーディストではありません。真裸なら犬猫も同じです。いちばん美しく、いちばんはたらかやすい、すぐれた服装を勇敢に実行した世界一のおしゃれだったと私は思っています。

私は、こうしてふんどしと裸の良さをよく理解するように育てられたのです。ふつうの女の子は、自分の顔はとも気にするが、かくれた所は粗略にあつかうのではないでしようか？ 私は全身が小麦色にツヤツヤしています。そして全身から健康な「肌香」が立ちこめています。

ふつうの女の子は、ズロースが多少不潔でも、その上に晴れ着を着て、平気で人前に出ることもあるのではないでしようか？ 私は、たとえ服を着ていても『いつも裸』の心意気です。ふんどしこそが本とうの衣裳だと思っていますから、それが、体から出たもののために汚れているようなことは片時もありません。

学校を出て、おつとめしてから、ほとんど服を着つづけていますが、それでもスカー



トの下、夏ならワンピースの下は心をこめて締め上げた洗いたてのふんどしひとつです。休みの日、素足に赤い鼻緒の下駄をはいて花もようの白いゆかたを着て人のいない磯へ出て、帯をといてパッとゆかたを脱ぐとき。ふんどしひとつの、本来の私が出て来ます。そして、栗色のお尻に、真白なT字形をクッキリと焼き込むのです。

話は変わりますが、アフリカの新興国の写真を見ると、文明の仲間入りをしたというので、暑いのにズボンをはき、背広を着て英語やフランス語をしゃべる黒人が威張っています。御当人たちは本気なのでしょうが、あんなのは、ちっとも美しくないし、およそ尊敬の心はおきません。ふんどしを締めて、胸を張った昔の黒人の方が、はるかに立派に見えます。

明治のはじめの日本人も、きっとあのとおりだったでしょう。錦絵で見れば、江戸時代の労働者は、日本橋のまんなかで、ふんどし一つで仕事しています。昔の郵便配達、飛脚はふんどしひとつで、街の中を走っています。おにいさんは着物の裾をからげて、お尻のホッペを丸出しにして、ふんどしの縦の布をのぞかせて歩いています。

明治のはじめ、正直な百姓をダメして金をためた人たちがズボンをはき、ネクタイをしめ、ふつうの日本人とは違うという証拠にしたのでしよう。そして、いつの間にか北極圏に近いヨーロッパの風俗が理想とされ、ふんどしや腰巻は下等なものとされるようになってしまったのです。

明治の文明開化は、日本から裸とふんどしを追放しました。そして、天皇や昔の大名をのさばらせました。不合理でみにくい風習を育て、美しく合理的な風俗を捨ててしまったのです。

映画を見ると、フランスやイタリアの若い女の人は、越中ふんどしなどより、はるかにふんどし的なビキニ姿で、日光浴をしています。テレビで見ると、共産圏の国立サーカスでも、女の人はお尻の割目に食い込むパンツをはいて、お尻を半分以上出しています。

一方、日本ではセパレート水着と言っても殆んどが、みぞおちの所にちよっとスキマがあるだけで、オヘソさえかくれる代物です。バレリーナもタイトの下に「はいてますよ」とでも言うように大きなズロースをはいています。ストリッパーさえお尻を半分以上かくすツンパです。

日本人がまねをして来た筈の白人女性が南太平洋ビキニ島の原住民に学んで、第二の顔お尻の美しさに目覚めている今日、日本ではアラビヤのチャドリよろしく、必死になってお尻をかくしているのです。

しかし、日本にも誇を失わない女性が残っています。舩倉島や対馬の海女さん、それに時折奇くに名のりをあげるお姉さま方です。この方々は女ながらもキリリとふんどしを締め、身を以て民族の誇を、人類の宝を守り伝えているのです。

私の母も、そして私も、粗末な服を着ていても、心をこめたふんどしをシャッキリと締めています。その誇りが、いつも私をばげましてくれまます。私と結婚する男の人に、私はお金も着物も学歴もさしあげられませんが、健康な肌香を、そして清潔なふんどしで守って来た、大切なものを捧げましょう。私の子供も、男女ともにふんどしで育てましょう。子供たちが娘になる頃は、日本は誇り高いふんどしの国になっているでしょう。さあ皆さん、ほんとうのオシャレなら、未来の流行の最先端に行くふんどしを締めましょう。

(おしまい)



# 昭和40年台風23号顛末記

## △暴風雨下の責め日記▽



森 中 雨 奇 男

その日、9月10日に台風23号は近畿地方へやってきた。

かねてから、暴風雨の恐怖にさらしながら

の責め折檻を企んでいた私にとっては、絶好のチャンスだ。

台風の襲来がもはやほぼ確実になった、そ

の日の朝。食事をとりながら、どういう口実を作って、台風襲来を告げるテレビのニュースを、おびえた目つきで見入っている、この可愛い妻を責めてやろうかなと思いをはせていた。そして、結局はよく利用する「朝食のまずさ」ということになっていた。

「おい、今朝のこの味噌汁の味は、これは一体なんだ。辛いばかりが能じゃないぞ」

「どうもすみません。つい、台風のニュースに気をとられていたものですから」

「何だと、台風のこわさも知らないくせに。」

一度教えてやろうか」

「えッ？」と一瞬考えた妻は、すぐにもう私のいつものくせ？に気づいたのだろう。おののきながらも、一度言い出したら、きかない私の性質にあきらめたのか。

「はい、よろしく教えて下さいませ」

とうなだれる。まあ、日常このような調子で責めのプレーを楽しむことが多いだけに、ツーといえばカーとくる。

「早く後片付けして、道具を用意しておけ。それから今日は、とくにWCへ行かせてやるから、早くしろ」

外は、もうかなり風雨もきつくなってきたようで、窓はガタガタなり始めている。



昼食の用意はできているなと念を押してから、責め道具に手をつけたのは、もう10時に近かった。いつもなら裸にさせるところだが今日は風雨にさらしてみようということで、まず、ふだん着の上からピンクのゴム引レインコートをつけさせ、フード、ベルトをきっちりさせて、白いゴムブーツを眼がわずかにのぞく程度に顔面に当てさせ、フードの上からぐるぐる巻きにした八猿ぐつわVを自分の手で例によってさせる。それを私が八検査Vしてから、レインコートの上へ男物の黒いゴム引雨合羽を着せ、両手両足には長い白のゴムブーツをはかせて、これで準備完了。

さて、まずは縛り上げた身を吹き荒れる風雨にさらしてみようということで、室内で嚴重に上半身をゴム合羽の上からロープで縛り上げてから、私も合羽を着込み、縄尻をとって雨戸を少し開け、裏庭へ出た。

庭はまず相当な台風がきても、ものがとんでくるような危険性は非常に少なくて済みますし、立木にでもつないでおけば、室内の窓から、その姿態を十分楽しめるような位置になっている。

妻を連れだした私は、高さが二米ばかりあるモミジの木の根もと近くの幹に、その縄尻

を結びつけ、丁度高手小手にしめ上げた後手から出ている縄をきつく引いて、まっすぐに立っておれないように、ひざをかなり曲げた姿勢になるように縛りつけ、その上でブーツの両足も全く自由にならないように、別に用意したロープで二〇センチほどなら動かせるように結びつけ、すぐさま室内にひきかえした。どうも表現がまずいので、書いてしまえば、それまでのことだが、風雨の吹きすさぶ中ではやく樹に縛りつけてきただけで、私の合羽の中もずくずくになった仕末で、ゴム雨具に身を包んだまま、自由を奪われた妻はさぞかし、もう風雨の恐怖と身体の痛み、冷たさにのた打ち始めたことだろう。

早速、室へ戻ると窓から、そのさまをのぞきにかかった。

ひざを曲げて縛られた妻の姿態を、正面からうかがうと、長目のゴム合羽が地面にひきずっているのを、強い風が襲う毎にめくれ上って、縛られた白いブーツがぬれて輝くようにのぞいている。もう完全に暴風雨圏内に入ったようで、立木がゆれるとともに、妻ののたうちが激しくなってきた。縛め上げられた上半身が痛いのか、足のしびれか、暴風雨の恐怖か、恐らくそれらのミックスされたもの

だろう。わずかにのぞく妻のびしょ濡れの顔の上半分からは、かたく目を閉じて、必死にこの台風のこわさを身をもって味わっているさまが十分にうかがわれた。

そのうちに風が次第に強まってきたのか、妻のよろめきは段々とはげしくなり、追風をお尻をつき出すようにして両足でこらえたかと思うと、逆風に前につんのめったり……。そして遂に足をとられてころんだ。もはや自力では全く自由がきかず、風に吹かれるままあちらへ、こちらへと少しずつころがされている。

こちらは室内だが、それでも台風のおそろしさを身にしみながら、用意された昼食をパクついたりして妻をうかがっていた。やがて妻のころんだ姿が窓から見えて背中向きになり、その表情が、うかがえなくなってしまう。失神でもしたか、また何か物でも当たったのかと心配になってきた。ビュービューとなりを上げて吹きつける雨風の音が、その心配に拍車をかける。いたたまれず、再び雨合羽をひっかけた私は、強風の合間を見つけて雨戸から、さっと庭にとび出し、ナイフでロープを切って、抱きかかえるようにして、妻の身体を室内にひきずり込んだ。



目を閉じたままの、ずぶ濡れの妻に「おい  
しかりしろ」と、どなりつけ、ゴム合羽の  
フードをとり、あわてて猿ぐつわのひもをゆ  
るめ、ブーツをはずして平手で打ちつけると  
眼を開けた妻は、「こわいッ」と悲鳴を挙げ  
る。やっと安心した私は、落ちつきを取り戻  
すにつれ、いままでの妻の姿態に次第に感情  
の高まりを覚え、中々、このままでは許すま  
い、まだまだいじめてやろうと考えた。

よく見ると、露出していた妻の額に、黒と  
赤の細い斑が一面に出ている。「黒」は砂利  
で、「赤」は比較的大きな砂粒などがきつく  
当ってにじみ出た血である。唇は青くわなな  
き、このまま更に責めつづけることは無理の  
ようだ。時計を見ると、もう正午。外はます  
ます吹き荒れているが、もう二時間近くも風  
雨にもてあそばれ、ゴム雨具にしめあげられ  
た哀れな妻の縄を一旦といてやり、濡れたも  
のを全部着かえさせようとしたが、全くもう  
グロッキーのようである。

ムチをとりだして追い立てながら、今度は  
しびれきった手でレインコートのオムツカバ  
ーをさせ、ズボンスタイルに着がえさせてか  
ら、また新しい紺のゴムレインコートを着せ  
軽く後手にしばって、熱いお茶をのませてや

り、スプーンで食事を与えてゆったりしてい  
るうちに、どうやら、暴風雨も峠をこしたの  
か、幾分やわらいできた。それでもまだ外は  
相当な雨風なので、外装は朝と同じように、  
ゴム合羽、ブーツをまとわせ、大きな枝をプ  
ラカードのようにしたものを背負うように縛  
りつけた。

「庭の中央で立っている、辛抱できなくなれ  
ば、坐ってもよいが、こらえられるだけ我慢  
しなければ、あとがこわいぞ」

とおどかして、雨戸をわずかに開けて庭へ  
追い立てた。こんどは、頭上に背負った大き  
な板が風圧を受けて、そのたびに妻はよろめ  
きながら、両足をふんばって必死にこらえて  
いるのだが、よたよたとしている。

そのうち、たえきれなくなつて、フラフラ  
とくずれるようにして、ひざから坐りこみ、  
板を地面につけて、大きく前かがみの姿勢に  
なつてしまった。プラカードようにした、う  
しろの棒が長くて、丁度お尻の下あたりまで  
になっているので、まっすぐ坐ることができ  
ず、ひざをついて前かがみになるか、ころが  
ってしまうしか、できないわけだ。

しばらく、そのまま放置して眺めているう  
ちに、ほとんど風雨もおさまってきたので、

雨戸をあけはなし 私もゴム合羽を着こんで  
ムチを手にして庭へおりた。

「さあ、立つんだ」と命じても、もはやその  
気力もなくなったか、不自然な姿勢で立つこ  
とが不可能なのか、ゴソゴソともがくだけで  
ある。ゴム合羽の上から、お尻をピチャピ  
チャと打つても、背負わされたものが邪魔をし  
て、ころげ回ってムチをさけることもできず  
わずかにゴソゴソもだえるだけである。

風雨もやみ、薄日さえさしてきた。

まだ許してやるまいという気になって、ム  
チのプレイはやめたが、今度はまだそのまま  
の姿で、大きな立木のところへ引き立ててゆ  
き、ぐるぐる樹にしばりつける。

一旦「くつわ」を解いてやり、水を一杯与  
えてから

「どうだ、少しは台風のこわさが判ったか」  
と顔を寄せて尋ねる。

「ハ、ハイ。恐ろしゅうございました。よく  
判りましたので、お許し下さい」

目深にかぶったフードから水滴をたらし  
ながら、うなだれて許しを乞う。

「バカをいえ、じっと立っているといったの  
に、よたよたと動いたのは何だ。少しも判っ  
ていない証拠じゃないか」



「でも、風が強くて、じっとこらえられなかったのです」。

「いい加減に立っておればよいという態度だからだ、一つも腹に力を入れて、ふんばっていなかったじゃないか。その性根がなっていないぞ」

横面に平手打ちを数発くわせてから、再び「くつわ」をきつく噛ませ

「しばらく、そのままよく反省してみろ、自分で反省できたと思ったら、身体をもがいてナワを切って帰ってこい。ナワをゆるめて

限定版写真集 第七集 完成！  
限定版写真集 第八集

長らくお待たせいたしました。二月上旬完成いたしました。今すぐお申込み下さい。折返しお送りいたします。

△美しき縛め△ 第七集

刺青の魅力を探ぐる

一部一、〇〇〇円 略号「美7」

△美しき縛め△ 第八集

女斗緊縛競艶写真特集

一部一、〇〇〇円 略号「美8」

おいてやるからナ」

といって（少しもナワなどゆるめずに）私は屋内にもどり、台風のと片づけなどしながら、時々妻の姿態を眺める。

折からの陽光に黒いゴム合羽の異様な姿を光らせて、ぐったりと立木につながれた妻。

コートのオシメカバーは、外からも内からもびしょぬれになっていることだろう。後手などは、もう感覚がなくなっている筈だ。

やがて夕方、縄目を切ろうと、ゴソゴソとゴム衣の音を立ててもがき始めた様だが、そう簡単には切れない。日もとっぷりと暮れて屋内からは妻の姿も、はっきりとは見えなくなって、その苦しむ姿を眺める楽しみのうすれてきた頃、庭へ下りていって、やっと解放してやった。

いつものことだが、屋内へ入っても、まだ濡れた雨装のまま、しばらくはどっとくず折れて、シクシクと涙を流しているだけ。やっと自力で着換えをし居間におちついたときはもう午後7時を過ぎていた。

夜おそく、夕餉の膳に差し向いで坐ったところで、またもや妻を朝と同じような完全ゴム雨装にさせビールの酌をさせます。お前も今日は疲れただろうといって、朝、猿ぐつわ

に使った白ゴムブーツをもってこさせ、ジョッキ代りにビールをのませたりして

「今日の態度はなっていないから、今度台風がきたら、この前の池へ連れていって野外で思いきり責めてやるからナ」

（註）以前に紹介したことのある宝塚近くの池のこと。

「もう台風だけはコリゴリですわ、このまま死んでしまうかと思いました。家でよく判りましたから、それだけはお許し下さい」

必死に訴えるような眼許を見て、どうやらよほど骨身にこたえたらしいと思い、早くまた台風がきたら面白からうにと、想像をめぐらす。

○

ところが、意外と早く、次の台風24号がやってきたわけだが（9月17日）、これが夕刻からの来襲であっただけに、人目を避けての野外でのプレイには、もってこいの絶好のチャンスであったのだが、誠に残念なことに、私が商用で家をはなれていたため、機会を失ってしまった。

妻はホッとしたかもしれないが、いつの日にか、素晴らしいプレイを堪能した上で、また紹介させて貰うことにしよう。

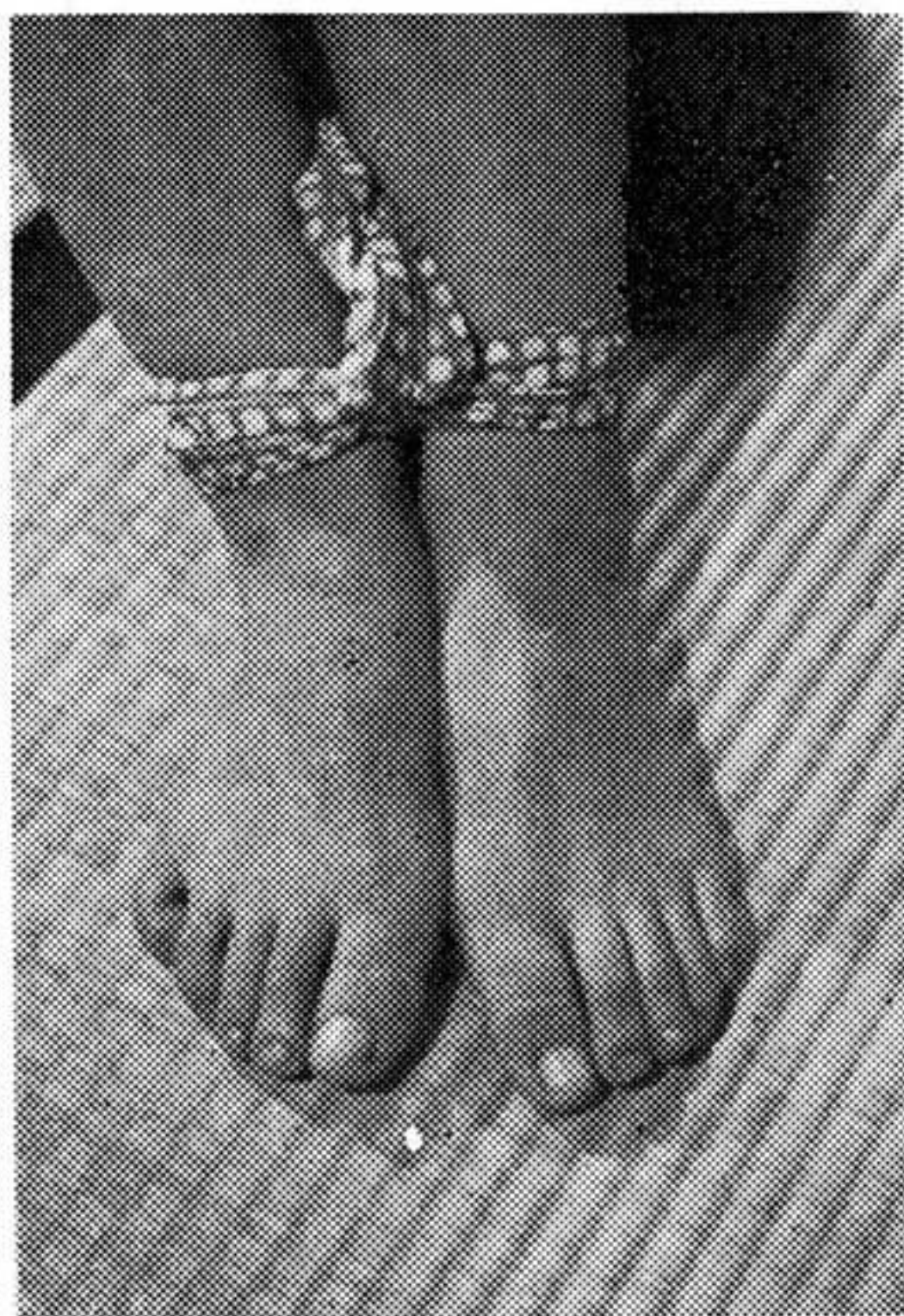
（昭和四十四年四月号掲載）



## <手記>

### 魅せられる足

志摩しげる



春ともなれば街を行き交う女性の素足が数多く見られるようになる。今まで冬の間、ストッキングや足袋に包まれていた真白い女性の素足を拝めることが出来るので、正にわが世の春といたいところだ。私はもの心ついた頃から、女性の素足に異常なまでの執着を持つようになった。

それは平凡な表現かも知れないが、牝鹿のようにすんなりと延びた肢、拇指から小指に可愛いく並ぶ指先の線がなだらかなカーブを

描き、それぞれの指先には桜貝をくつつけたような、形よく手入れされ磨かれた爪、丁度ギリシャ彫刻に見られるような足である。

足の形といえば、いつかテレビのスタジオ一〇二で、事件の犯行現場に残された足跡によって犯人の容姿（骨格、身長）職業まで、ほぼ確定的なところまでわかると画面に、いろいろな足形を写しながら、何十年にわたるその道のベテラン捜査官が説明しているのを聞いたことがある。尤もだなとうなずける。

私は美しくととのった足の持ち主に美人が多いように思う。足の爪先まで気を配り、美しくする女性は他の身体の隅々までが清潔にされ、その肌は大理石のようにスベスベと光り輝き、つきたての、お餅のように弾力がある。常に美的感覚に鋭く、自ら顔は目鼻立ち理智的であるだろう。顔はいくら綺麗でも足の穢く醜い女性は興ざめだ。

理想的な形の美しい素足の女性に出逢うとたとえ回り道にしても、思わずその足を追ってゆく私である。チラチラと盗み見しながらどこまでも追ってゆく。

この美しい足の女性を縛り上げ、海老責、吊し責、擦り責にしたら、あの素足は、その指は、どんな変化を示すだろう。

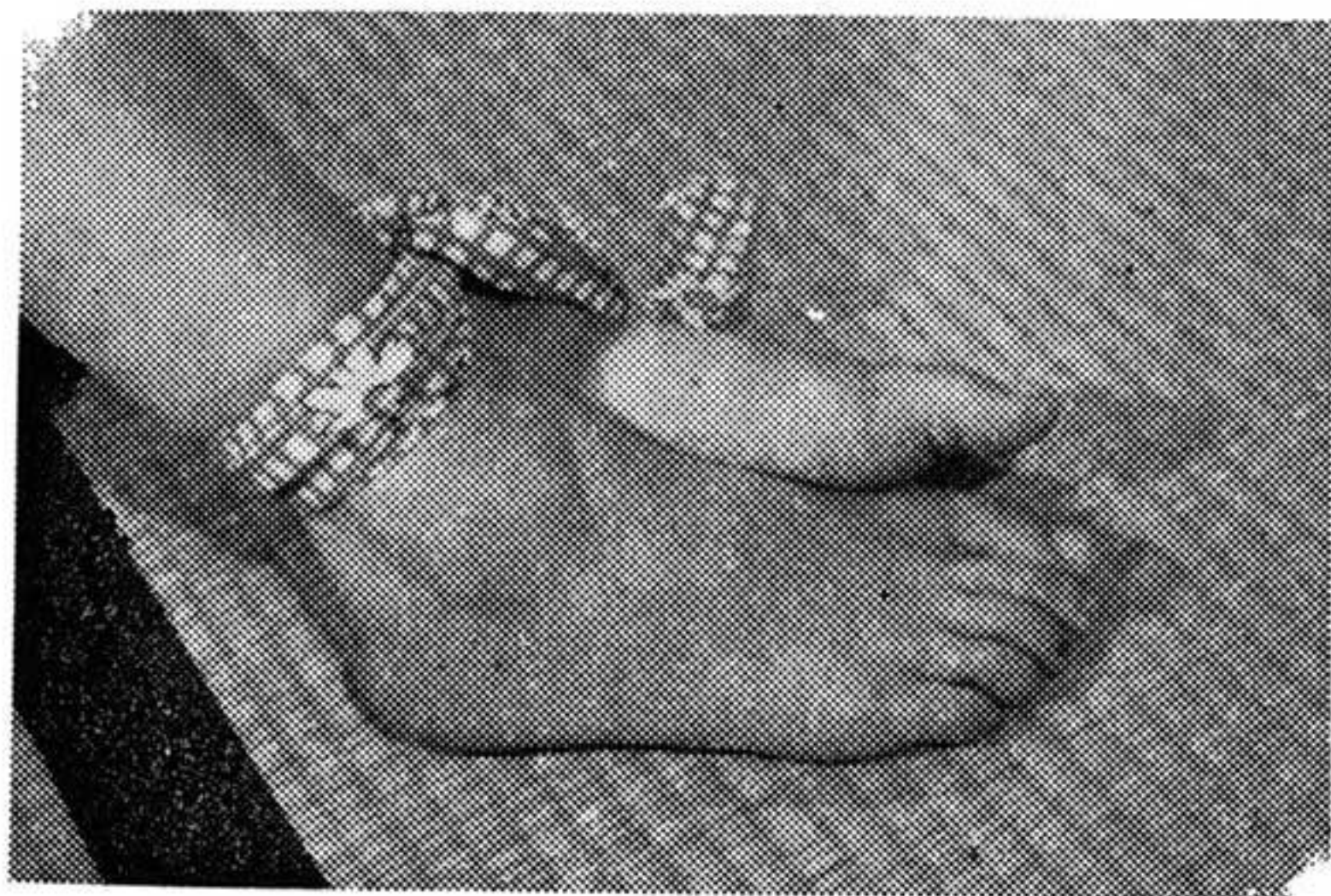
足に力が入り、縄の巻きついた足首はピーンと延び、拇指をくの字に曲げ、他の四本の指は足の裏側に折込むように曲げるのだ。あるいは二本の肢を前後に振り、各々五本の指はバラバラに違った方向をさし、空を蹴り躍りもがき苦しむだろう。その時の女性のイメージによって違った夢が果てしなく続く。

夏来たりなば又楽し、湯上りに涼をとる若い女性の浴衣姿。その裾から塗り下駄をはき夜目にも白く浮かび上った、すきとおるよう



な素足を見ると、思わず飛びつきキスは愚か、口いっぱい頬張り、舐めまわしたくなるのは、私だけだろうか。

印象に残っている映画で「越後つついし親不知」がある。ストーリーは抜きにして、後半のクライマックスで、主演の佐久間良子が嫉妬に狂った夫に、泥田の中で首を突込まれ殺される。そして泥だらけの良子を素裸にして川で洗い、山小屋に担ぎ込み、蕨を着せて寝かせる。その側で放心し生きている者に向うが如く話しかけている夫から、カメラは良子の死顔へ、覆いかぶさっている蕨へと移動するのだ。これまでと思っていたのが（今迄見たほとんどの映画では、足の先までは見せてくれないから）黒い土の上に真白な二本の脛が蕨よりスラッと延び、足首から爪先にいたるまで、画面いっぱいに写し出された。しかも、その被写体は動かない。息をのみ目を瞞る自分の鼓動が激しく波うつのかを感じた。その数刻後、良子の死臭をかいだ山蟻に夫が気づき、蕨の裾をはぐると、驚いた無数の大きな山蟻が良子の太股から脛、足首へと縦横に這いまわる無残なシーンである。そういえば、この映画では佐久間良子を実に残酷に取扱っている。



一、先ず雪の山中で、夫の友達（三国連太郎）にモンペをはぎ取られ、力つきて強姦される必死なシーン。

二、犯されて孕んだお腹の子を流産しようとして川の中に、ふるえながら、いつまでも身体を沈めている。また重たい引臼を油汗を

流しながら、唇をくいしばって長い間抱きかかえている。

三、前述の如く、自分の子でないことを知り理性を失い逆上した夫に泥田の中で（兩人共泥まみれになりながら）追い倒されて首をしめられ頭から泥中に没してしまふ。手は虚空を掴み、そして次第に力が抜けてゆく。夫に抱きかかえられた時には、目も鼻も口にもどろどろの泥で覆われ死んでしまふ。

四、山小屋で内股から足先にかけて無数の蟻に這回られ、いくら擦ったくても死人の役では動くことも出来ない。中にはかみつく蟻もいるだろう。つらい蟻責ではないか。

でも私にとっては、まことに素晴らしい映画であった。そして、あの美しい素足は、まだありありと思い出されるのである。

映画、テレビ、劇場においても、私のいつも注目するのは、若い女性の素足である。そしてその女性の足が見えない時でも、この女の足はどんな恰好だろうと想像するだけでも楽しくなる。今は、街を行く女性の素足の最も美しい季節である。若芽のように、剥玉子のように、長い冬の間に、暖くつまれた真白い素足が、今こそさんさんと降りそそぐ春の陽にまぶしく輝くときである。



## 〔告白記事〕

# ふんどし奥さん

亀山順子

ここ数年来化学繊維の発達にともなって女性の下着は一段と華やかさを増して来たようです。赤、青、黒、色とりどりのナイロンパンティ、胸を美しく見せるためのブラジャー、いろいろなデザインのスリッパ……。

でも、こうした時代の流れに逆らっている女、それが私なのです。パンティをつけずに赤いふんどしを締める女。そんな女ができてしまったのです。しかも一寸した言葉の意味をとり違えたために……。

### 一、年始まわり

「新年おめでとうございます。これが和男と結婚する順子さんです。どうぞよろしく」

「順子でございます。はじめまして」

挙式を春にひかえて私は夫になるべき人の

母と年始の挨拶に出かけていたのです。

「順子ちゃん、年始まわりも大変でしょ。でもこれで終りよ」

「本当ですわね、少し疲れたみたい。あら、お母さま、バスが来るわよ、私先に行って待ってもらうわ」

私はそういうと走り出しました。洋服の時と違って和服では裾が脚にまつわりついて仲々うまく走れませんでした。そのせいかなとうとうそのバスに乗り遅れてしまいました。

「お母さま、駄目だったわ、ごめんなさい」

「いいえ、それはいいけど、順子ちゃん、和服でそんなに元気よく走ったら駄目よ。見てごらんなさいよ裾が乱れてみっともないじゃないのよ」

ハアハア息をはずませながら裾を見ますと

裾が乱れて長襦袢がのぞいているのです。

「あら本当、恥しいわ」

その晩、私は和男さんの家に泊りました。「せっかく順子ちゃんが泊ってくれるのに、和男が新年会に出かけていて生憎ね。もうそろそろ帰ると思うけど」

「いいえ、お母さまと話していても、たのしいわ」

「あらあら、いいのよ、そんなに無理しなくても。ああそうそう、もう一度注意しておくけど、和服の時は今日みたいに走ったりしたら駄目よ。みっともないから」

「はい、お母さま、これからよく気をつけますわ。でもつい洋服の時みたいな身のこなしになってしまうのよ」

「この頃の若い人は、みんなそうだけど和服



の時でも大股に歩くわね。順子ちゃんが今いったみたいに洋服の時の、くせが抜けないのね。きっと、それに和服の時でもパンティはいてるんでしょ。だから洋服のつもりになっちゃうのよ」

「それじゃ お母さまは和服の時はパンティつけていないの」

「そうよ、和服の時は下着まで全部和装にしなきゃだめなのよ」

「でも、お母さま恥しいわ、パンティつけないなんて」

「恥しいから自然とひとやかに歩くようになるんじゃないの。私なんか夏ゆかたを着るときでも、パンティなんてはずずに下着はふんどしだけなのよ」

「あら、お母さまって、和服の時にふんどしなんて締めてるんですか」

「そうよ、順子ちゃんなんて和服の時でもスリップまで着てるんでしょ」

「ええ、それじゃ和服の時に、ひとやかに歩くために私もお母さまの真似して、下着はふんどしにしてみようかしら、でも何だか恥しいわね」

「私なんか、年寄りだから白いふんどしだけで、順子ちゃんなんか若いから赤いふんどし

が似合うわよ」

## 二、新婚旅行

「三月末っていったら、東京はもう春だけこの辺はまだ寒いからね」

「そりゃそうさ、東京よりもずっと北の方なもの」

私達、新婚の二人を乗せた列車は、まだ冬から抜け切れない北陸路を走り続けていました。新婚旅行は伊豆とか熱海とかいう平凡なところはやめて、少し遠出をしようということになり、夫が北陸路を選んだのです。

「北陸って何となく陰気な感じがするわね」  
「こんなところへ引っぱって来て、悪かったかな」

「いいえ、どう致しまして。日本にもこんなところがあるんだっていうこと見て歩くのたのしいし、私達は逆に陽気でしょ、だから平気よ。この辺って、夏でもそんなに暑くないのかしら、もしそうだったら、海水浴なんてできないわね」

「そんなことないよ、この辺だって夏になんば、やっぱり暑いよ。それに能登半島の輪島っていうところには、海女が居るっていうから、海水浴だってできるだろう。輪島の海女

っていえば、すごいスタイルで海に入るんだってさ」

「すごいスタイルって、どんな」

「普通の海女さんで、少なくともパンツみないなのははいているだろう。だけど輪島の海女はふんどし一本なんだって、それも小さいやつで、おへそも丸出しなんだってさ。一度見てみたいな」

「いやよ、ばか。エッチな人、でもふんどし一本の裸になるなんて恥しくないのかしら」  
「みんな同じようなスタイルなんだから平気なんだろ」

「女の人がふんどしなんか締めるなんて、おかしいと思わない」

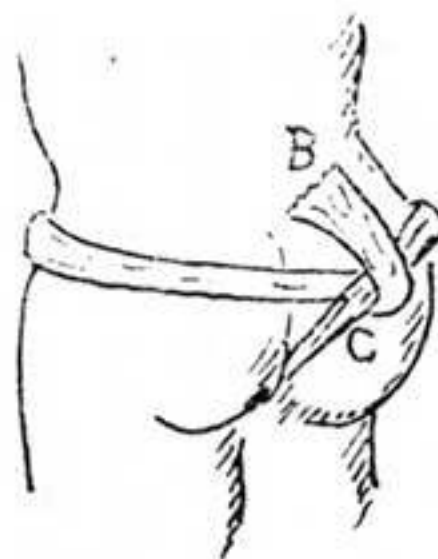
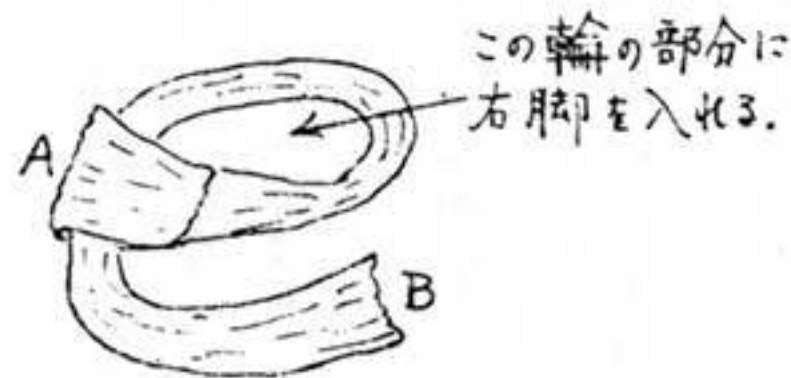
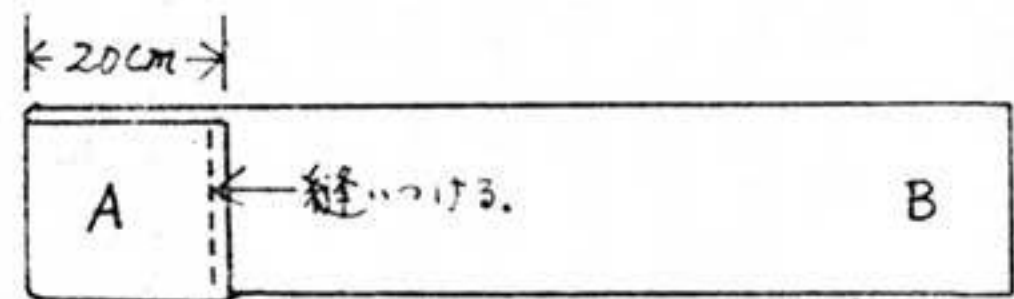
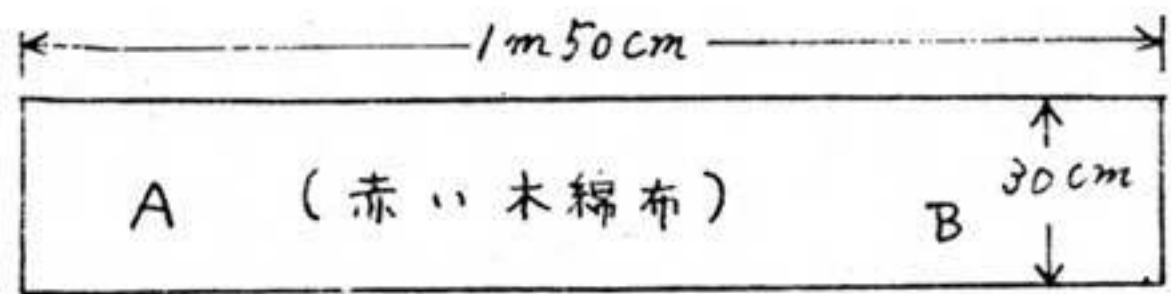
「女同志から見たらおかしいかも知れないが男性側から見たらちっともおかしくないよ。パンティだってビキニなんかだったら、ふんどしと似たようなもんじゃないか、和風か洋風かの違いだけじゃないか」

「そういえばそうね。それで安心した」  
「安心したって、どういう意味？」

私はそこで年始まわりの後での義母との会話を夫に話して聞かせたのです。

「それじゃ順子、お前、今ふんどしなんか締めてるのかい」





「あら、いやよ。汽車の中でそんな大きな声出したら……」

私は小さな声で白状してしまいました。

「ええ、私、パンティの代りに、赤いふんどし締めてるの」

### 三、ふんどしのデザイン

お正月に義母からふんどしのことを聞いてから偶然に和服も着る機会ありませんでし

のかもしれません。そしてその決心を実行する最初の機会が結婚式になってしまったのです。

私の式服は和服でしたし、新婚旅行にも夫の好みから和服の予定でしたので、当日家を出る時から新婚旅行に着て行く和服を着るつもりでいたのです。その朝少し早めに起きた私はネグリジェのまま、お化粧を済ますと着換えにかかりました。

た。もしあったとしても女性である私がふんどしを締めることに大きな抵抗を感じていたでしょう。でも結婚式が近くなつてから、義母と一つ家に住むようになってのだし、やはり義母のいう通りにしようと決心しました。お姑さんとあまり摩擦をおこしたくないという古い考えがあった

一口にふんどしといっても、いろいろな種類があるのですね。私は義母にどんなふんどしを締めているのか聞こうと思いつながら何となく言いそびれてしまい、洋服のデザインの好きな私はふんどしを自分でデザインしてみようかという気になり、本屋さんで百科辞典の立読みをして、ふんどしにいろいろな種類があるのを知りました。越中ふんどし、もっこふんどし、それに六尺ふんどしと、越中やもっこふんどしは締めたり外したりは簡単のようですけど、女性が締めた場合にゆるんだりして、みっともない姿になりそうで感心しませんし、そうかといって六尺ふんどしは、ゆるむようなことはないでしょうが、締めるのが面倒のようですし、百科辞典にも詳しい締め方など書いてありませんでした。

そこで私はもっこふんどしと六尺の合いの子みたいなふんどしを考えてみたのです。前からみると、もっこふんどしみたいで後から見ると六尺みたいに見えるものです。

私はタンスの引出しから昨日作っておいたふんどしを取り出しました。同じものを三本作ったのですが、二本は旅行に持って行くスーツケースの中にしまい、今朝締めるように一本残しておいたのです。ふんどしを作った



といつてもすごく簡単で、巾三〇糎ほどの赤い木綿布を買って来て、それを一米五〇糎ほどに切り、その片端Aを二〇糎ほど折り返し図のように袋縫いして、もっこふんどのようにひもの通る部分を作りました。ここにひもの代りにもう一方の端Bを通して片脚の入る輪の部分を作っただけのものです。

私はまだ家の人が誰も起きていないのを確かめると、思い切ってネグリジェをぬぎすて裸になりました。昨日ふんどしができたときパンティの上から軽く締めてみたのですが、素肌に締めるのは今朝が初めてなのです。右脚を輪の部分に入れパンティをはくときと同じように引き上げAの布が二重になった部分を下腹に当てBの端を引っばって腰に巻きつけます。この時布は端Aから股をくぐり後はお尻の割れ目から外れてお尻の右のふくらみを斜めに横切り右腰から下腹、左腰に周るようになるのです。次に端BをCにくぐし今度は端Bを逆方向に引っばって、お尻の割れ目に布がスッポリ入るようにします。そしてCの部分にBを結びつけるのです。

とうとう私はふんどしを締めてしまったのです。鏡台の三面鏡には赤ふんどし一つの私の姿が写っています。少し布が短かったの

かも知れませんが下腹の逆三角の赤い布はおへその下五糎ぐらいのところから上は覆っていないのです。後に手を廻すとピンポン球ぐらいの結び目が指に触れます。巾三〇糎ほどの布を絞って結んだのですから、このくらい大ききにはなるでしょう。

こんなふんどし一本の自分の姿を鏡で見るのは初めてですし、何となく恥しかったのですが、何か体がピンとするような感じがしました。少しくつく締め過ぎたせいもあるのでしょうが、二三步歩いてみると股に喰い込んだ木綿の布が肌を刺戟してくすぐったいようなしびれるような異様な感触で思わず、いやっと小さな声をあげ、両手を重ねてふんどしの上から下腹を押え、そこにしゃがみ込んでしまったのです。そのために異様な感触はさらに大きくなったようです。

でもいやな感触ではありませんでした。次にお話するように、いろいろ恥しい思いをしても結局ふんどしを締め続けるようになった理由の一つには、このパンティでは感じたことのない異様な感触があげられるのかも知れません。

#### 四、同音異義

たのしい旅行を終えて私達は三日ぶりに家に帰りました。さあ私の新しい人生が始まるのです。夫の家は八百屋をやっているのです。さしずめ私は八百屋の若いおかみさんと云うことになりそうです。

私達が帰った日、丁度定休日だったので義母にいろいろ旅行の土産ばなしをした後、夫はお風呂に出かけました。

「ねえ、順子ちゃん。和男が帰って来たら私達もお風呂へ行きましょうね」

「ええ、でも恥しいわ、私」

「あら、どうして」

「だって、お母さま、和服の時に下着はふんどしだけにしなさいっていわれたでしょ。それで私、結婚式の時から赤ふんどし締めてるの。お風呂屋さんへ行って、ふんどし一つの姿、他の人に見られるの恥しいわ」

「あら、そんなの平気よ、私だってふんどし締めてんのよ。母娘でふんどし姿になるんなら平気でしょう」

少し時間が早かったせいか、お風呂屋さんですいていました。

「はい、いらっしゃい。あら奥さん、この方  
和男さんのお嫁さんね」

「そう、さっき新婚旅行から帰って来たばかり



りなのよ」

「いやだわ、お母さま恥しい」

二つ並んだ脱衣籠の一つに、私は脱いだも  
のを入れはじめました。帯、腰ひも、伊達締  
め、そして長襦袢ごと着物脱ぎました。下  
には淡いピンクのテトロン製の半襦袢と裾除  
けを着ていたのです。薄い半襦袢を透して乳  
首がはつきり解ります。でもそんなことは恥  
しくなかったのです。

「お母さま、恥しいわ。こんなに人のいる中  
でふんどし一本になるなんて」

私は小さい声でいいました。すいていると  
はいえ、五、六人の人が着物を脱いだり体を  
拭いたりしていたのです。

「順子ちゃんて、恥しがりやね。じゃ私が脱  
がしちゃう。その裾除けの下にふんどし締め  
てんでしょ」

義母はそういうと、白ネルの腰巻姿のまま  
私の後へ廻ると、私の裾除けのひもをほどこ  
てしまったのです。私は裾除けが床に落ちる  
のと同じくらいの速さで床にひざをついてし  
まったのです。半襦袢は前が開き、下半身は  
あの赤ふんどし一つの姿になってしまったの  
です。

「まあ、順子ちゃんたら、ふんどし締めてる

っていったけど男の人のふんどし締めてん  
じゃないの。私がふんどしっていったの、お  
腰のことだったのよ」

私はこの義母の言葉を聞いて（義母もおど  
ろいたと見えて、ずい分大きな声だったので  
す）顔から火の出るような思いでした。背中  
に周囲のお客さんや番台のおばさんの視線を  
感じると、恥しさのあまりボーッととしてしま  
い、自分で何をやってるのか解らなくなっ  
てしまいました。そのせいか、ふんどしの結び  
目が仲々解けず。義母が手を貸してくれたよ  
うです。ボーッととしてしまって、こんなこと  
も覚えていないのです。湯舟につかってから  
「順子ちゃん、ごめんなさい。私の田舎じゃ  
男の人のふんどしも女の人の腰巻も一緒にし  
て、ふんどしっていうもんだから、ついお国  
言葉が出ちゃったの、ごめんなさいね」

「いいえ、いいんです。お母さま」

私はそうはいったものの、少し腹を立てて  
いました。それに人前で赤ふんどし一本の姿  
になった恥しさ、情なさで涙がポロポロ出て  
しまいました。

お風呂から上っても恥しくて早くその場か  
ら抜け出したい一心でふんどしはもとより、  
半襦袢もつけずに着物を着ると帯も締めずに

お風呂屋さんを飛び出してしまいました。家  
に帰りついて玄関を開けた私は、その場に泣  
き伏してしまいました。また恥しさがこみ上  
げて来たのです。

夫は何が起ったのかと、おどろいていまし  
たが遅れて戻った義母から事情を聞くと  
「ばかな順子、そんなことで、泣いていたの  
か。そんなこと一寸とも恥しくないじゃない  
か。旅行の時汽車の中でいったら、輪島の海  
女なんかふんどし一本で外歩くんだぞ。それ  
にくらべたら何ともないじゃないか」

「いいえ、私も悪かったのよ。順子ちゃんに  
良く説明しなかったんだから、順子ちゃんご  
めんなさい。許してちょうだいね」

いくらか興ふんのさめた私は

「いいえ、お母さま。私も悪かったんです。  
お母さまに良く聞けばよかったんです。気に  
なさらなくて」

「よかったね順子ちゃんに許してもらえて。  
でも女の人のふんどし締めてるの初めて見た  
けど可愛らしいわね。きつと順子ちゃんがス  
タイルいいからよ。お風呂屋のおばさんもそ  
ういったわよ、それに、とっても勇ましい  
わねって」



## 五、ふんどしの味

こんなことがあってから一週間程、私はふんどしを締めませんでした。それにずうっと洋服だったものですから。

でもふんどしのあのキュウツと体を引き締めるような感触を一度でも味わってしまった私にはパンティなどは締りのない不快なものになってしまったのです。そして夫や義母に気づかれないように、内緒でふんどしを締めてみることに何度かありました。

六月も末、暑さも本格的になって来たある日のことでした。夫は店番に出ていて、私と義母でお昼の支度をしていました。

「順子ちゃん暑いわね」

「本当ね、お母さま」

「暑いから洋服脱いじゃおうかしら」

義母はそういうと、ワンピースを脱いでスリッパ姿になってしまったのです。

「順子ちゃんも裸になんなさいよ。家の中だから平気よ」

「ええ、そうしますわ」

あまりの暑さに私は、ついうっかりして、そう返事をしてスカートを脱いでしまったのです。ふと振り返った義母は、

「あら、順子ちゃん、洋服の時でも、あのふんどし締めてたの」

私はしまったと思ったのですが、もう遅かったのです。ふんどしを締めていたのをすっかり忘れていたのです。白地のほとんど透明なスリッパのナイロン地を透して赤ふんどし一本の私の下半身が見えているのです。

「これから暑くなるし、ふんどしだったら涼しくっていいじゃないの。別に女の人がふんどし締めたって悪いことしてる訳じゃないしさ、私らの若い頃はパンネットなんて、なかったからアレの時はT字帯っていう越中ふんどしみたいな使ってたんだし、そんなに遠慮してないでもっと大ぴらにふんどし締めなさいよ。ふんどし奥さん。ウフフフ」

「いやだ、お母さまったら」

それから一カ月ばかりの間に、私のふんどしは家の中では大ぴらになってしまったのです。丁度暑い季節だったためもあった、夜寝る時もネグリジェの下は赤ふんどし一本だったり、時にはネグリジェも着ずに素っ裸に赤ふんどしというスタイルだったり、そしていつの間にかタンスの中からパンティがなくなってしまったのです。

それから一年の間には家の外でも平気でふ

んどしを締めるようになってしまいました。細身のタイトスカートのお尻のところにふんどしの結び目が盛り上っているのも、物干竿に洗濯したふんどしを干すのも気にならなくなりました。そして、泣き出す程情けなかったお風呂屋さんも平気になり、人前で立ったままふんどしを締めるのも平気になってしまいました。

### あとがき

人間は秘密をもつと何となく他人に話したくなるものだといえます。ふんどしを下着にしている私、それを他人に知らせることが恥しかったのは何年前か前の話。今は何か誇りのようなものを感じるのです。ふんどしを締めて生活している女がいることを誰か知らない人にも話してみたい、そんな気持ちの私がふとしたことから奇クを見つけたのです。

こんな告白を書いたのは夫や義母には内緒です。もしこの告白が活字になったら、その本をそっと夫に見せるつもりです。

「私と同じような人もいるわよ」

あんまり私の過去と似ているので私がいいたのだとバレてしまおうかしら 仮名で寄稿したのですけど。



# 読者ポスト



激励してくれるものでした。復刊した奇譚クラブも、単なるSMを追うことなく、文化史的に意義のあるこの分野に力を入れて下さい。また読者の方で、実際に当時殉国の切腹をとげた方々についての目撃、伝聞のある方は、是非お寄せ下さい。往年、私の文章で親友の切腹を投書して下さいました愛川さん、また切腹実話を読んだ夜は眠れなかったと投書なさったナースの方、今も記憶にあります。(京都 中康弘通)

○奇譚クラブの復刊をよろこぶ者です。かつての奇譚クラブは、田谷敬生氏をはじめとして多数の人々が、太平洋戦争終結当時の内外地における婦女子および軍人の壮烈悲愴な切腹目撃談を投じ、またそれに対する真面目な感想が寄せられました。二〇年十二月、GHQのアダウチ、ハラキリゆえの忠臣蔵ら禁演令以来、切腹の歴史・文芸・芸能・事件の資料をあつめ、迷作を続けてきた私にとって、これらの目撃談や伝聞談、それに対する感想文は、貴重な資料であると共に、いつも私を

○奇譚クラブも復刊第五号ノ 五冊とも毎回購入し、段々内容の良くなっている事に、大変嬉しく思います。はっきり言って第一号の時には、勢い込んで購入しただけに、落胆も大きく、こんなものならと、次号からの購入を止めるつもりでした。しかし、本屋の前を通って奇譚クラブの新刊が出ていると、ついなんとなく購入していたのです。第二号目の時は、旧奇譚クラブのあの喜びを忘れられず、ひよっとしてなどと望みをかけて購入しました。第三号目の時は、一号、二号の落胆にお金をどぶに捨ててするような気持ちで、ほんの小さな望みだけで、本を手にしていました。しかし、その第三号目から次第に良くなり始め、今思うと、続けて購入していて本当に良かったと思っています。第三号目のグラビア

写真などは特に良く、本を開いた途端、思わずドギツとさせられました。それから第四号、第五号と、段々良くなってきて、これからも休まず購入し続けるでしょう。旧奇譚クラブに較べたら、まだもの足りない気持ちもなきにしもあらずですが、他のこの種の雑誌よりはまだまだだと思います。色々言いたい事を書きましたが、こんな私のような方々も他にいらっしやると思うのです。ですから、そんな方々や私のために、これからの雑誌づくりをがんばって下さい。そして、いつか、百%すばらしいと思えるような雑誌になる事を、心から祈ってやみません。よろしくお願いします(愛知・旧奇譚クラブをしのぶ者より)

○第五号奇譚クラブを読んで、大変感動致しました。なつかしき旧奇譚クラブのスター嬢達のフォト。わずかに数頁だけでしたが、ひと味違う雰囲気、どんなに本全体の雰囲気までが変わる事でしょうか。復刊の奇譚クラブを購読していらっしやる方々の多くが、私のように旧奇譚クラブを愛読していたという方々だと、私は想像するのでございますが、たぶん皆様も感激された事でしょう。これからもどんどん載せて下さい。また同時に新しい奇譚クラブのスター嬢を育成して下さい。お願いする次第でございます。さて、話は変



わかりますが、毎回、カラーのSMイラストを書いているらしやるたつみ良行氏の絵でございませう、大変すばらしいと思います。脂肪のたっぷりついた女性から漂う、あのエロチックな雰囲気。一種独特な何ともいえない甘さとおかしさ。今までの画家にはない雰囲気。私をとりこにしてみました。前号の、やせた男性が大きなお尻に踏みつぶされ、板のようにつぶれているあのイラストなど、つい声をあげて吹き出しておりました。カラーゆえになおさら良いのでしょう。SMというとい暗い雰囲気になりがちでございますがそんな欠点はみじんもなく、かと言って、迫力は充分にあり、すばらしい画家の発見をなされた編集の方々に感謝かつ期待を持ってやみません……。では、今後の貴社の御繁栄と、編集の方々の御健康を祈ってペンを置かせていただきます。雑文で失礼致しました（大阪いち奇譚クラブファンより）

○たった一ページでしたが、『美剣士・暁の自刃』、とっても嬉しく思いました。私も切腹願望マニアの一人です。今までは切腹写真という、どこの雑誌社でも嫌われ、載せてもらった事など、私の知る限りでは一度もありませんでした。それが、そのうえカラーとなって載っているのです。思わず身体が飛びはねんばかりに驚きました。私もマニアとしては人並み程度に、写真を収集しています。又、自分で撮ったりもしました。しかし、その一枚もこんな形でおおやけに公開されたことがありません。雑誌社に持ち込んでも、はねのけられていたからです。それなのにこうして、カラーとして載せて下さって、奇クの編集長に感謝感激です。私の手持ち写真ではないですが、同じ切腹マニアとして、自分の手持ち写真が載ったと同じような嬉しさです。（多小は、やはり自分の手持ち写真も載せた……、という気持ちか？誰かは知りませんが、この載せてもらえた人がとってもうらやましい……）。今後もこれっきりなどとは言わず、一頁づつでいいですから、切腹写真を載せて下さい。そして、私の手持ち写真もいつかはきつと載せて下さい。そうになったら、切腹マニアとして、死んでも本望です。どうかよろしくお願いします（神奈川・三島ユキオ）

○おこがましいとは思いますが、奇クに対して、少々一言。号が重なるにつれて次第に重みのある内容になっている事は、大変喜ばしい事であると思うのですが、やはり、最初からの思いである、小説等は必要ないと思うのですが……。奇クはマニア雑誌であるべきです。マニア雑誌ならば、全ページマニアの投稿でうまっているべきです。プロの入る余裕などあるべきではないのです。毎号でのプロのSM小説など、やめるべきではないのでしょうか。もっと強く言わせてもらおうならば、一五〇頁弱のうち、小説にとっている約半分の頁がもったいない。その部分をマニア投稿にしてももらえたら、どんなにかいいか……。プロのSM小説など、他の雑誌であきあきしている私、いやそう思っている他の人々のために、本当の奇クの姿にして下さい。どうか。この願いを現実に……。 （東京・S）

#### \*編集部より\*

「倒錯愛のメッセージ」欄を廃止し、読者間の文通、交際はすべて「読者ポスト」欄を通じて行なうことになりました。回送のお手紙の出した方は左記の規則を守ってください。

※回送する手紙の封筒のオモテに掲載月号と相手の名前をエンピツで記入する。  
※回送する手紙には必ず切手を貼る（送料に注意）

「読者ポスト」への投稿をお待ちしています。



## 編集室ノート

○昭和初期の傑作地下本として一部のマニアには知られている松山雨山の小説「蜘蛛と蝶々」(原題「崩壊」)を今月より連載。必死の逃亡を企てる男と、次々に貞操を奪われていく女たちとの愛憎描写は見事であり、必ずや読者の心を奪うに違いない。

○今月は、旧号を入手できない読者のために旧号掲載の投稿作品を数篇、特集してみた。

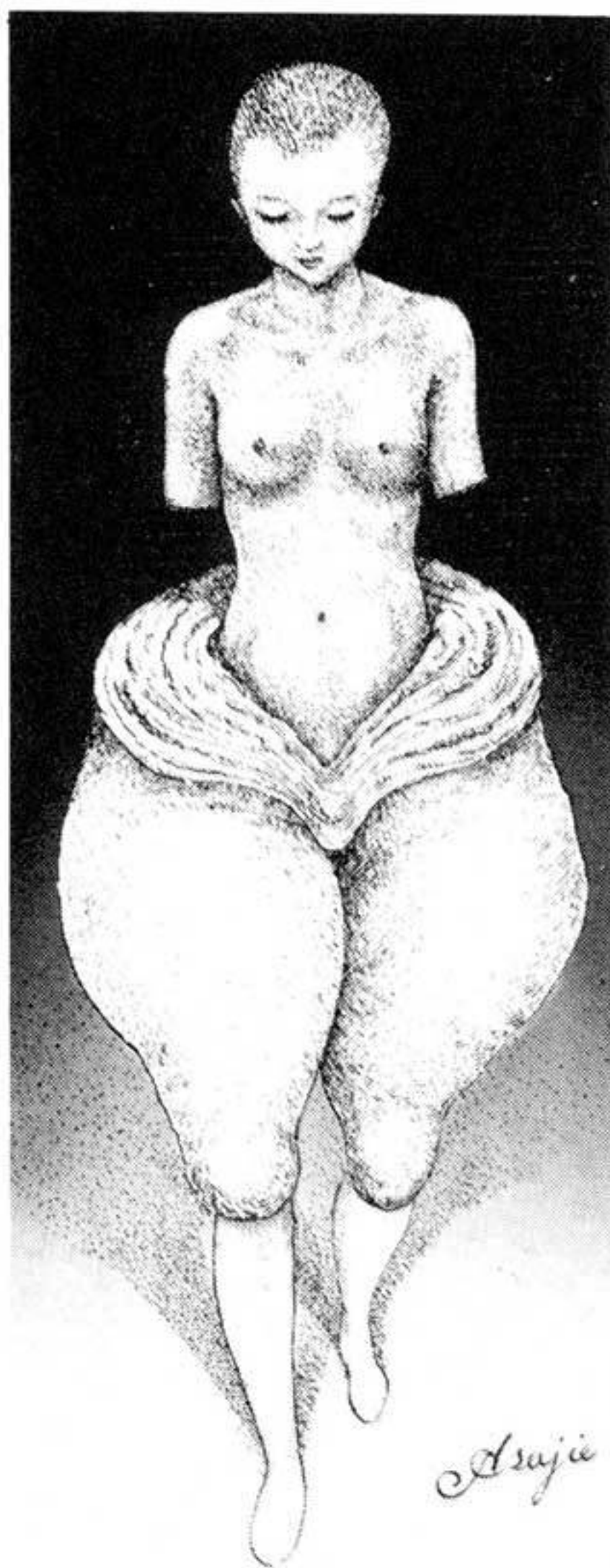
いづれも十年以上も昔の作品であるが、そのみずみずしさは失われていないばかりか、マニアの原点を知る上で貴重である。今後も続けたいと考えているので、ご希望のテーマ

(SM、フェチ、妊婦、切腹モノなど)があれば、ご一報願いたい。

○SMの真髄は、太平の惰眠を貪る現代人の日常を根底から揺さぶる「狂気」の中にこそ在る。いわば、確固たる「破滅への意志」がなければ、本物のSMと出会うことはない、といえよう。この「狂気」こそ、SMの原風景であり、その情念を胸中深く秘めた者にのみ、SMの何たるかを知ることができる。今月は、そういう「狂気」に満ちた作品を、いくつか紹介できた、と思う。

——お知らせ——

名称及び住所が変更となりました。投稿、連絡の宛先にご注意ください。なお、連絡、問合せなどはすべて文書にてお願いします。※直接購読のお申込みは「きたん社」へ



## 新人求む!

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品(小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など)を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真(水着またはヌードの立姿)と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会